ISSN 0389-9047

木村蒹葭堂貝石標本

江戸時代中期の博物コレクション

大阪市立自然史博物館
収蔵資料目録第十四集

1982

木村蒹葭堂貝石標本

き むら けん か どう ばい せき ひょう ほん

江戸時代中期の博物コレクション

大阪市立自然史博物館
収蔵資料目録第十四集

1982

谷文晁筆　木村蒹葭堂像

大阪博物場旧蔵・大阪府教育委員会蔵・重要文化財

写真は大阪市立美術館原図　大阪府教委文第1043号にて写真掲載承認済

貝類標本の入っている漆塗りの重箱(七重)
うしろの提げ台に載せて運ぶ

奇石標本の一部　柿材で作られた重箱（六重）に入っている
右側は第一段目　左側は第二段目

はしがき

益富寿之助博士の御厚意によって、この愛すべき石と貝の標本が大阪市立自然史博物館へ届いたのは、思えば今から８年前、昭和49年早春の夕暮であった。

大阪のほこる文人学者　木村巽斎（蓼莪堂）の石の標本一揃が、奇しき運命を辿ったのち京都で発見されたのは、さらに５年を遡った昭和44年である。ついで貝の標本も見つかり、その後これらは発見者　益富博士の日本地学研究会館で至宝として展示されていた。私達はこの美しい標本を眺めて、当時の大坂の博物家たちを、どんなにか偲んだことだったろう。大阪の人々にも紹介したいと、当館主催で開いた、さる百貨店での鉱物展に出品していただいたこともあった。

大阪の梶山彦太郎氏を通じて、“この標本を大阪へ”との思いがけないお話しを載いた。直ちに御自宅へ頂載にあがり、この江戸時代の標本類は当館の所蔵するところとなったのである。ようやく『木村蓼莪堂貝石標本』として、その内容を報告するまでに漕ぎ着けることができた。

木村蓼莪堂は江戸時代中葉の大坂が生んだ偉大な本草学者である。物産学にも関心があり、また絵画、茶道にも通じた一流の文化人であった。幕府や諸藩お抱えの学者ではなく、家業の酒造業を営み、その余暇を学問にはげんだ町人学者であった。彼はただ書物による学問だけでなく、古書・金石や博物資料を収集し、それらを同学・同好の人々の研究に役立てた。東西の多くの文化人や学者が蓼莪堂のもとに立ち寄ったようである。当時の大阪の文化性と町人学者としての彼の偉大さがしのばれるのである。

日本では本草学と物産学はナチュラル・ヒストリー（自然史）の本流であった。彼が収集し友人たちに公開したコレクションの一部がその生地の大阪にもどり、わが自然史博物館に伝わり、永久に保存されることになった。そしてここに、町人学者の気質と伝統を身をもって受け継がれている益富寿之助・梶山彦太郎両先生御執筆による報告書が刊行されるにおよんだことは、大阪市民にとってこの上ないよろこびである。

益富博士のお話しによると、野上裕生博士と松本英二博士の御配慮が無ければ、標本は永遠に失われるところであった。また野上博士と亀井節夫博士は、この標本が当館へ収蔵されるにつき、心よく同意して下さった。これらの方々の注意深い配慮と御好意に深謝の意を表したい。

本書を出版するに当っては、益富博士は多忙な時間をさいて、このコレクション解説とリストを執筆して下さった。梶山彦太郎氏は、まっさきに原稿を執筆し、編集に当る館員を激励して下さった。貝類標本は幼貝を多く含み、磨滅したものも多い。標本の同定には困難が予想されたが、梶山氏と金子寿衛男氏は共にこの作業を長期間にわたり続けて下さった。また、鍋島靖信氏は石灰藻の同定を引受けて下さった。

益富博士と、これらの方々により、本書は刊行することができた。心からお礼申し上げる次第である。

昭和57年２月18日　　館長　千　地　万　造

目　次

蒹葭堂奇石コレクション(京大号)について
益富寿之助…… 1
木村蒹葭堂蒐集と推定される貝類標本について
梶山彦太郎……19
貝類標本収納の標本箱 ……37
木村蒹葭堂蒐集と推定される貝類標本の種名目録
金子寿衛男・梶山彦太郎ほか ……39
貝類標本に付属していた古目録……63
木村蒹葭堂略年譜(博物学関係)……67

蒹葭堂奇石コレクション(京大号)について

益富 寿之助*

目　次

Ⅰ 蒹葭堂奇石コレクション発見の端緒…1頁
Ⅱ 蒹葭堂奇石コレクション確認のプロセス…2頁
Ⅲ 蒹葭堂奇石コレクション故郷に帰る…5頁
Ⅳ 蒹葭堂奇石コレクションの外観と内容…6頁
Ⅴ 木内石亭の奇石産誌と蒹葭堂の日本石譜，とくに日本石譜のオリジナリティ……14頁
Ⅵ 謝辞…15頁
Ⅶ 参考文献…18頁

Ⅰ 蒹葭堂奇石コレクション発見の端緒

ここに述べる蒹葭堂奇石コレクションは，昭和44年1月4日突然，“誰れが蒐めたものか判りませんが，こんなものが教室の物置から出て来ました”と，京都大学理学部地質学鉱物学教室の松本英二君の手によって私のところへ届いた．これは同教室の野上裕生氏のお指図によるもので，当時江戸中末期の奇石愛玩の流行に興味を抱いていた筆者に，ひょっとしたら何か役立つかも，との同氏の機転で，日頃繁く私方に往来していた松本君に託されたのである．これがこの貴重な資料発見の端緒である．

このコレクションは両腕で抱きかかえねばならない位の大きさで京大から我家までどうして運んだか多分タクシーで運んだと思われる大きさと目方をもっている．黒塗りの被せ蓋を除くと6段重ねの重箱が現われ，蓋をとると碁盤目に仕切られた桝形の中に美しい石の標本が綺羅星の如く輝いていた．各段を一通りみたあとで，蒐集者の名を知るべく，松本君と2人で重箱の隅々，外箱の裏表，入組標本に貼られた小紙片，石を包んだ小さな紙片に至るまで丹念に探索したけれども徒労であった．

ところがフト，ひょっとして底枠の裏にでもと思って重箱を全部取り払って裏返してみると，驚いたことに墨黒々と“櫻井藏”との署名があり所蔵を明かにされていることを発見した．この人のコレクションだったのかと一旦はそう思ったが，この署名の筆跡は，あの石に貼った小紙片に認ためた石名や産地の筆跡とは大きなちがいがある．従ってこの標本は後世に至って桜井氏の有に帰したが，蒐集したのは別の人物であろう．なんとかしてこの覆面の人物を探し出さねばと，心に固く決意をしたのである．

この桜井という人がこの標本の蒐集者でないとすると何時の日，このコレクションの主が判明するか判らない．コレクションの中味のグレード，重箱や外箱への金（経費）のかけ方などから推察して筆者がこれ迄に親炙したどのコレクションと比べても遜色のない内容と外観とを兼ね持つものと思われ，これだけのコレクションを残す人物は石の知識に於いて相当高く，量はともかく，質においては，東海道名所図会によって大きく世に紹介された草津の宿に程近い木内石亭小繁のそれに迫る如き感がした．生活の程度は，山田浦の小港の代官の養子として迎えられたがその性格が権柄を好まないため，ほとりの小庵に別居させられていた小繁のそれとは恐らく月とすっぽんほどのちがいを感じさせられるほど，生活の豊かな人物に

＊ 日本地学研究会館館長　薬博　〒602 京都市上京区烏丸出水西入

相違ないと思われた。しかし直ちにこのコレクションの主として白羽の矢が立てられる人物はどうも大阪の木村蒹葭堂が一番臭いナーと思う程度にしか嫌疑がかけられなかった.

それはともかく折角重い荷物を運んでくれた松本君，それにわざわざ筆者に届けさせられた野上氏のご厚意に感謝するとともに，なんとかしてこの標本のコレクションの主を探し当てんことを約して，この戸籍不明の標本は我家の養子として迎え入れられたのであった.

Ⅱ 蒹葭堂奇石コレクション確認のプロセス

この一小事件のあった昭和44年の正月までに筆者が見たことのある古石コレクションは，下記の如くで，蒐集者は職業，趣味の方向によって，本草学的傾向の見られるものと弄石趣味のものと多少のちがいが感じられるが，然しその当時としては多くは身分ある人々である.

1．森野賽郭古石コレクション（少数）奈良県宇陀郡大宇陀町　昭和34年6月調べ
2．服部未石亭古石コレクション（多数）滋賀県甲賀郡石部町　昭和34年10月調べ
3．西遊寺鳳嶺古石コレクション（考古資料多し）滋賀県草津市木川，昭和35年調べ
4．山本亡羊，愚渓古石コレクション（少数）京都市下京区油小路通五条上ル　昭和41年頃調べ
5．石山寺尊賢僧正古石コレクション（多数）滋賀県石山寺　昭和41年12月調べ

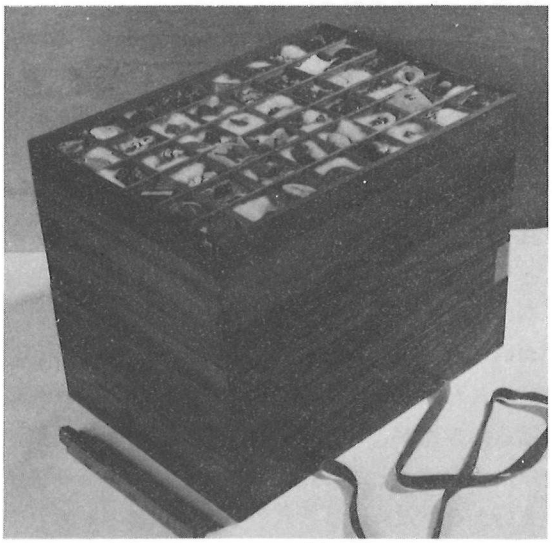


写真1　蒹葭堂奇石コレクション（京大号）の全貌.

上記の標本も保存の状態は常に完璧とはいえず，細字で石名や産地が墨書されて石に貼られた小紙片は，多くは虫害によって消滅したり，或は糊の変質か物理的原因で剝離して行方不明となったものが非常に多い．従って入組の石の古名（ここでは石亭小繁の著，雲根志が石蒐めの流行した江戸中末期のテキストに当るので，雲根志名ともいう）が不明のものが一部ないし大半に及ぶのが通例である*.

此度我家の養子となったコレクションもこの例に漏れずで，入組石数の半分以上は，昔貼ってあった石名，産地名の小紙片が何かの原因で無くなっており，昔通りに復原するなどは，思いもよらぬことである.

しかしこのコレクションの主の詮索には，石に貼られた小さな墨書の筆跡の鑑定だけが残された唯一の望みである．このような小紙片よりか，石を包んだ紙にサラサラと水茎も鮮かに書いたものでも見つかれば更に御の字というものだ.

さて当日に松本君から耳にしたのは，何でもこの石の箱は貝の一ぱい入った箱と一緒に，大阪に空襲の危機が予感される昭和20年のはじめ頃に，より危険の少ない京都へ持って来たものらしい．戦後も久しい現在，持って来た人も未だ現れず，受け取った人(多分教授の誰か)も亡くなられたのだろう．唯一の同教室の助手をしておられた加藤某氏も，確たる記憶がないということだった.

筆者にはこの大阪というのが，どういうものか蒹葭堂と響きがこだまして帰って来て仕方がない．蒹葭堂の名声は町人の街，大阪の産んだ稀代の知識人として早くより承知しており，石亭とは幼少の頃から交渉もあって，石のコレクションもあると仄聞するが，それを実際に見たことはなかった.

*誰かの集めた古石の調べで，名称を記した紙片が虫害などで無くなっている場合はこの標本は史的考察にも，雲根志の実物考証の役にも立たないから無価値と断言できる.

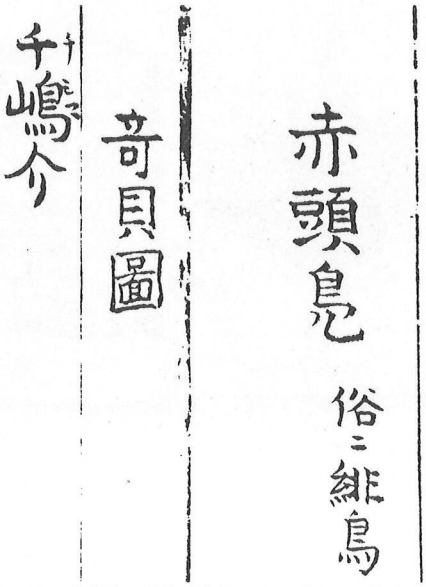


図1．右：蒹葭堂の稿本「禽譜」中の「赤」の筆跡に注意．これは写真1の「赤貝石」の筆跡に似ている．左：同じく稿本「奇貝図譜」の「貝」の字の筆跡に注意．
（両者とも，大正15年　高島屋蒹葭堂会発行　蒹葭堂遺物から引用）

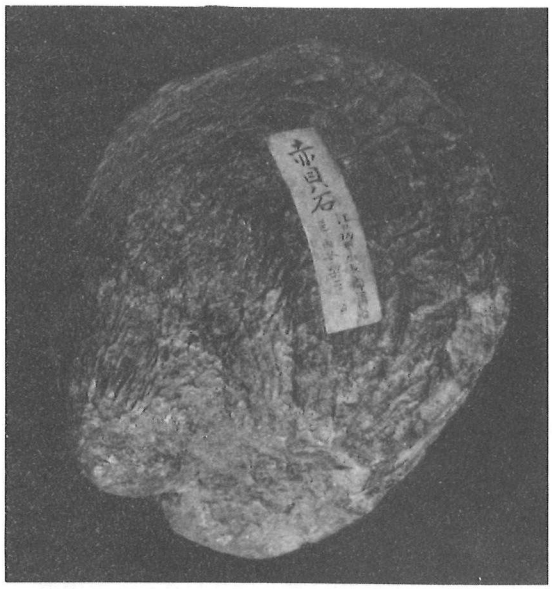


写真2　蒹葭堂貼付の名箋に記した「貝」の字の筆跡に注意

蒹葭堂は多くの著書を残したときいている．とくに画は池大雅堂を師として南画を習い画人として一流にランクされている由である．大阪には蒹葭堂びいきの人々が多いから大阪の古書店を一度覗き歩いてみようと決心した．

大阪の畏友，浅尾虚遊氏にこのことを話し，蒹葭堂に関する本を取扱っている書店をお伺いすると，間もなく氏が心やすくしておられる心斉橋筋の某書店を紹介された．また，この店に「蒹葭堂遺物」と名づけられた玻璃版印刷とやらの，蒹葭堂直筆の実物と寸毫変らない飜刻本の残部があるのでそれを送らせたとの親切なお計らいである．拝見すると，これは蒹葭堂直筆の奇貝図譜・禽譜・植物図の3部をとりまとめて帙入りとし，髙島屋呉服店内の蒹葭堂会から大正15年11月15日に出版されたものであった．奥付をみると，四百限定本第三八九号とあり，絶版寸前の稀覯本を入手することが出来た．そしてこの機会に蒹葭堂にかんする図書で，蒹葭堂小伝，雑誌「上方」の蒹葭堂号，蒹葭堂雑録5冊，等を買入れ，これが縁で後に至り蒹葭堂日記も入手することとなる．

話を戻すが，この蒹葭堂遺物を入手したので奇貝図譜や禽譜の中の蒹葭堂直筆の文字と，例のコレクションの石に貼った小紙片，包み紙などに書いた文字とを喜び勇んで比較してみた．ところがどれもこれもが面白いほどバッタリ符合するので，笑いが止まらないのに困った位であった．人生苦悩多しというが，こんな愉快なことがあるとは予想もつかぬことであった．孤児の産みの親が判明したことは，ここに大阪の重要文化財が一つ殖えたことになるのである．笑いが止まらないのは筆者にとって無理のないことであった．

ここで蒹葭堂の直筆の遺著の筆跡と，蒹葭堂古石コレクション（特に京大号と名づけることを提唱する）にみる蒹葭堂直筆の筆跡とを読者も対照比較して頂き，イエスかノーかをきかせていただきたい．筆者一人の考証では一人合点であり，ワンマンといわれても仕方がない．

図1の左は蒹葭堂「奇貝図譜」中の「奇貝」の筆跡，写真1は蒹葭堂コレクション中の古琵琶湖層群産のドブガイの化石でこれに貼った「赤貝石」と書いた紙片の文字は図譜の「奇貝」の「貝」の字と形態が瓜二つである．

またこの「赤貝石」の「赤」の字を図1の右の禽譜中の「赤頭鳬」の「赤」とを見比べると，形態的に非常に相似である．

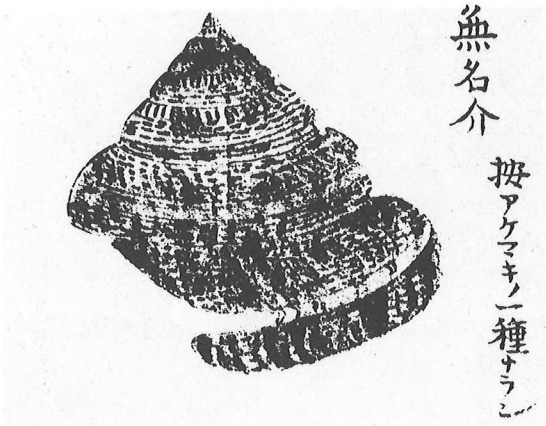


図２．蓑葭堂の稿本「奇貝図譜」中の無名介．「無」の字の運筆に注意．（大正15年　高島屋蓑葭堂会発行　蓑葭堂遺物から引用）

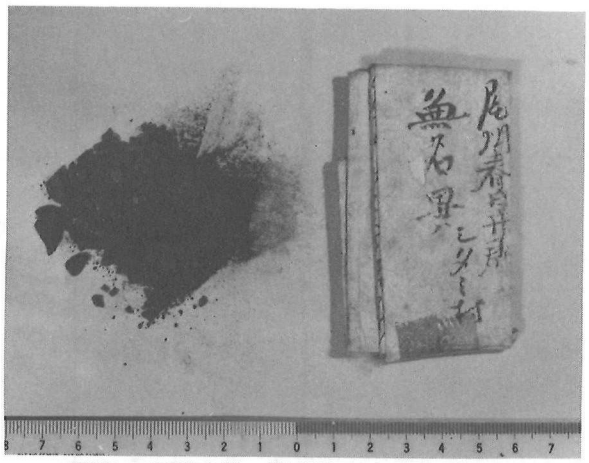


写真３．蓑葭堂自筆の「無名異」の包み紙．「無」の字の運墨に注意．図２の「無」と共通性が認められる．

次は図２に奇貝図譜中，「無名介」とされた有名なオキナエビスの「無」でコレクション中の「無名異」の包紙（写真２および図３）に書かれた「無」とは形態上完全に一致しているとはいえないが，同巧異曲と云うべき一致が認められ，「無名異」の右肩に記された「尾州」の「州」は，図４の袖介の産地の「土州」や房州の「州」と同形であることに注意されたい．

以上の如く類似の例は枚挙にいとまがないので，この辺で文字の比較考証は止めるが，一つ念のために注意しておきたいのは，蓑葭堂は字体を楷書で書いた場合と行書や草書にくずした場合とで，まるで別人の観があることで，その１例として，図５を参照されたい．云うまでもないが「楓化石」は楷書で，その下の「龍田川紅葉之石」は草書で，同一人が，同じ筆で書いたとは思われない変筆振りである．文字の二重性は世上往々みるところであるが，蓑葭堂の場合は相当極端と云うべき方か．奇貝図譜中，終りに近い頁に図６に示すような草書で書かれた部分がある．本書の殆ど大部分は欄外にみるような楷書体で書かれ，幾らか稚拙な書き方のように見られるのに対し，行書や草書で書くと全く別人が書いたような感がするのである．蓑葭堂日記は禽譜の場合と同様で全部楷書で細々と書かれ彼の根気の強さには驚嘆舌を巻かせる．

蓑葭堂の筆跡には二重性を超えて三重性すらみられる．彼が天明甲辰４年３月49歳の時に小野蘭山に差し出した誓盟状の筆跡は行書，草書の混じったものだが，前掲の書体とは全く異なった一寸他人の眞似のできない字体で書かれている．これと同様の字体は，他の遺墨の中にも稀に散見する．蓑葭堂のように随時別人の如き書体で字の書ける人は珍しいというべきだろう．

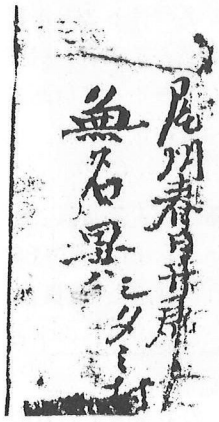


図３．「無名異」の文字の拡大．

図４．土州，房州の「州」の字と図３の「州」の字との類似に注意．これは蓑葭堂の稿本「奇貝図譜」に書かれたもの．（大正15年　高島屋蓑葭堂会発行　蓑葭堂遺物から引用）

Ⅲ 蓁葭堂奇石コレクション故郷に帰る

昭和48年11月３日には日本地学研究会の会館である３階建ての建物が建ち，その開館式を挙行した．この３階は床面積100平方ｍの標本展示場で一隅に大きなガラス張りのウインドウがある．小さい施設とは云え，蓁葭堂のコレクションはここで初めて公開された．開館時に発行の会館のパンフレットにも，蓁葭堂コレクションの写真とその簡単な解説記事を掲げ，以て当館の誇りとした．

然し筆者は，大阪が産んだ稀代の碩学，蓁葭堂の苦心して蒐めたコレクションが，京都に在るのは不自然であり，コレクションを容れた重箱も無言裡に主の眠る故郷大阪に帰りたいと望郷の念止み難いものがあるように思えてならなかった．一日も早く大阪に贈るべきかとの衝動にかられるかと思えば，一方では，京大野上氏，松本君のひょっとしたらとの深慮の賜であり，自分としても始めて入手した古文化財的コレクションであるから，それほど必要でもない先に渡すわけにはいかないとも思えてくる．

そうしているうちに大阪市の長居公園に自然史博物館が建てられる計画があり，偶々筆者も館の展示内容についての準備委員の一員に加えられた．何回か会議に出席しているうち，この博物館なら昔の大阪の自然科学者である蓁葭堂の蒐めた鉱物や化石の標本を展示しても決して陳腐の謗りをうけることはなかろう．博物館の竣工を機に寄付することにしようとひそかに決心していた．

そうした決意が固まりかけていた時，メタセコイアで知られた三木茂博士が亡くなられた．告別式は昭和49年２月23日，宝塚市平井の御自宅で営まれ，筆者も参列し先生のご冥福をお祈り申上げて帰途につかんとした時，自然史博物館と緊密な連繋をもたれる大阪淀川区十三郵便局長の梶山彦太郎氏が焼香を終えてでて来られるのにバッタリと出会った．

その折，筆者は蓁葭堂の石のコレクションは京都に置くよりは，故郷の大阪にあるのが自然だから，大阪市立自然史博物館開館のお祝として贈呈したいとの意向を持っているが，自然史博物館がこの筆者の申出でを受入れてくれるかどうか，千地館長の意向をきいてもらえないかと梶山氏に持ちかけた．梶山氏は非常に喜ばれて，直ちに千地館長と連絡をとると約され阪急十三駅で袂を分った．

斯くて昭和49年３月23日，自然史博物館より千地万造館長，柴田保彦学芸員両氏来館され，梶山彦太郎氏，仲人よろしくご同道下された．この石のコレクションと一緒に，戦争中に京大へ運び込まれていた豪華絢爛な貝のコレクションも，石に続いて京大から筆者の許に運ばれて来ており，原形を崩さぬよう大切に保管していたが，これも亀井節夫教授から予め諒解が得られていたので，石のコレクションとともに，約30年振りに故郷大阪

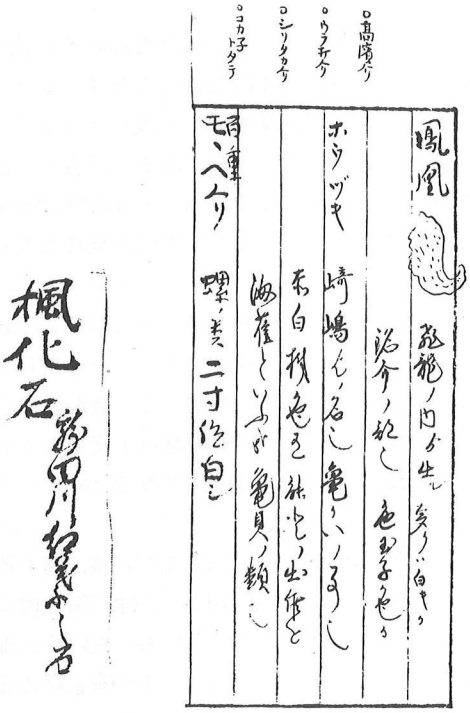


図５．蓁葭堂奇石コレクション中の名箋の筆跡．楷書と草書とでは別人の観あり．

図６．蓁葭堂の稿本「奇貝図譜」末尾の部分にみる草書体の筆跡．欄外の楷書とは別人の観あり．（大正15年高島屋蓁葭堂会発行　蓁葭堂遺物から引用）

に帰って行った．

石の重箱はタダの１組である．常識的には当時の一コレクターの蒐集数は平均して重箱10組内外であったのに対して，蒹葭堂ともあろう人のコレクションがただの１組とは合点がいかない．恐らく多数あったものが分散し行方不明となって，辛うじて残った1組であろうか．今度発見の蒹葭堂の石のコレクションに“京大号”の愛称をつけたのは，今後，彼の蒐集になる石のコレクションがいずこからか発見されたとき他と区別できるからである．

Ⅳ 蒹葭堂奇石コレクションの外観と内容

（付 第１表および写真図版）

重箱を被いかぶせている外箱は間口　28.6cm，奥行　39.4cm，高さ　35cmの被せ蓋と，それとうまく接合する底板から成り，双方とも杉板でつくられ，被せ蓋の外側はうるしと思われる黒い塗料が生地の木目が見える程度にアッサリと塗られている．蓋の内面は灰青色の和紙を貼って木目をかくしている．この被せ蓋と底板とは鉄製の金具で噛み合うようにつくられているが，鍵がかかるようになっているとは思われない．底板と被せ蓋とは真田紐でくくり，持ち運びが便利なようにしてある．

上述の被せ蓋を除くと，６段重ねの重ね箱が現われるが，６段とも間口と奥行の寸法は同じで26cmと36.5cmである．深さは上が浅く下が深くつくられていて，第１段から第３段までは各々３cm，第４段 4.9cm，第５段 5.3cm，第６段 8.2cmある．重箱の蓋はシンプルなつくりで何の装飾もない一枚板である．

然し重箱の木材の材質は凝ったもので，これまでに筆者が見た他の古石コレクションの重箱は桐か又は杉材にきまっていたが，この蒹葭堂のは黒褐色と淡褐色のあらい縞模様を示す高級な木材（或る人の鑑定によると黒柿材とのこと）でつくられている（写真１参照）．

これら各段の箱には第１段に約50種，第２段に36種，第３段に25種，第４段に30種，第５段に18種，第６段に16種，計 175種が入っている．重箱全体の桝数は 127しかないのに 175種を算えるのは１つの桝に１種以上が入っているためである．ここに掲げた種数は厳格な意味の種でなく，同名の種でも産地が異なるものは一つの種として算えていることを断っておく．

次にこのコレクションの中味を展望してみることにしよう．合計 175種の標本には蒹葭堂在世の折は恐らくその悉くの石に石名，産地を記した小紙片が貼付されてあったと思われるが，現在，温存するものは55種で全体の約32％にすぎない．

次に石名を書いた紙片を失った石でも，筆者の多年に亘る雲根志的知識を活用すれば，復元可能なものも少くない．そのようにして名紙片のない石から63種を復元させ，前記の名札のあるもの55種を合わせ計118種が浮かび上った．但しこの118種中には名前の同じものは消去しているので重出はない筈である。

このようにしたのち，この118種を試みに鉱物，岩石，化石，考古伝承物，現生生物に分類してみると，

鉱物　51種，岩石　23種，化石　33種，
考古伝承物　７種，現生生物　４種．となる．

鉱物が最も多いのは，色の美しいものや光沢の強いものなどがあって人目を惹くためである．次に化石の多いのは人間の好奇心が如何に強いかを現わすもので，かつて古人が，現代人でも見逃してしまうほどの微細なものまで見つけていた眼力に，驚嘆させられる．

次に掲げる第１表は，蒹葭堂古石コレクション（京大号）入組標本の一覧表である．その記載の順序は，重箱の上の箱から第１段，第２段……の順に，各箱（各段）については箱の長辺を左右の位置に置き右端から左へ第１列，第２列……とし，第１列は上にあるものを１とし，順次下の方に2,3,4と番号をつけた．

この石の入組の順序は，京大から持ち込まれた時のままで筆者は入組の順序を変えていない．

表中に（蓁葭堂石名）とあるのは，蓁葭堂直筆，自貼の石名箋の「石名」で，その隣の（蓁葭堂産地名）とあるのは彼の自筆，自貼の名箋に記した産地名である．右端の（筆者注）には入組標本について簡単な解説を書いた．

表中の横線「——」は入組の石に石名，産地，等の蓁葭堂直筆の名札を失っているものである．なお表中に図版番号の……とあるものは文末の図版（1～6）に写真が載っているという報せである．

第1表　蓁葭堂奇石コレクション“京大号”

	（蓁葭堂石名）	（蓁葭堂産地名）	（筆　者　注）
1·1·1*	饅　頭　貝	常州筑波郡足高村山中	ウニ（ハスノハカシパン）の化石　更新世？
1·1·2	—	—	桃色枝サンゴ，ゴルゴニア？　現世
1·1·3	—	—	キララガイの化石　中新世
1·1·4	—	—	イセタマガイの化石　中新世
1·1·5	ダ ン 子 石	奥州伊達藤田	アカガイの化石　中新世
1·1·6	天 狗 爪 石	能登（以下不明）	カルカロドン，イスルス　中新世（図版1）
1·1·7	—	—	セタシジミ（菱鉄鉱化）古琵琶湖層群
1·1·8	不　喰　介	—	ノムラカガミの化石　中新世
1·2·1	—	—	貝化石モールド
1·2·2	—	—	石燕（キルトスピリファー・ペリザリィ） デボン紀腕足類の化石，漢方石薬，中国四川省？
1·2·3	ハ　カ　貝	江州堅(？)田	ドブガイ？の化石　古琵琶湖層群
1·2·4	—	—	未詳，円柱状，多節，石灰質？
1·2·5	藤ノ実化石	—	キダリスの棘？　古白亜紀
1·2·6	—	—	フミガイ？の化石
1·2·7	—	—	玉髄　淡赤塊状
1·2·8	赤　石　髄	—	瑪脳　濃赤縞状
1·3·1	—	—	玉髄の小円礫，褐黄
1·3·2	—	—	〃　〃　淡黄
1·3·3	舎 利 母 石	南部シャリ浜	玉髄の小球体を含む火山岩 （玄武岩質，セラドン石を伴う）
1·3·4	—	—	チャート　黒白，赤白の円礫
1·3·5	—	—	ホルンフェルス？の円礫，褐黒
1·3·6	—	—	珪質岩の円礫　黄褐
1·3·7	—	—	白雲母，石英共生　奈良市付近産？　領家帯中のペグマタイト？
1·3·8	—	—	コブ真黒　八瀬産水石　角閃石質斑状変晶を含むホルンフェルス（図版1）

＊1·1·1は重箱の第1段，第1列（右より），第1号（上より下へ）を指す．以下同様

1·4·1	—	—	陰陽石，台座付，超ミニサイズ
1·4·2	—	—	淡青粘土鉱物
1·4·3	—	—	豆鉄鉱？ 褐色球状
1·4·4	—	—	夷大黒砂（河岸生物の巣）現世（図版１）
1·4·5	黒水晶と同針	江州浅井郡田津原村 鶴ケ嶽合山	鉄電気石（柱状と針状の結晶） 黒水晶は誤認（図版１）
1·4·6	—	—	球状方解石　長野県南安曇郡湯俣産？ Ｘ線回折で霰石でないことを確認(図版１)
1·4·7	—	—	矢根石
1·4·8	経　石	越後西浜鬼部西正寺 地内鬼部	聖徳太子の経石，裏に「萬」の字 褐色扁平の円礫
1·5·1	蓑虫石	和　州	褐鉄鉱質管状，径0.6 長さ1.75cm
1·5·2	自然銅	信　州	黄鉄鉱の仮晶，升石に当る． 本草の自然銅は升石(ますいし)を指す（図版１） 長野県小県郡武石産　径1.65cm
1·5·3	—	—	不詳　褐色皮殻状　同心構造
1·5·4	金剛砂	—	鉄礬石榴石（砂鉱） 奈良県北葛城郡香芝町穴虫，二上山付近(図版1)
1·5·5	—	—	禹餘糧（本草），鳴石（現代名） 奈良若草山麓産？又は岐阜県郡上郡那留産？
1·5·6	—	—	黄鉄鉱結晶{100}{210}{111}集形． 古名“金牙石”に当る．
1·5·7	—	—	含沸石杏仁状ドレライト？
1·5·8	—	—	孔雀石と珪孔雀石
1·6·1	—	常陸国	珪岩
1·6·2	石筍(せきじゅん)	尾州千多郡久村	陶磁製の棒状物で石筍ではない
1·6·3	—	—	男根石，礫の１種，砂岩と石英細脈でできている
1·6·4	—	—	キララガイの化石　中新世
1·6·5	岩紺青	セッ州○○山	藍銅鉱，孔雀石，黄銅鉱混成
1·6·6	—	—	植物種子の化石，凝灰岩中
1·6·7	青嶋石	紀　州	球顆流紋岩　石基の色，緑（図版１）
1·6·8	—	—	〃　〃　灰色
2·1·1	白　砂	佐　州	珪砂（石英，角閃石，斜長石混入）
2·1·2	—	—	玉髄の円礫　青森県今別海岸産
2·1·3	赤玉石	佐　州	赤色ジャスパー　両津市赤玉部落
2·1·4	—	—	オオバタグルミの果実化石　更新世(図版２)
2·1·5	—	—	白雲母（雲母式双晶するものあり）

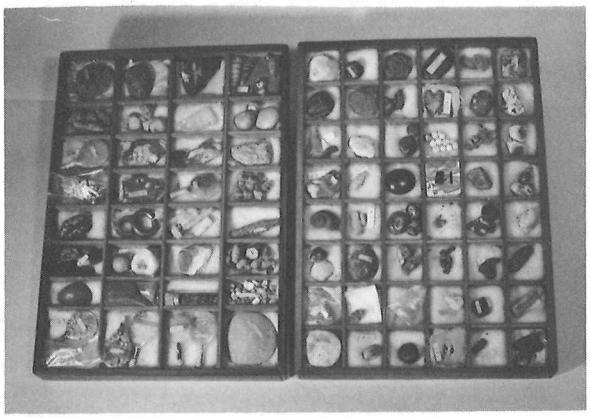
2·1·6	金　　砂	—	加水黒雲母（黒雲母の風化物） 花崗岩風化生成物
2·1·7	—	—	土殷学（高師小僧のこと）
2·1·8	石　　卵	摂津下田原	泥岩中の結核　径約７cm
2·2·1	粟　　砂	若　州	玉髄，石英
2·2·2	無　名　異	—	鉄質土状の粉末
2·2·3	—	—	方解石（径 3cm　放射状球状物）（図版２）
	ダ　ン　丸	尾　州	鉄砲玉石（白鉄鉱）？
2·2·4	雷　　鐶	—	銅製の環　錆びて緑青を生ず
2·2·5	桜花紋石	近州如意嶽	菫青石仮晶（雲母化）母岩はホルンフェルス， 現在“桜石”と云う
2·2·6	—	—	蛍石（八面体）　中心から紫，緑，白の累帯構造
2·2·7	玉　　芝	—	算盤珠石（産地不明）京都府丹後神谷産？ 流紋岩球顆の作るもの（図版２）
2·2·8	—	—	赤色チャート（含角礫）
2·3·1	舎　利　石	○ルハマ	玉髄砂　淡黄小球状，ウチワ形瓶入（図版２）
	五コク砂	丹州乙浜	〃　　淡黄不規則形（図版２）
2·3·2	—	—	砂　礫　雑多な鉱物，岩石
2·3·3	—	—	方解石　砂岩を貫く
2·3·4	石　鍾　乳	漢　渡	漢方石薬，鍾乳石の最先端部を石鍾乳とよぶ うすく管状となる部分をいう（図版２）
2·3·5	箔　　砂	和州金剛山	鱗状黒雲母（加水化弱いもの）
2·3·6	水　　晶	近州辺の山	白水晶と黒水晶と平行連晶，滋賀県甲賀郡岩根 （三上山付近）の産？（図版２）
2·3·7	—	—	透明方解石（氷州石）の劈開片 r $(10\bar{1}1)$ 古名「イイギリ」（図版２）
2·3·8	—	—	石灰岩，鳥の飛ぶ姿の戯作物
2·4·1		佐　州	ハスノハカシパン（ウニ類）
2·4·2	—	—	玉髄，小礫，白，黄，褐
2·4·3	桜　　石	丹州サクラ天神	現代名も「桜石」京都府亀岡市蕪田野町柿花 天然記念物　菫青石仮晶の絹雲母化したもの （図版２）
2·4·4	—	伊　勢	土殷孽（どいんげつ）（現代名は高師小僧）
2·4·5	—	—	孔雀石（古名緑青）葡萄状，腎状
2·4·6	—	—	白雲母　微斜長石中
2·4·7	—	—	鮓答（ヘイサラバサラ）一名馬糞石 馬など腸管内結石，軽く軟かし（図版２）

2·4·8	—	—	月のさがり（月糞）ツリテラ・ビカリエラ， オセネブラなど巻貝の化石モールド 岐阜県瑞浪市月吉　中新世（図版３）
3·1·1	シノブ石	奥州伊達半田銀山	二酸化マンガン鉱(Polianite)の樹枝状骸晶 （図版３．3·3·1-b）
	〃	備　中	母岩は単色石灰岩（図版3．3·1·1-a）
3·1·2	—	桑　名	亜炭（褐炭の類）鮮新世奄芸層群中
	—	—	矢根石８個　材質はチャート，サヌカイト， ジャスパー(碧玉と赤玉)，玉髄，黒曜石(透明種 長野県和田峠産)(図版３)
3·1·3	—	—	方解石　放射菊座状集合体（図版３）
3·1·4	魚紋石	甲　州	魚の化石　脊椎骨，尾部付近？ 母岩は頁岩　中新世？（図版３）
3·2·1	—	伊予○砂	瓶１：黒色不透明　径１mm　本質不明
	—	—	瓶２：黒色・草色混合，草色の粒は X線で苦土橄欖石
	焼　米	和州信貴山	瓶３：失火によるもの，通称焼米砂
	浅黄砂	—	瓶４：真珠岩中の核粒　径３mm 灰色
	切子砂	三河鳳来寺	瓶５：黄鉄鉱 $a\{100\}$の細晶，分解し緑礬生成
	—	—	瓶６：黒色チャート 細かい円礫
	—	—	瓶７：雑砂
3·2·2	—	—	水晶　大小10　大は柱長３cm 菱面体$r(10\bar{1}1)$でとがる　無色透明
3·2·3	—		胡椒石　径１cm±　複合型の算盤珠石(図版３)
3·2·4	—	—	玉髄　偏平円礫　径４cm
	—	—	泥岩　水蝕により皿形を呈す
3·3·1	貝　立	佐　州	帆立貝（パチノペクテン？）の化石　鮮新世？ （図版３）
3·3·2	石　卵	摂津北田原	球顆　母岩は斜長流紋岩 X線回折にてソーダに富む流紋岩（図版４）
3·3·3	—	—	玉髄（円礫）　青森県東津軽郡今別 母衣月（ホロツキ）海岸
3·3·4	土殷孽（どいんげつ）	近　州	高師小僧
	—	—	羊歯植物（クラドフレビス）の化石 ジュラ紀手取統，九頭竜亜層群， 飛騨産か，加賀産か不明（図版４）

4·1·1	—	—	珊瑚の類　現世？
	—	—	漣痕？　現世？
4·1·2	玉　髄	—	団塊状　腎状
	赤メノウ	—	玉髄の赤色円礫
	—	—	珪岩の円礫
4·1·3	—	—	飯石（ママイシ） 流紋岩質球顆中に水晶晶洞生成するもの 城崎温泉産（図版４）
4·1·4	百足（むかで）石	—	ウミユリ（棘皮動物）の化石を含む石灰岩 鞍馬山産？ペルム紀
4·2·1	黒　曜　石	—	大小８個　隠岐産？
4·2·2	—	—	梅林石＝杏仁状輝緑凝灰岩（図版４）
	舎利母石	—	前掲1·1·3に同じ
4·2·3	陽　起　石	近州石山	漢方石薬，陽起石＝透閃石が正しい ここでは誤認して石山寺の珪灰石を入れている
4·2·4	—	—	石膏，安山岩の裂罅に生成
4·3·1	—	—	黒曜石　透明　長野県和田峠産を暗示す
4·3·2	—	—	黄銅鉱，閃亜鉛鉱，磁硫鉄鉱混合
	糸　巻　石	—	讃岐岩　自然風化の観賞石 俗名は縁取（ふちとり）石とも云う（図版４）
4·3·3	—	—	礫　中央凹み奇形
	—	—	麦飯石＝石英斑岩　大津市藤尾産（図版４）
4·3·4	紫　水　晶	—	松茸式　骸晶的成長の跡あり，両錐形 高さ 4.5cm　径4 cm
	—	—	煙水晶　左ドフィネー双晶 長さ 3.5cmの柱状結晶
4·4·1	長　　石	美濃金生山	方解石を入れる 長石は本草の硬石膏の方柱状劈開物のこと 誤認である
	—	—	方解石の犬牙状結晶群晶
4·4·2	—	—	流紋岩質球顆２個 １個はオパルを含み，福島県宝坂産に似る （図版４）
4·4·3	蟹ノツメ	尾州知多	アナジャコの爪の化石をふくむノジュール 中新世（図版５）
4·4·4	—	—	煙水晶晶群，蝕像，微斜面あり（図版４）

4·5·1	瓢　單　石	摂津名塩	リソイド岩中の球顆がひょうたん形をする． 名塩は流紋岩と同質凝灰岩地（図版５）
	—	—	黄鉄鉱を含む砂（瓶入）　硫酸鉄変成
4·5·2	介　　石	江州鮎河黒川	シラトリガイの化石　中新世
	月　　珠	月　吉	ツリテラ・ビカリエラ，オセネブラ等巻貝化石 瑞浪層群中新世
	月　石　英	イ　セ	石英質岩円礫
4·5·3	磁　　石	—	磁鉄鉱（漢名慈石）吸鉄性
5·1·1	信　夫　石	濃　州	シノブ石　母岩チャート
	〃	ミ　ノ	〃
5·1·2	—	—	石英質板状石片
	—	—	霰石（ミネラライトで青色の蛍光を放つ） （図版５）
5·1·3	貝　　石	—	１．シラトリガイ化石(伊勢)，(図版5．5·1·3-a) ２．オウナガイの化石(能登)，(図版5．5·1·3-b) 以上中新世 ３．不　詳
5·2·1	—	—	玉髄葡萄状　母岩リソイド岩質 （図版5．5·2·1-a）
	—	—	亀甲石　砂岩の風化によって形成 （図版 5．5·2·1-b）
5·2·2	—	—	パン皮状火山弾の類　サヌカイト質 香川県五色台，奇品（図版５．5·2·2-a）
	—	—	本草の陽起石（現在名　透閃石） 繊維状集合体，伊勢産？（図版5．5·2·2-b）
5·2·3	—	—	煙水晶　うすい色
	—	—	水晶の破片，無色透明
5·3·1	—	—	饅頭石　径12mm位　微黄色球状 内部褐色のアン(ハロイサイト)を含む
	—	—	黄銅鉱
5·3·2	—	—	石鍾乳（鍾乳石尖端部）
	—	—	方解石結晶（３・２・２と同産地）
5·3·3	百（むか）足（で）石		ウミユリの茎部化石，銭石とも呼ぶ 岐阜県赤坂金生山　ペルム紀（図版６）

6·1·1	牛　　玉	—	酢答（ヘイサラバサラ）(前掲２・４・７参照) 径５cm，哺乳類腸管内結石
	木葉石	江州サケ田	メタセコイア化石（層灰岩Tuffite)中， 中新世（図版 6．6·1·1)
6·1·2	—	—	珪化木の一種　木化蛋白石　黄色木理
	—	—	生痕化石　フナクイムシ（*Teredo*）の穿孔密集 中新世（図版６）
	—	和州アカハ子山	考古資料　硬砂岩
6·1·3	—	—	鉄，珪酸を含む石灰岩 （X線回折チャートより推定）
	—	英　彦	方解石粉　盆石用
	盆山砂	—	備後砂（晶質石灰岩）を粉砕微粉として盆石用とす． （図版６）
6·2·1	土殷孽	—	高師小僧　長さ11cm　径2-2.4cm（大形のもの） 若い地層の上層にできる鉄質結核 植物の遺体に集中（図版６）
	—	—	二枚貝（ツキガイモドキ）の化石 中新世（図版６）
	—	—	巻貝（イセタマガイ）？の化石　中新世(図版６）
6·2·2	赤貝石	江州甲賀郡稗谷邑ノ 内安楽寺谷	赤貝に非ず，マルドブガイ（*Anodonta*)の化石 更新世（古琵琶湖層群）
	石卵（せきらん）	摂州下田原	火山豆灰（パイソライト）？ 水酸化鉄により 褐色を呈す，母岩流紋岩質凝灰岩（図版６）
6·2·3	椎ノ木化石	美濃　ハチヤ(蜂屋)	珪化木　蜂屋は現在美濃加茂市，珪化木今も産す． 中新世
	—	—	紫水晶　櫛歯状晶群
	—	—	石卵　前出２・１・８の石卵と同類 径約１cm，硫化鉄を含む？



本表掲載の個々の石についてのエピソードを綴れば興味が尽きないが，これは筆者が調査した他のコレクションと一緒に近刊の昭和雲根志　第Ⅱ篇（石Ⅱ）で記す予定でここでは頁の都合で割愛する．

写真４． 蒹葭堂奇石コレクションの一部

Ⅴ 木内石亭の奇石産誌と蒹葭堂の日本石譜

とくに日本石譜のオリジナリティ

蒹葭堂は江戸中末期の元文元年（1736年）11月28日大阪の北堀江瓶橋北詰に生まれ，12～13歳の頃，父に伴われて京都の物産学者津島桂庵にまみえ，本草に興味を抱く．16歳の時，母に伴われて津島桂庵の門弟となる．宝暦10年（1760）25歳の頃より家号を蒹葭堂と号す．

安永４年（1775）40歳の８月大阪で物産会が開かれた際，木内石亭の訪問を受けた．この時，石亭は52歳で，雲根志前編が刊行されて２年目，雲根志後篇はこれから４年後の刊行である．木内石亭が生まれたのは享保９年（1724）で蒹葭堂より12歳年長である．石亭も京都の津島桂庵に師事したが，蒹葭堂の方が入門が少しの差で早かったから，弟子としては年長の石亭が弟分である．

以上の如く石亭と蒹葭堂とは若い頃から交渉があり，相互に知識の交換があったことは想像に難くない．蒹葭堂日記によると，蒹葭堂は寛政３年（1791）９月21日，石部中食，雨甚山田木内小繁泊り　22日四ッ時マテ木内在留天気宜昼発足　瀬田中食（以下略）と記してあり，蒹葭堂と石亭との間柄が非常にスムーズで楽しい泊り客だったことを偲ばせる．

石亭には発行の予告を公にしながら遂に上梓を見なかった「奇石産誌」稿本があった．安永から寛政にかけ，彼の５～60歳代のものである．これは昭和11年に下郷傳平氏らの肝煎りによって刊行された木内石亭全集巻二に収載され，親炙出来ることとなった．この奇石産誌は山城からはじまって日本60余州の奇石の産地を国別に列挙したもので，雲根志と共に石亭の著書の双璧として，価値の高い遺著である．

ところがこの石亭の奇石産誌が存在する傍らに於いて，これと趣を同じうする「蒹葭堂日本石譜」なる上下２篇の冊子を蒹葭堂はつくっていた．この書は後世に於て，京都の禁裏御用の医家であり，本草学者である，山本亡羊の子息，錫夫氏が筆写し，同家の読書室に収蔵していたものらしく，本書の末尾に「右蒹葭堂日本石譜二巻，弘化三年丙午之冬十有一月以大阪文楨岩永氏之所藏蒹葭堂自筆之本寫焉，山本錫夫書」と記している．

蒹葭堂の日本石譜も国分け記載で，上巻に畿内から東海，関東，陸奥等の東部日本の，下巻に北陸，山陰，山陽，四国，九州諸国の産物を書いている．詳しい説明は殆どないが，Ｂ６判型で上巻は39丁，下巻は46丁である．

筆者は本著のあることは全く知らなかった．２年ほど前，梶山彦太郎氏から原本からの複写を載き，蒹葭堂の精力の強さに舌を巻いた次第であった．一見したところ石亭の「奇石産誌」の記載数には及ばないけれども，当時既に出版されていた石亭の「雲根志」や，出版されてはいなかったが，「奇石産誌」に記載されていないような新しい記事が期待できると思われた．蒹葭堂日記（18年分の交友記録）を解説された水田紀久氏の文にあるごとく，蒹葭堂は町内つきあいや商用（酒造業）だけでも結構忙しいのに，其交遊の広さは儒家，医家，詩人をはじめ書家，画家，印人，天文家，地理学者，博物家，本草家，蘭学者から紅毛人にまで及び情報入手の経路もまた，極めて広範囲，遠隔の地に及ぶからである．

即ち，この蒹葭堂日本石譜を石亭の奇石産誌と比較対照して検討したとすると，石譜の記載と産誌の記載とが符合すればするほど石譜のオリジナリティは弱まり，符合しなければしないほど，石譜のオリジナリティは強く高まるので，それを試みたのが，次に掲げる第２表（例１，２，３）である．

全国の比較はしていないが，その一斑を知るため試みた結果は，京都を含む山城の国では日本石譜（蒹葭堂）の奇石産誌（石亭）に重なる度合は相当高く奇石産誌の約80％に達し，奇石産誌記載の奇石の約⅘が日本石譜に引用されていると解することができる．

それでは石亭の足許の近江の国ではどうかとい

うと，それは第２表に示すように，奇石産誌に対する日本石譜の重なりの度合は山城より低くなって奇石産誌の53％が日本石譜に引用されているにすぎないことを示している．

次は近江や大阪とははるかに離れた陸奥の国ではどうかというと奇石産誌記載の118種中，日本石譜記載の共通種は29種にすぎず，奇石産誌の60％が日本石譜に引用されるに止まることを示している．

以上の数例から考えると雲根志と記事の共通するのを意識しつつ彼の広い交友からの情報を日本石譜に記録し，時には彼の手許に持参される奇石を鑑識し，石名を付けたこともあったことと思う．

この日本石譜記載の石の種別索引をつくり，今後の蓁葭堂の石関係の事柄に利用をはかると共に，雲根志との関係についても配慮したのが，本稿に付属すべき「蓁葭堂日本石譜」種名索引であるが，今回の収蔵資料目録に納まらないので遺憾ながら，割愛した．但し何かの機会に上梓したいと思っている．

Ⅵ 謝　辞

本書の上梓に当ってまず感謝せねばならないのは，この意義深い発見をもたらす動機を与えられた野上裕生博士（京都大学理学部），松本英二博士（国立科学博物館）に対してである．その次は，蓁葭堂がコレクトした標本であることを立証すべく蓁葭堂の筆蹟を調べるのに御協力を頂いた浅尾虚遊氏（芸術家）に対してで，これがなければ蓁葭堂に辿りつくのにもっと多くの日時を要したことは想像に難くなく．最後に蓁葭堂古石コレクションが30年振りに生れ故郷に帰り，市民の誇る大阪市立自然史博物館内に展示されるに尽力された郷土研究家梶山彦太郎氏，および拙稿を博物館出版物に上梓し広く江湖に紹介されし，千地館長および柴田学芸員の御厚志に感謝申し上げる．

第２表　奇石産誌・日本石譜　掲載種対照表

例１　山城国産・石種（五十音順）　　奇産は奇石産誌，日石は日本石譜の略

名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石
石岩		○	木実石	○		水粧		○	西洞院砂	○	○
石大根		○	切子砂	○		墨泥岩	○		白石英	○	○
殷孽	○	○	金箔石	○		セキ		○	白石脂	○	
牛石	○		黒土		○	石蚕		○	火打石	○	
宇治川敷石	○		磬石		○	石炭	○		菱石	○	○
臼石	○		黒石脂	○		石卵	○		曲玉	○	
禹餘糧	○		木葉石	○	○	石麸	○		都砂	○	
雲母	○		琥珀	○		銭石	○		蜈蚣石	○	
夷大黒砂	○		鹿背砂	○	○	太乙禹餘糧	○	○	焼米石	○	
貝石	○	○	紫石脂	○		高雄砥	○	○	焼麦砂	○	
鏡石	○	○	舎利石	○	○	月輪石	○		焼物焼石	○	
蟹化石	○		尺八砂	○		天笠石	○	○	薬石	○	
釜ケ渕角石	○		鉦石	○		土殷孽	○	○	矢竹磨砂	○	
鴨河石	○		書物岩	○		土脂	○		蝋石	○	○

山城国の奇石産誌（石亭）における掲載種……49
〃　日本石譜（蓁葭堂）　〃　……21
〃　両者共通種　……14
日本石譜中の蓁葭堂のオリジナリティを示す種数
……21－14＝7

奇石産誌中の石亭の記載種に対する日本石譜のオリジナリティの比は，35：7で5：1即ち20％（35＝49－14）にすぎない．これは山城国では蓁葭堂の独自性があまり強く現れていないのを示している．

例２　近江国産・石種（五十音順）　　奇産は奇石産誌，日石は日本石譜の略

名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石
青石英	○	○	銀星石	○		石髄	○		白字石		○
赤石英	○		黒雲母	○	○	石炭	○		珀砂	○	
握雪石		○	黒石英	○	○	石炭実	○		馬蹄石	○	
小豆石	○		小米砂	○	○	石粉	○	○	馬蹄粉		○
石ケヤキ	○		木葉石	○	○	石灰		○	玻璃	○	
石ノ花		○	虎班石	○		石灰髄	○		火打石	○	
石ノ臍	○		碁盤石	○		石卵	○		瓢覃石	○	
糸巻石	○		五倍子石		○	石膏	○	○	仏足石	○	
岩木		○	信楽茶椀薬	○		千本水晶		○	仏頭石	○	
岩ノ丸	○		紫含石	○		大乙禹餘糧	○	○	ヘキ石		○
魚之目石		○	紫石英		○	大黒石	○		方金牙	○	
浮石	○		シデ石		○	大理石	○		牡蠣石	○	○
禹餘糧	○		赤石脂	○	○	高島石		○	盆石		○
雲母	○	○	蛇骨		○	達磨石		○	曲玉	○	
夷大黒砂	○		蛇糞石	○		タンハン		○	曲玉管石	○	
鬼石	○		尺八砂	○		長石		○	升石	○	
帯石		○	鉦石	○		綱石	○		松化石	○	
温石	○		鏃石	○	○	鉄砿	○		饅頭石	○	
貝石	○	○	自然石灰		○	鉄砂	○		磨石	○	
カナツボ石	○	○	白瑪脳	○		天狗之爪石	○	○	水谷石	○	
カラスニン		○	神管石	○		砥石	○	○	水鳥石		○
硝子石		○	神槍石	○		土殷孽	○	○	村雲石	○	○
含英石	○		水晶	○	○	土床	○		瑪脳石		○
黄石英	○		水晶床	○		トシ豆石	○		焼米砂	○	
姜石	○		杉化石	○		児足跡石	○		陽起石	○	
切子砂		○	青葉蓋石	○		白堊		○	鎧岩		○
金銀銅鉱	○	○	石芝	○	○	珀石	○		雷斧	○	
金星石	○		石鍾乳	○		白石英		○	殷孽		○

▲上　近江国の奇石産誌（石亭）における掲載種……83
　　〃　日本石譜（蒹葭堂）　〃　……50
　　〃　両者共通種……21
　　日本石譜中の蒹葭堂のオリジナリティを示す種数
　　……50－21＝29

奇石産誌中の石亭の記載種に対する日本石譜のオリジナリティの比は，62：29≒47％である（62＝83－21）．この比は近江国が石亭のお膝下であることを思うと，蒹葭堂の独自性がはっきり現れていることに注目させられるだろう．

▶右　陸奥国の奇石産誌（石亭）における掲載種……118
　　〃　日本石譜（蒹葭堂）　〃　……65
　　〃　両者共通種……29
　　日本石譜中の蒹葭堂のオリジナリティを示す種数
　　……65－29＝36

奇石産誌中の石亭の記載種数に対する日本石譜のオリジナリティの比は，89：36即ち40％（89＝118－29）に達する．この比は蒹葭堂独自の記載種で，蒹葭堂は中央から遙かな遠隔地に於いても石亭とは別のルートから情報を入手し，石の知識において石亭とは独立して一見識をもっていたと思われる．

例３　陸奥国産・石種（五十音順）　　奇産は奇石産誌，日石は日本石譜の略

名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石	名称	奇産	日石
合浦石	○		金鉛(砿)	○	○	水晶砂	○		柏葉石		○
赤鵝管	○	○	金銀銅鉱	○		硯石		○	八文字石		○
赤米石	○		金珀砂	○		瀬木化石	○	○	蛤石		○
赭水晶		○	金脳瑪	○		赤色石砂	○		蛤蜊石		○
茜砂	○		銀砂	○	○	石板	○	○	秀衛土器	○	
穴明舎理	○		黒石		○	石鞆	○		秀衡練石	○	
雹石		○	黒胡麻砂	○		石榴子		○	古綿化石	○	
硫黄	○		黒硯石	○		石鹵	○		船形石	○	
石蛤		○	黒蝋石		○	石膏	○	○	蛇石	○	
石ノナル木	○		薫陸	○	○	千曳石	○		蛇首石	○	
石綿	○	○	玄精石	○		鏃石	○		弁慶研石	○	
一字石	○		笄石	○		疊石	○		方解石	○	
イフラッフ砂	○		琥珀	○	○	蛇枕石	○		帽子石	○	
牛石	○		木ノ葉石	○		蛇鱗石	○		ボン字石	○	
梅干石	○	○	子産石	○		丹砂	○		松葉石	○	○
禹餘糧	○		米舎利	○	○	丹朱		○	松葉紋石	○	
枝柴化石	○		胡粉土		○	長石	○		丸一石		○
烟管石		○	コヤス貝石		○	津軽石	○	○	饅頭石	○	○
鉛砿		○	金剛石		○	土金青	○		磨砂	○	○
雄黄		○	紺青	○	○	都々異	○		水ハ子石		○
大石之部	○		材木石	○		ツラライシ	○		紫石		○
沖之石	○		鮭子化石	○		ツムラ石		○	紫硫黄	○	
ヲクリカンキク	○		座禅石	○		豆斑石	○	○	紫水晶	○	○
温石	○		珊瑚砂	○		壺碑	○		瑪脳	○	
オンノウレンノ木化石	○		塩俵石	○		鉄母石	○		文字摺石	○	
介石	○		繁浜石	○		天狗爪石		○	問答石	○	
貝石	○	○	磁石	○	○	天狗礫石	○		焼米砂	○	
角ハク		○	紫石研		○	鐙摺石	○		矢根石		○
柏石		○	紫粉		○	研石	○		義経足跡石	○	
柏葉石		○	自然銅	○		毒石	○		雷斧	○	○
金糞	○		紫礬	○	○	土渕川玉石		○	雷環	○	
瓶岡		○	舎利石	○	○	ドン珀砂	○		羅漢石	○	○
唐墨	○	○	舎利母石	○		生虫含石	○		緑丸石	○	
観音粉	○		朱砂	○	○	ナンダモンダ	○	○	竜神石		○
亀甲石	○		砂金	○	○	吐虹(吐)石	○	○	蝋珀	○	
経石	○		辰砂石		○	錦石		○	綿石	○	
玉脂芝	○		神管石曲玉	○		ニマメ石		○			
玉髄	○		神槍	○		白礬	○				
玉釜	○		水晶	○	○	白鹵	○				

Ⅶ参考文献

1．中川泉三著：木内石亭全集　5巻　昭和11年12月7日発行　下郷共済会

2．谷上隆介編：蒹葭堂遺物　3巻　大正15年11月15日発行　髙島屋蒹葭堂会

3．高梨光司著：蒹葭堂小傳　大正15年11月20日発行　髙島屋蒹葭堂会

4．南木芳太郎編：雑誌「上方」蒹葭堂号　昭和18年3月25日発行　上方郷土研究会

5．山本錫夫写本　蒹葭堂著（稿本）：日本石譜上下

6．水田紀久編：蒹葭堂日記翻刻編　昭和47年4月29日　蒹葭堂日記刊行会

7．斉藤　忠：木内石亭（人物叢書）　昭和37年10月25月　吉川弘文館発行

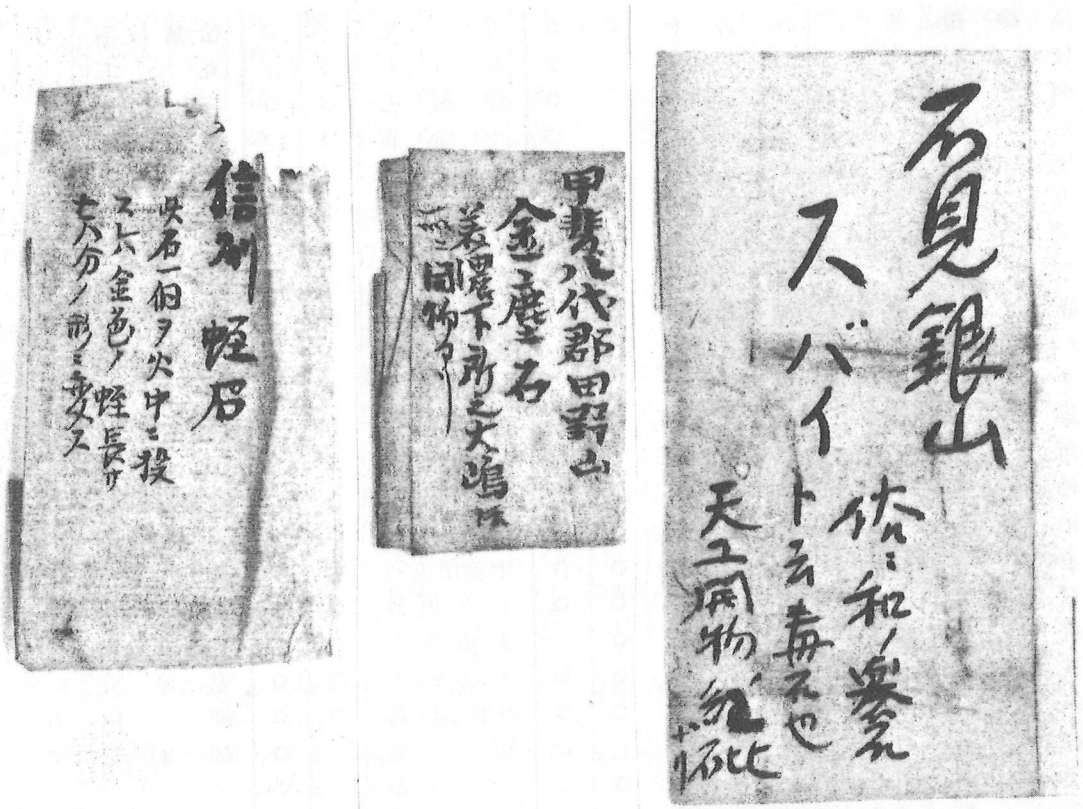
8．益富寿之助：奇石講座第5回　蒹葭堂奇石コレクションについて（昭和44年6月22日第136回 京都地学同好会にて講演）京都地学同好会会報第22号．昭和45年12月20日

9．梶山彦太郎編（稿本）：木村蒹葭堂石貝標本（1979）

10．大阪府立博物場所蔵品目録第1巻　大正4年3月　p.18～19，p.108～109

11．益富寿之助：石1（昭和雲根志）昭和42年8月15日　日本砿物趣味の会発行

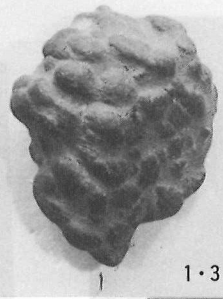
12．髙島屋蒹葭堂会：遺墨遺品展覧会出品図録　大正15年11月23日



蒹葭堂奇石コレクション包紙の例

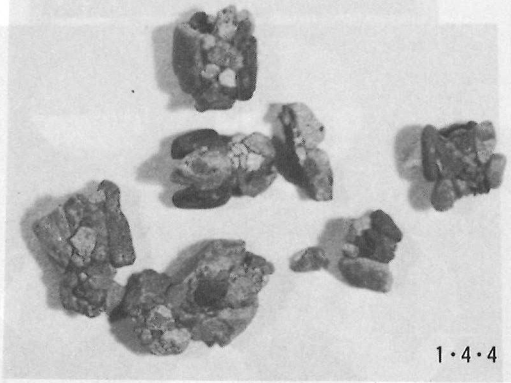
図版1

1・1・6

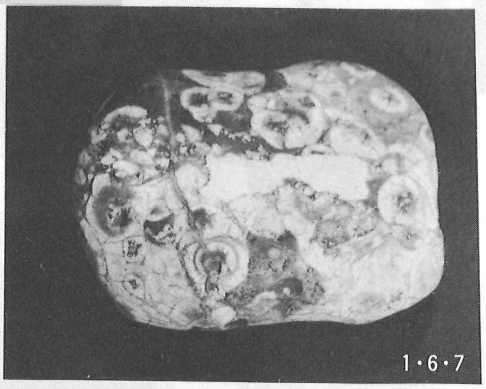


1・3・8

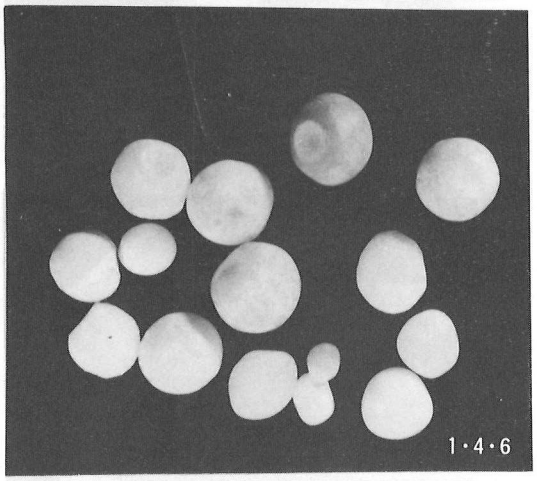
1・5・2



1・4・4

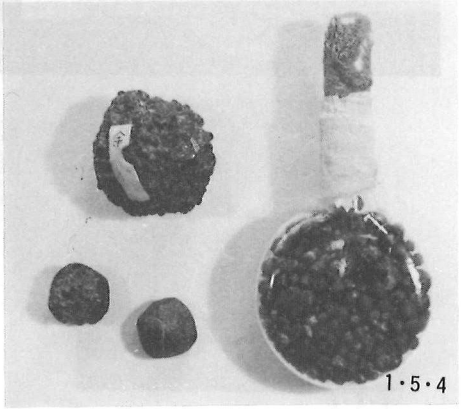


1・6・7



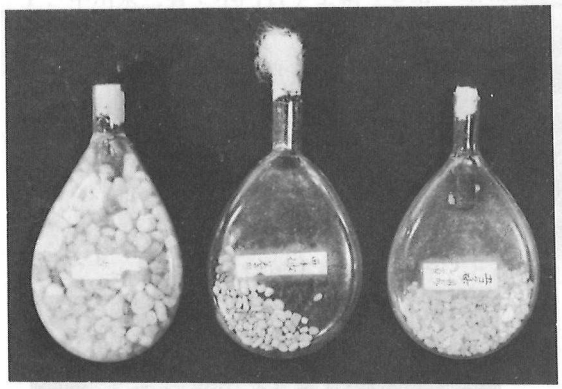
1・4・6

1・4・5

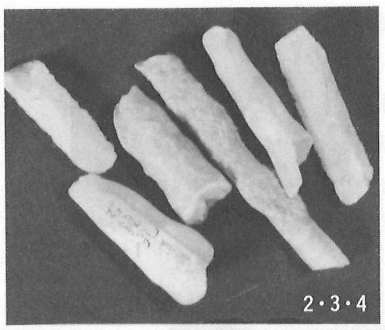


1・5・4

図 版 2



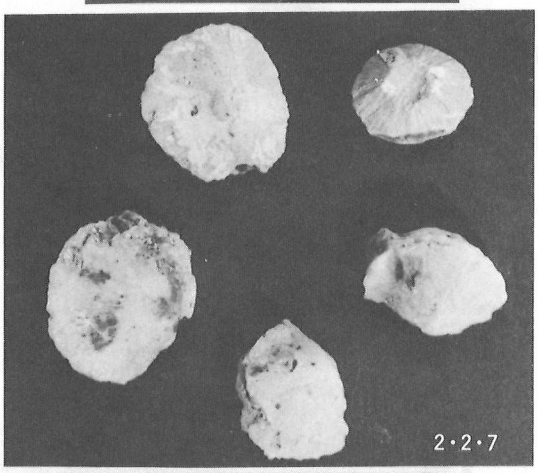
2・3・1



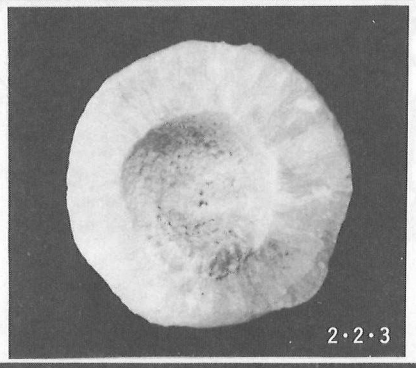
2・3・4

2・3・6

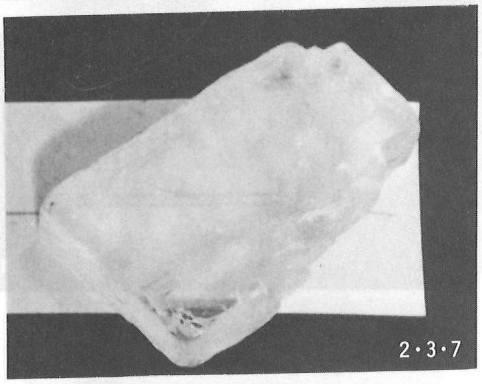
2・1・4



2・2・7



2・2・3

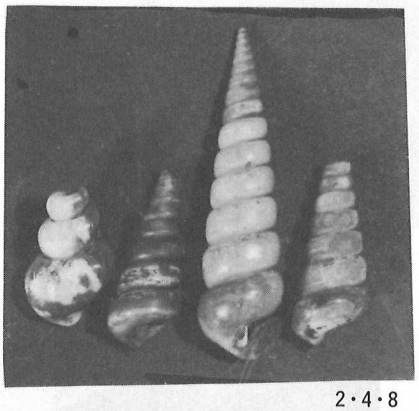


2・3・7

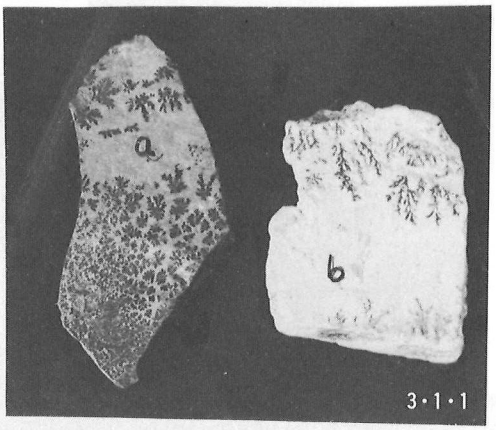
2・4・3

2・4・7

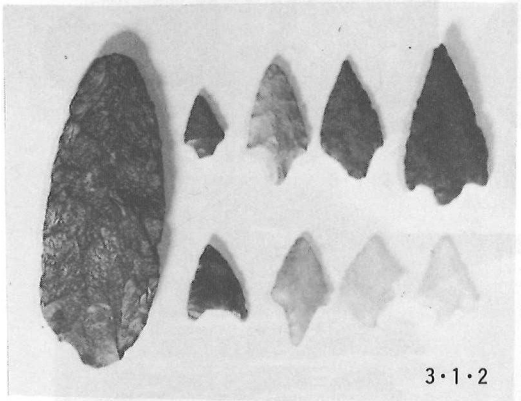
図版 3



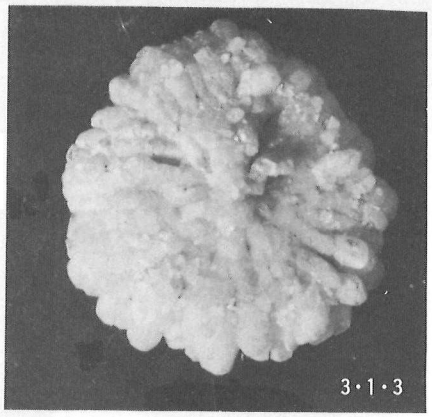
2・4・8



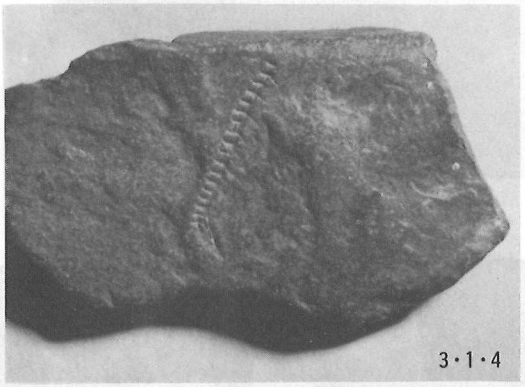
3・1・1



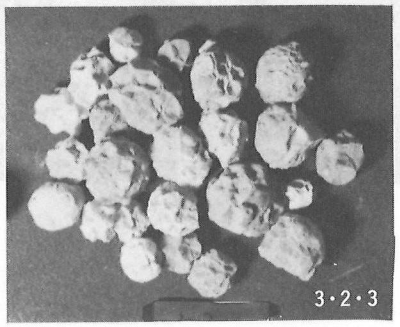
3・1・2



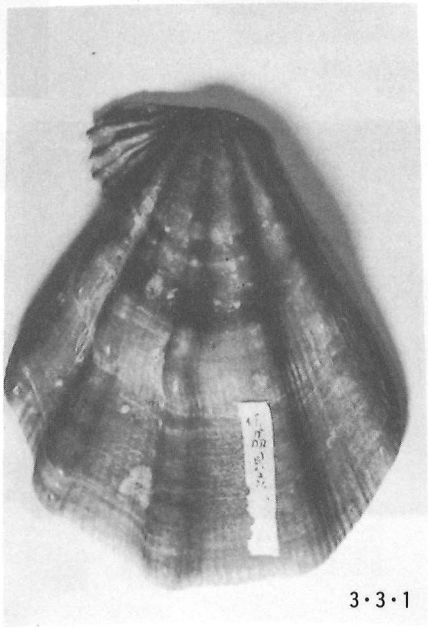
3・1・3



3・1・4



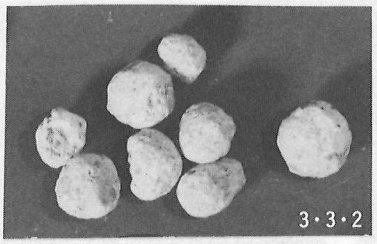
3・2・3



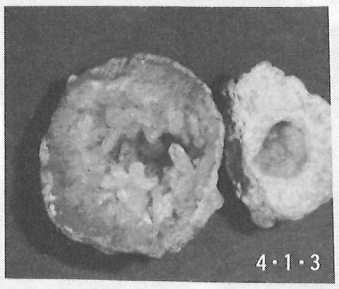
3・3・1

図 版 4

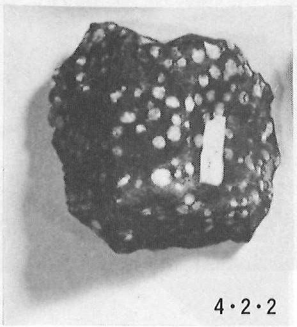
3・3・4



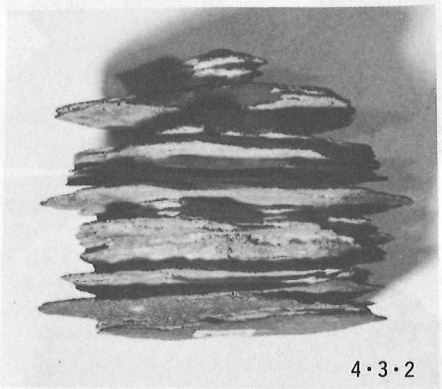
3・3・2



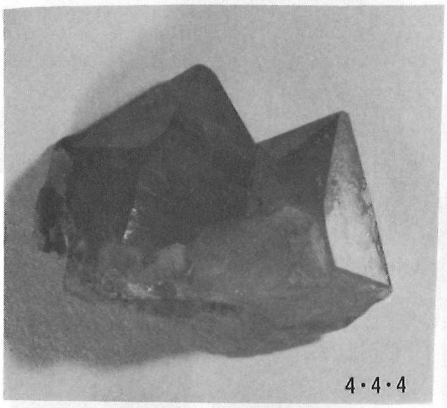
4・1・3



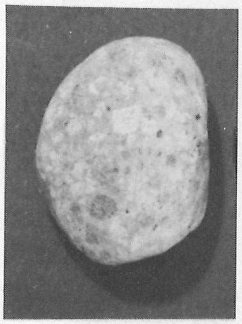
4・2・2



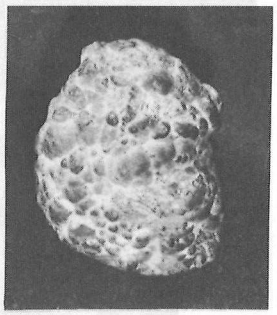
4・3・2



4・4・4

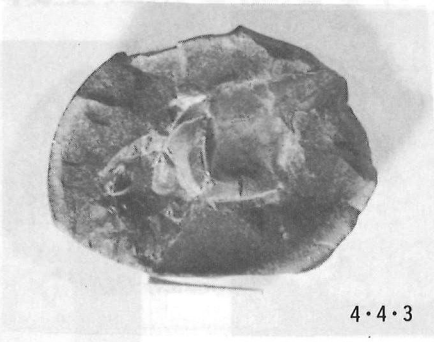


4・3・3



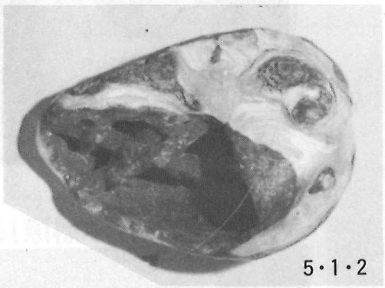
4・4・2

図 版 5

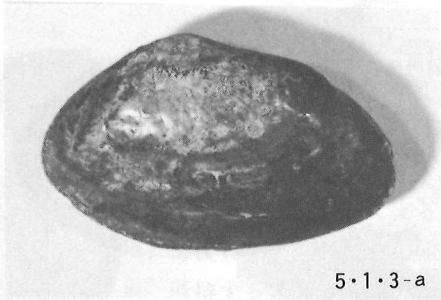


4・4・3

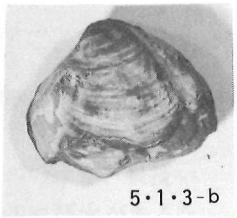
4・5・1



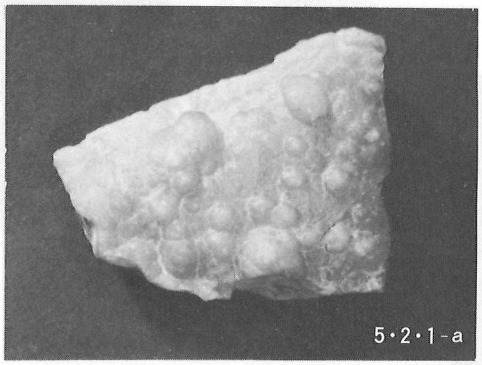
5・1・2



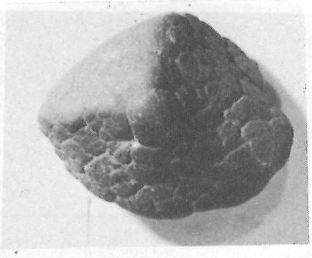
5・1・3-a



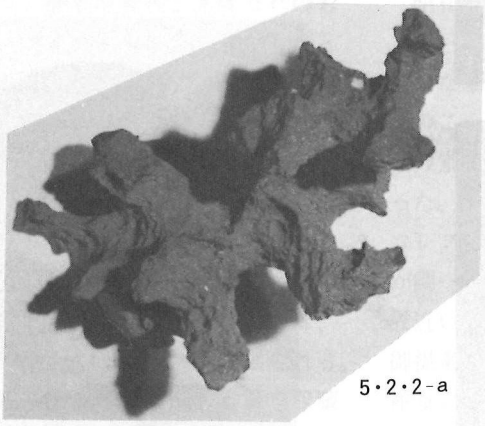
5・1・3-b



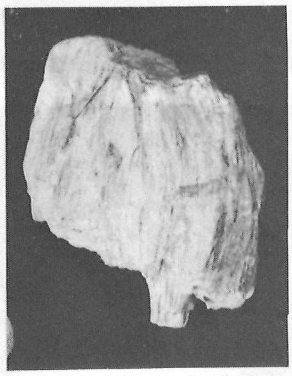
5・2・1-a



5・2・1-b

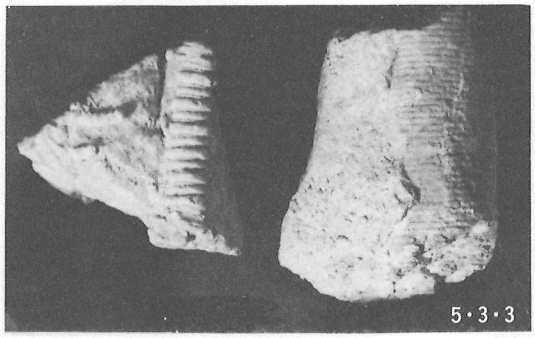


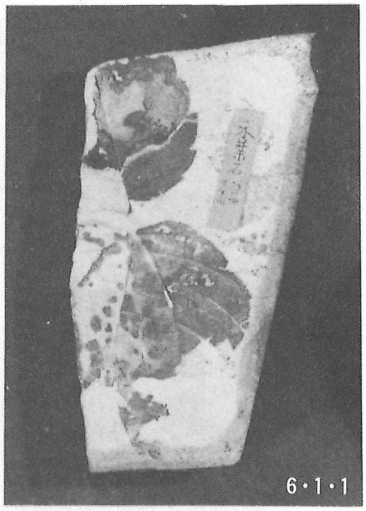
5・2・2-a



5・2・2-b

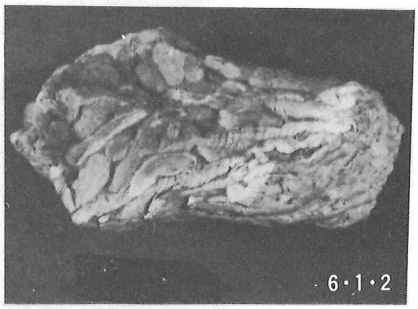
図 版 6

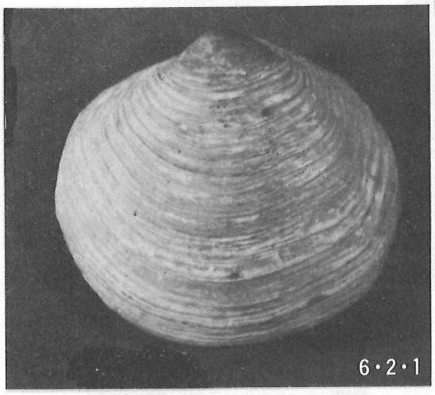

5・3・3


6・1・1

6・2・1

6・2・1


6・1・2


6・2・1

6・1・3

6・2・2

木村蓁葭堂蒐集と推定される貝類標本について

梶山 彦太郎 *

目　次

1．貝類標本及び伝来経路……19
1）標本の内容……19
2）京都から故郷大阪へ……19
3）標本の伝来経路……20
4）蓁葭堂遺族から博物場への途……20
5）標本の特異性(1)……22
6）標本の特異性(2)……24
7）日記による標本作成時期の推定……29
8）まとめ……30
2．標本の出来た環境……30
1）標本の蒐集法……30
2）木村家の経済状態……32
3）蓁葭堂その後……33
4）貝類標本の今後の整理保存……34
注記……35

1．貝類標本及び伝来経路

1）標本の内容

自然史博物館に収蔵された貝石（ばいせき）標本は2部からなっている。一つは鉱物・岩石の標本であり、今一つは貝類の標本である。

江戸時代に石の標本を集めた人達は、人数が比較的限定されていた。寛政9年（1797）、近江石山の秋月館で開かれた奇石会における出品者の記録が、滋賀県草津市木川の西遊寺に保存されていて、それには五品を出品した摂津大坂・蓁葭堂の名が見られる[1]。このような物産会は限られた物産学者の集りであり、標本を見ると大体だれのものか推定される位、コレクションは少ないものと思われる。石に関心を持つ人達は、一般人の間にも見られるが、それは形の良い石、美しい石、何等かの姿を表わした石などを集め観賞する、いわゆる玩石趣味といった方面のものが多い。いい変えれば、銘石・水石・盆石のジャンルに属する。蓁葭堂石標本の様に、種々の石を一定の箱の中に組み入れ、岩石鉱物標本として保存することは、物産学本草学等に興味を持つ特定の人に限られる。

一方、貝標本の場合は長年拾い集めた貝を収蔵する、いわゆる愛玩者によるもののほか、貝掩い貝、源氏貝、歌仙貝などの組み入れ標本があるため、所持する人の範囲が非常に拡大されてくる。特に紀州にあっては、藩の奨励もあったらしく、田辺方面では文化11年（1814）「田辺貝価録」なるものが作られ、蒐集家の用命を受けて京都へまで標本を携えたといわれる[2]。したがって、岩石鉱物標本は前章で益富氏により蓁葭堂標本と断定されたが、貝標本の場合は、蒐集者又は所有者の推定は慎重を期さねばならない事となってくる。

2）京都から故郷大阪へ

昭和49年2月23日のこと、メタセコイアで有名な故三木茂博士の告別式が営まれた。この式に参加した筆者は、出席されていた益富寿之助氏と種々のことを話し合う機会を得た。その時、話題が蓁葭堂標本の事に転じ、氏から次の様な提言があった。すなわち、「私の所には推定蓁葭堂の貝石コレクションがある。石は私が調べるが、貝は君が調べ、報告書を書く事を前提として、標本を完成近い大阪市立自然史博物館に収蔵しては」との御提案である。望郷の蓁葭堂標本の導きか、博物館友の会会長であった三木博士の霊の導きか、腹

＊〒532 大阪市淀川区十三東一丁目14番2号

の底から学究的な益富氏のこの大乗的見地に立った御厚意に対し、私は嬉しくて涙のにじむ思いがした。即座に、大阪の地に受け入れられる様、私として出来るだけの努力をすると答えたのであった。その後、話は急速に進展し、その年はなばなしく開館した自然史博物館の特別展示室に飾られて、錦上更に花をそえたのであった。

3）標本の伝来経路

京都大学理学部地質学鉱物学教室にあったこの標本は、どの様な経路をたどって京都大学へ来たのか。これについては益富氏の文を見ていただきたいが、太平洋戦争たけなわなる時、大阪方面から、この標本は非常に大切なものであるから、しばらく預かってほしい、と持って来られたとの事である。すぐ筆者の念頭に浮んだのは、大阪博物場の収蔵品ではないかとの疑念である。

府立の「大阪博物場」は、明治７年に大阪市東区内本町に設立された。これは現在の動物園、博物館、物産館、遊園地、能楽堂等の性格のものを、同一敷地内に集めた施設であった。明治40年頃から有名無実となって、美術品などは倉庫に入れられたまま、太平洋戦争を迎え、幾棟かの倉庫の一部は爆撃によって破壊された。望月信成氏は「しかしそれ以後は杳として行方不明になったもののあるのは惜しい限りである」と述べられている[3)]。戦後この収蔵品の中のめぼしい美術品は大阪市立美術館に保管替された。

木村蒹葭堂の没後、遺族の人達が生前親交のあった江戸の画家谷文晁の所へこれを報じ、肖像の揮毫を依頼された。程なく生前のスケッチを基にして肖像が画かれ、遺族のもとにとどけられて来た。それが大阪博物場にあった蒹葭堂の肖像画で、現在重要文化財に指定され、大阪府から寄託して大阪市立美術館で保管されている。この肖像画のあった大阪博物場に、蒹葭堂標本も共に収蔵されていたのではないかと、私が推定したのは当然の事であったかも知れない。事実、「明治大正大阪市史」第一巻には「府立博物場。かくて博物場は益々盛大に赴き或は南朝や豊公の遺品を集め、蒹葭堂の遺品を展覧し……」と記されている。蒹葭堂の遺品は南朝や豊公と肩を並べて博物場の呼物となっていたのである。

また、大阪府立中之島図書館には「大阪博物場蔵品目録」なるものが保管されている。謄写版ずり乍ら 150頁に及ぶ大部のものである。内容は書画の部、器具の部、染色及び装束の部、雑品の部、図書の部の５部に分かれた収蔵品台帳である。前記の蒹葭堂肖像画も書画の部の 167号として登録されている。器具の部の内には、玩具其他の所に、人形、石器、民芸品等と並んで、64号として「鉱石類及び貝類37箱」が記されている。然しこれらは蒹葭堂蔵品であるとは明示されていない。

断定するには到らないが、今回の標本が蒹葭堂遺品であれば、標本そのものが特殊なものである為、それ以外の場所にあったと言う事を考えるよりは、博物場収蔵品であった可能性が可成り強いと考えられる。推定となるが、戦時中数多い雑品の中から、この標品の貴重さを知っている保管係の人が、つてを求めてこの標本のみを京都に運んだ可能性が充分考えられる。然し、戦争終結までにその人達に事故でもあったのか、或いは受け入れ方の記録が散逸したものか、あとは判然としないまま、数十年の時が流れたのではなかろうか。私は大阪府庁に何回か足を運んでは、この美談の主を尋ねたが、文化財保護課（以前は社会教育課）の古い人は、あれは商工課の所管で、こちらは知らないとの事であり、商工課の人達からも、何分古い事なので何の記録もないといった言葉が戻って来るのみであって、未だ確かな情報は得ることができないでいる。

4）蒹葭堂遺族から博物場への途

それでは、蒹葭堂遺族が当然保管していた筈の肖像画や、石類貝類標本が、如何にして博物場に入ったか、その経路について探究することにする。

晩年の木村蒹葭堂は酒増石のとがめから、大阪の地を離れて２年あまり伊勢川尻村（現在は四日市市に含まれる）で暮らしたが、寛政５年（1793）２月に大阪に戻ってから一時落ち付いたのは、堀

江の自宅ではなく備後町三丁目である。それから1カ月余で、呉服町へ引越している。その場所は淀屋橋筋呉服町の東南角の家で（図1）、文具店として墨などを売ったとの説もある。この家に住む相続人の坪井屋吉右衛門の許に、可成りの遺品が保管されていたらしく、暁鐘成の「蓁葭堂雑録」（安政3年・1856）は、この遺品によって編纂された事が判っている。

この様にして明治維新を迎えるのであるが、蓁葭堂の家から約300m北方にあった平瀬家（図1）が、蓁葭堂遺品の博物場移管の媒体として浮び上って来る。平瀬家は千種屋と称し、大名貸及び両

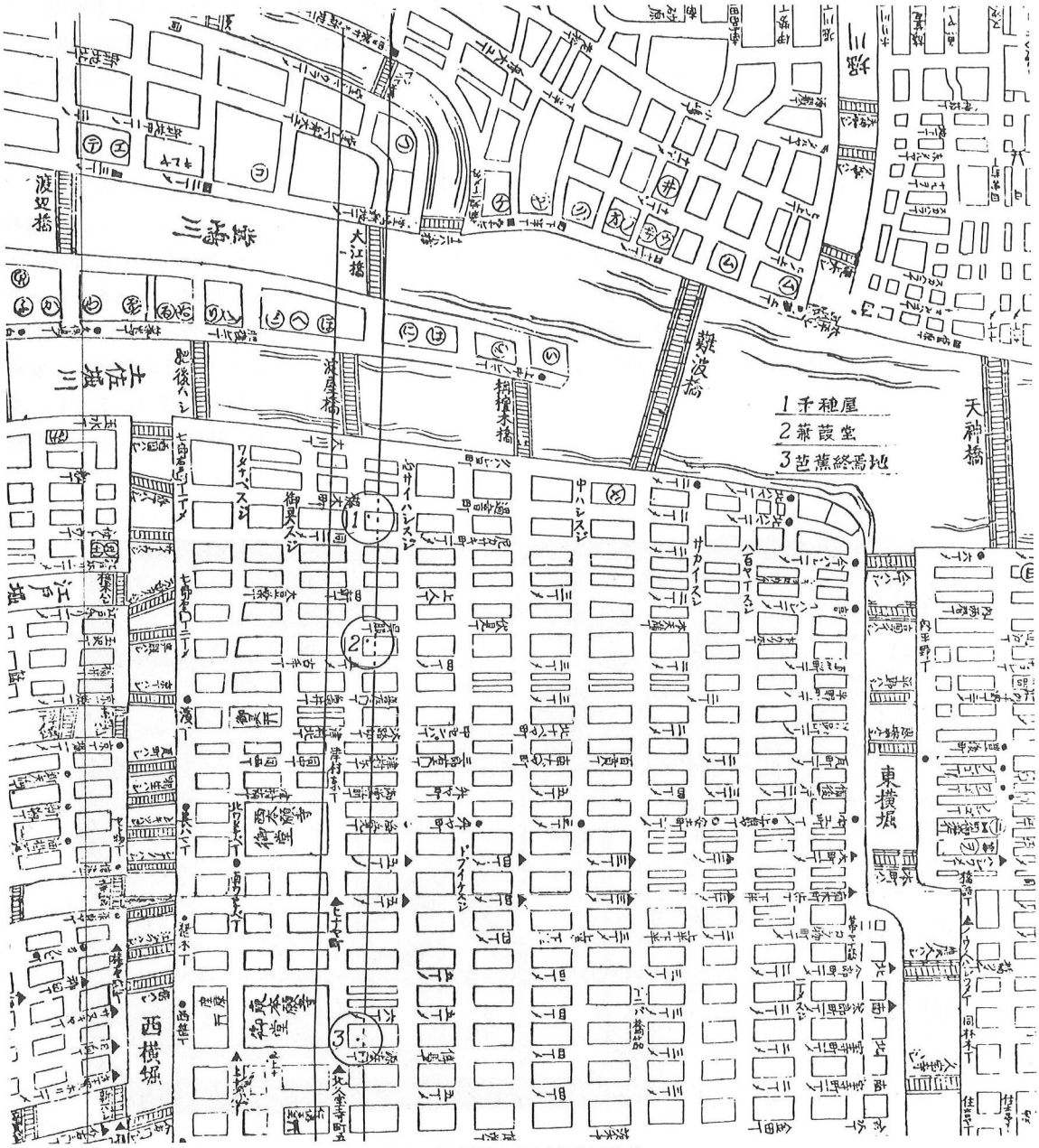


図1．御堂筋付近図（宝暦大阪図）

替店として大阪でも屈指の大店であった。明治年代７代目平瀬亀之助は、第三十二国立銀行を起して頭取となり、また大阪博物場長として令名があったと言われる[4]。彼は有名な町人学者でもあり、一大趣味者でもあった。茶道、能楽、俳諧に通じ、書画、道具類で気に入ったものは、金額は問題にせず買い集めたとの事である。近所にあった蒹葭堂遺族の家から、遺品が平瀬の家に流れ、あるいは、彼が場長であった大阪博物場に移ったであろう事は自然のなりゆきであったと思われる。「蒹葭堂日記」なども、文政８年（1825）に大應寺で行われた25回忌法要には、まだ遺族の手許にあったらしいが、その後は秋の木の葉の散るように、次々と遺品が離れていったのである。

以上、筆者は可成り強引に標本の移動経路を推定して来たが、この標本の内容に検討を加える時、他に類例を見ない特異性があり、特殊な遺物なるが故に上記の強引な推論も成立し、信憑性も増して行くのではないかと思う。

５）標本の特異性(1)

本貝類標本中にモミジソデ[5] *Aporrhais pespelecani* が３個体含まれている。これはヨーロッパの北海方面に産する貝である。中世に南方との交易が開かれて以来、フィリピン、インド支那方面の貝は時たま見ることが出来るが、ヨーロッパの北部から将来したとなると、非常に珍らしい存在となる。恐らくオランダからはるばるもたらされたものと思われる。鎖国の江戸時代に如何にしてヨーロッパの貝が、この標品箱の内に組み入れられるに到ったのであろうか(写真１)。

幸な事に、安永８年（1779）蒹葭堂44歳の時から67歳で没するまでの大半の日記が、現在まで伝えられ出版もされており、それによって彼の動静を知る事が出来る[6]。江戸参府の紅毛（おらんだ）人は常に大阪に宿泊していた。蒹葭堂日記には、それが上部欄外などに記入されている。恐らく彼の許へ前もって通報があったのであろう。その回数は、安永８年（1779）正月の第 143回参府のときから、寛政10年（1798）２月の第 155回参府のときまで前

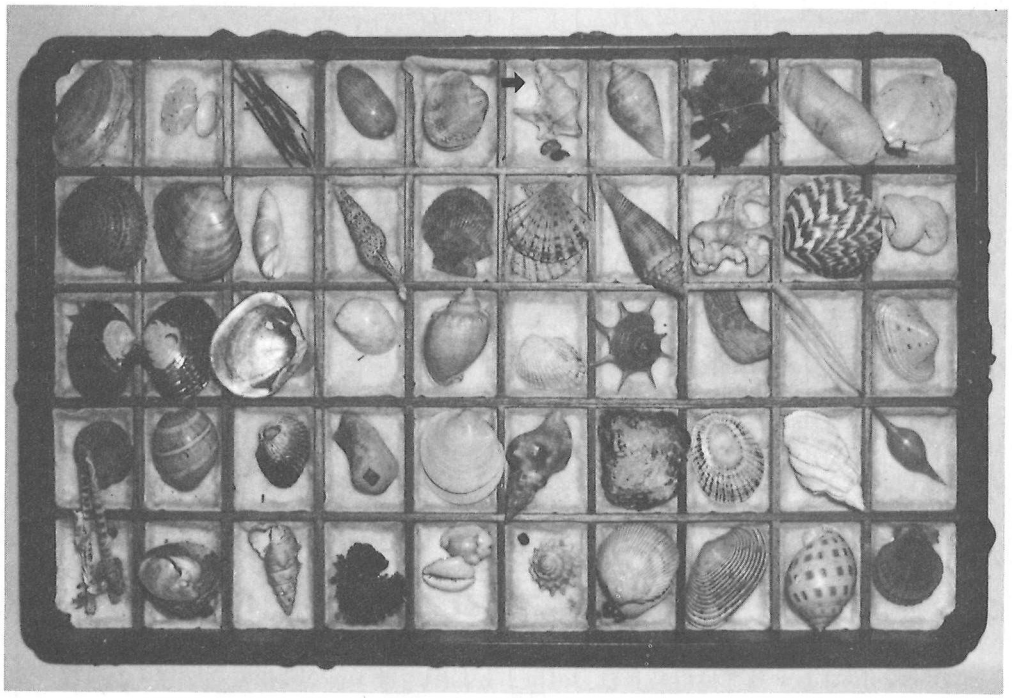


写真１．６段目の箱に納められているモミジソデ（最上列の右から５番目　矢印の貝）

後20回にも及んでいる。日記の存する期間の江戸参府は計12回あり[7]、上り下り共に日記に記されたのが8回（延べ16回）、どちらか一方のみ記されているのは4回である。今その内、天明5年（1785）4月のものを見ると、次のとおりである。

天明5年3月30日

雨　紅毛下江　銅座行　吉雄　本木逢申候

4月朔日

朝銅座行　紅毛面会　本木父子同伴　尼五　茨木　十一屋同船　網島行

4月4日

雨　（以下は上部欄外に記す）紅毛発足

これによると、参府帰途の紅毛が3月30日、銅座に到着した。この時の甲比丹はRombergである。蒹葭堂は直ちに銅座（北浜過書町にあったオランダ宿為川五郎兵衛方）に赴き、通詞の吉雄幸作、本木栄之進に会っている。翌4月1日には朝から銅座へ行き紅毛に面会しているが、この時は本木父子同伴で、尼五（尼崎屋五兵衛）、茨木、十一屋も同船し、網島に廻っている。そして4月4日に紅毛は長崎へ向って発足した事となる。

紅毛に面会のときは常に銅座に行くが、天明8年（1788）4月に限り紅毛館なる名称が使われている。

天明8年4月11日

紅毛下江　朝ノヨシ（ただし欄外に記す）

4月13日

紅毛館　舟ニテ行

4月16日

夜紅毛館へ行

4月18日

紅毛発足（以上欄外に記す）銅座ヨリ紅毛発足

また、同伴者の異なる時、及び単独の時、妻と共の時等があり、寛政6年（1794）5月26日には「紅毛見物家内とも行」と記されている。妻に紅毛人を見せる目的も含まれていたのであろう。この日記の上で蒹葭堂が紅毛と最後に接触したのは次の通りである[8]。ただし、抄出。

寛政6年（1794）5月24日

紅毛下り　銅座行　今村金兵衛加福安五郎子亀吉逢申候

5月25日

夜今村金兵衛来訪

5月26日

紅毛見物家内とも行　晩銅座行　夜川原太十郎来訪

5月27日

早朝今村ニ行直ニ川原太十郎旅宿ニ行　加福安次郎ニ行帰る　昼帰ル

5月28日

来訪紅毛川原太十郎附松口忠蔵来

（以下は欄外）紅毛発足廿八日早天発足

この場合、紅毛は早天に発足と欄外に記されているが、これは前もって連絡があったのを、蒹葭堂が記入しておいたものと思われる。この数日、蒹葭堂は連日、通詞と接触し、28日には訪問者の中に紅毛が記されている。おそらく日記の上では蒹葭堂を訪れた唯一の紅毛であったかも知れない。この年の参府は、甲比丹ゲイスベルト・ヘムミイ(G.Hemmij), 上外科はドイツ人のベルンハルト・ケルレル（A. L. Bernhard Keller）で、江戸では蒹葭堂の親しい友人、大槻玄沢と二日にわたり会っている[9]。また、日記にある紅毛については、次の様な記録がある[10]。

「〔寛政6年[11]〕四月和蘭貢使江戸ニ来ル栗本丹洲其旅館ニ就キ対話シ物産ノ事ヲ論ス　和蘭貢使隨従ノ医師ヘルンハルト、ケルレル大阪ニテ蒹葭堂坪井吉右衛門ニ面談シ別後兵庫ヨリ一書ヲ裁シテ左ノ諸品ヲ求ム

一　日本産銅品諸種及金石類
一　水晶類、黒紫石、寒水石、サラサ石
一　ワタノ木図並枝実
一　漆ノ木
一　紙ノ木
一　山ノイモ
一　味噌豆
一　正真竜涎香
一　真珠及貝類珍敷品」

物知りの蒹葭堂は、紅毛人の旺盛な知識欲から出る質問を、得意の博学に物を言わせて滔滔と答

え、彼等に満足を与えて来たのであろう。

文政９年（1826）には、ドゥ・スチュルレルに随伴してシーボルトが往復路共に大阪に数日滞在しているが、すでに蒹葭堂没後26年が経過した時であったのは残念なことである。

さて、蒹葭堂の著述にオランダ関係のものの多いのも当然の事かも知れない。所蔵の貝標品中にもオランダ付近の貝が含まれていたと想像できる。事実、彼の著書「渚の玉」(奈伎左乃玉)[12]にも、日本各地の貝類産地を記した後、「この国々の外には、琉球（りうきう）　朝鮮（てうせん）　暹羅（しゃむ）　巴爾西（ばるしや）　闍婆（じゃがたら）　和蘭（おらんた）、唐山にてハ江南福建などの地に産する貝ども、稀にはわが国にもて来るものあり」と記されている。

蒹葭堂とは20歳年長の伊藤若冲という画家が京都に住んでいた。若冲は自然の美を花鳥風月に求めるばかりでなく、虫や貝の中にも求めた人で、有名な「甲介図」には百数十個の貝類を、海藻、石さんご等と共に図中一面に配し、見事に貝の世界を画き出している。しかし、ここに画かれた貝の分布域はトウカムリのような南方地域のものどまりで、それ以遠のものは認められない。だから、私の知る範囲内では、推定蒹葭堂貝類標本中のモミジソデは、現存の貝標本としてはヨーロッパからの最初の将来品である。江戸時代の鎖国方針は、明治維新まで続いたのであって、標本中のヨーロッパの貝類の混入は、彼等と交渉のあった特定の人達に限られた事であったと思われる。

6）標本の特異性(2)

平安時代から長足の進歩をとげた日本文学は、源氏物語、伊勢物語等を最高峯として数々の物語を生み出し、和歌の流行もめざましいものがあった。これに平行して貝の道でも、貝に種々の風雅な名を付し、これら文学の所産と合致させる傾向が産まれて来た。この風は、江戸時代に入り、元禄の頃には一層その度を加えて来る。寛延４年(1751)発行の「貝盡浦の錦」[13]　はその時代色をよく現わした書である。上巻の“目録”(目次)をみても、次のような項を含み、主体は源氏貝、歌仙貝で占められている。

歌仙貝遺漏百余品	源氏介配当目録
前歌仙貝三十六品評	新撰六歌仙介
後歌仙貝三十六品評	

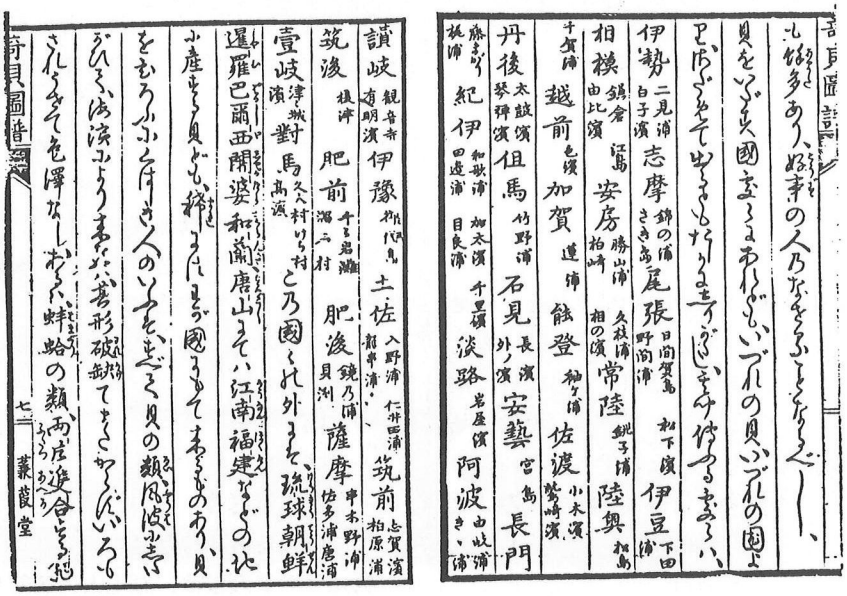


図２．蒹葭堂著「渚の玉」の貝の産地について記した部分

一方、平安時代から“貝掩い”なる遊技がある。沢山のハマグリの殻の内部は、花鳥等や源氏物語、伊勢物語にちなむ絵を極彩色に画いてある。まず、地貝といって片方の殻のみを伏せてまるく並べ、その中央に他の方の殻1個を容器からとり出す。これを出貝というが、競技者は貝内部の絵に関係なく、表面のハマグリ本来の模様によって、出貝にあう貝を地貝の中から探し出す競技である。もし殻が間違っておれば、貝の蝶番の凹凸が合わないのでわかる事となる。この貝掩いは、文学的素養がない子供でも競技に参加する事が出来る為、上流家庭の嫁入り道具等には、必ずこれが付加される事となった。こうして江戸時代中期以後の、豪華な貝掩い一揃いは、各所に見受けられる様になった。図3は貝掩いで遊ぶ人達の図[14]である。

然し、一方では、文学的な源氏貝、歌仙貝は影をひそめるに到った。図4は「貝盡浦の錦」上巻15-16丁に登載された絵[15]で、3人の婦人と1人の侍女が源氏貝、歌仙貝で遊ぶ有様を画き、後には今まで遊んでいたものか、貝掩いを収納した八角の箱一揃い2個がみられる。また後の別室には、いま遊技中の遊技貝の覆い箱(収納ケース)がある。

図3．貝おおい遊技図.「貝盡浦の錦」下巻20-21丁の絵を修正したもの（金丸但馬，1935より引用）.

推定蒹葭堂貝類標本は、ここに画かれた源氏貝の代表的なもので、一番上段の箱は大小二箇に切られているが、その大きい方は7列と8列に区切り、合計56個の枡がある。これは源氏物語五十四帖に前後2枡を加え56枡としたものである。標本に付加されていた目録には、最初の枡には「新撰源氏貝」と記し、最後の枡には「以上五十四貝之本名百貝の所記」と書かれている。その間の54枡には、源氏物語五十四帖の巻名と、それぞれ、これに該当させた貝名が書かれている。最上段の小さい方の箱は、36枡ある。残念なことに目録を欠いているが、ここには三十六歌仙貝が納められて

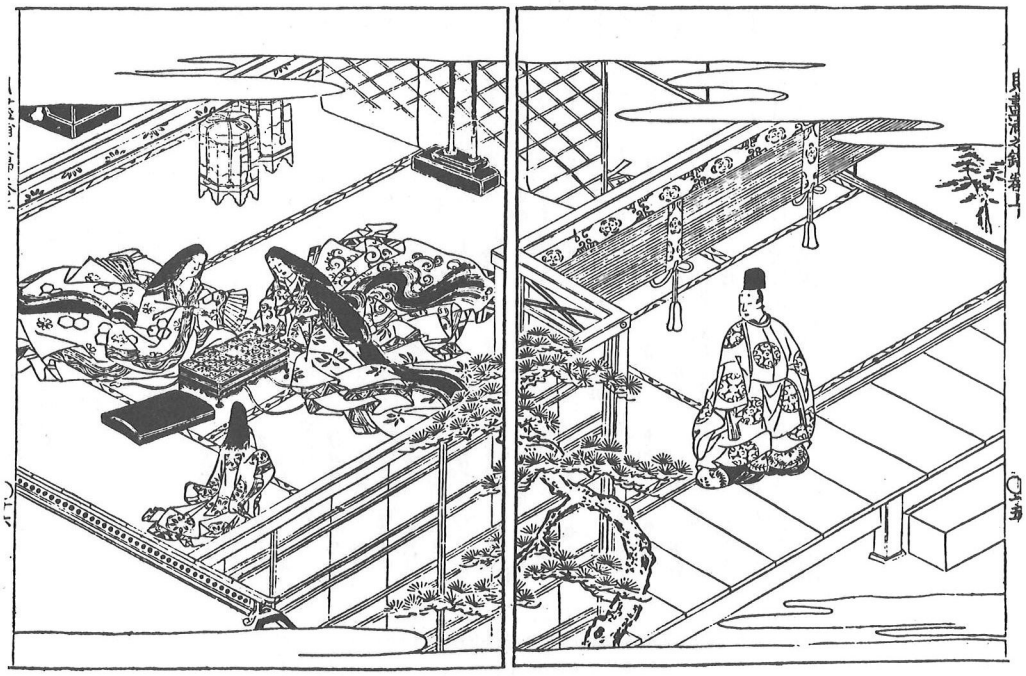


図4．源氏貝遊技図．「貝盡浦の錦」上巻15-16丁.

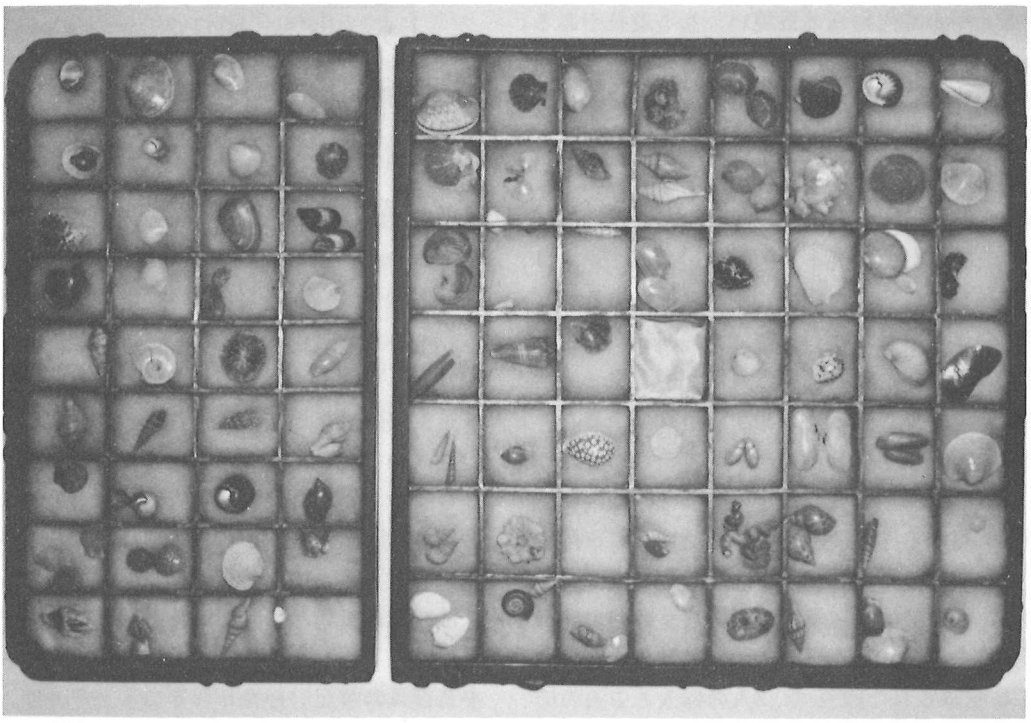


写真２．推定蒹葭堂貝類標本の一番上段の箱．
右側は源氏貝で、その目録は図５に示す．左側は三十六歌仙貝と思われるが、目録は残っていない．

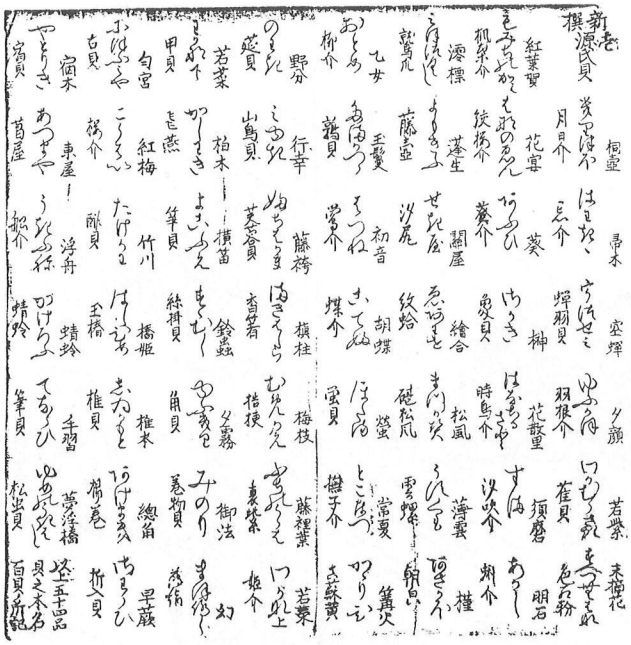


図５．推定蒹葭堂貝類標本の目録のひとつ．
これは写真２右側の源氏貝のもの．大きさは箱と同一．

いたのであろう。最下段には十二支等12個の同大の枡を設けており、目録に寅卯等の字がわずかに残っているが、他の字は破損欠除している。恐らく十二支に該当する貝が、それぞれの枡に入れられていたのであろう。その他、六歌仙を表示した所もある。この様な源氏貝、歌仙貝標本は、現在残っているものが非常に少いのである。

木村蒹葭堂も、「貝盡浦の錦」が出版された寛延４年には、未だ16歳の青年である。39歳のときの出版である彼の「渚の玉」には、「大枝流芳といへる人、貝をこのみて、あまたあつめおき、其形を図し、その品をわかち、浦の錦といふ書をあらはし、梓にしてすでに世にひろまりぬ」と述べている。そして「さきの浦の錦におちたるをひろひぬれば催馬楽の詞をとり、名づけて渚の玉といへり」と書名の由来を明かにしている。このように、これが「浦の錦」の影響下に書かれたことは明かである。

推定蒹葭堂標本に付随する前記標本目録（図５）と、「貝盡浦の錦」の源氏介配当目録（図６）を照合すると、部分的な相違はあるが、大体において記載貝の名は合致し、この標本が、その系統を保った源氏貝標本である事がわかる。

源氏貝、歌仙貝と名のついたものが、江戸時代後期に全然無いと言うのではない。例えば、かって平瀬貝類博物館写真帳に登載された、江州のある旧家に伝えられたとされる標本がある[16]。これは標本箱の区画にも技巧を加えて、波形、花形、菱形等種々の趣向を凝らし、標本貝も風流にこと寄せて組み合わせ、源氏貝、歌仙貝、嘉定貝、七夕貝、十二月花鳥貝、長浜、錦の浦、百貝など優美な名目を付したものもみとめられた。しかしこれらはあくまで枝流、又は邪流に属すべきものである。中世からの伝統を持った本格的な源氏貝、歌仙貝の標本となると、大変珍らしく、江戸時代でも古い頃の遺品の残されている様な場所にしか存在しないものである。このことは、今回の標本の移動経路をたどる上からも、有力な参考となる。

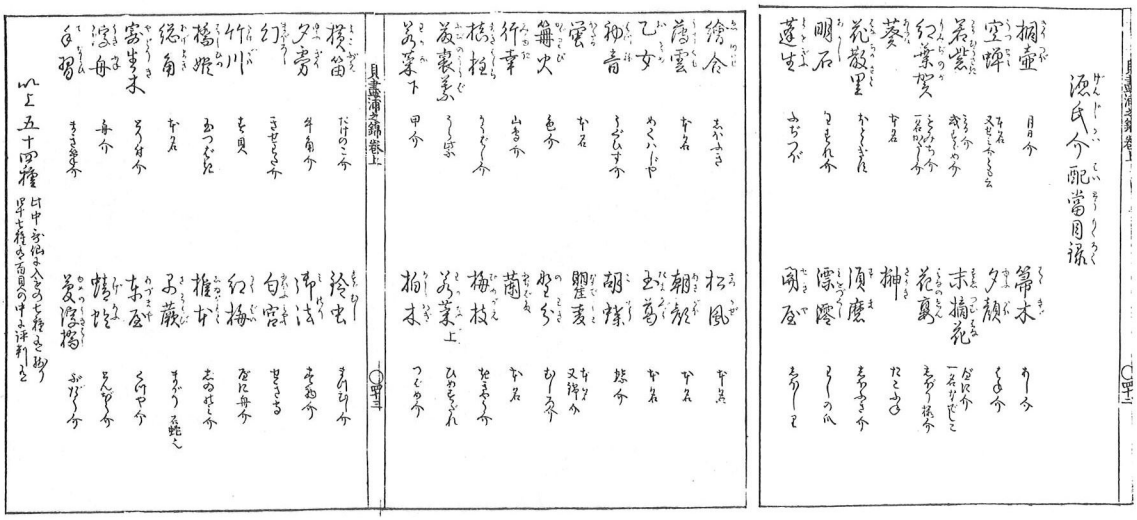


図６．大枝流芳「貝盡浦の錦」にある源氏介配当目録.

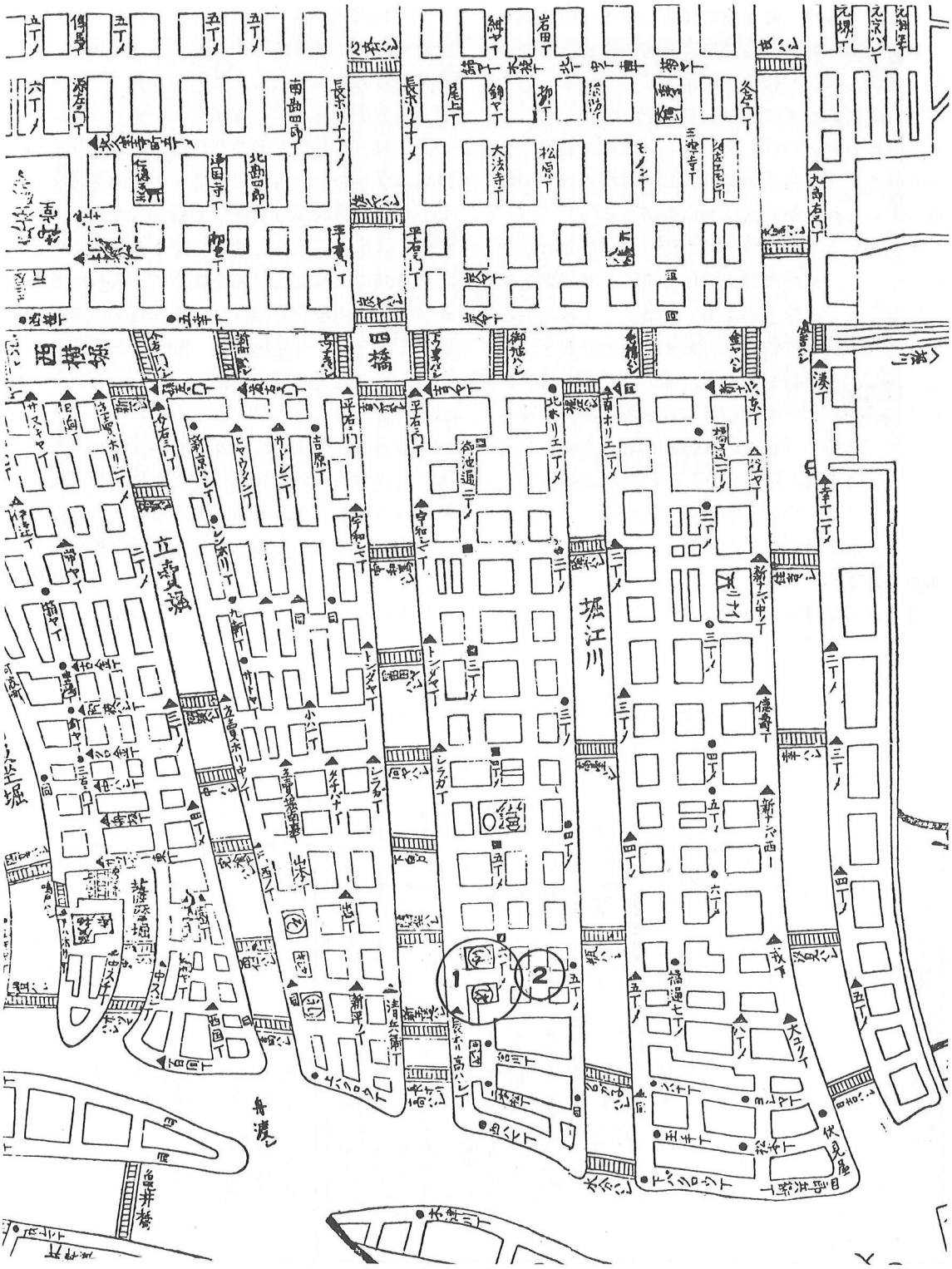


図８．堀江開鑿後の図（宝暦大阪図）（東が上）
１：土佐屋敷．２：蒹葭堂．

7）日記による標本作成時期の推定

江戸時代の大阪は次々と堀がほられ、ほり上げられた土は両岸の土地の地あげに用いられ、舟運の便の良い宅地が次第に造成されて行った。

蒹葭堂の生まれた堀江の地は、その終期の元禄11年（彼の生れる30余年前）に出来た堀（堀江川）によって、南堀江と北堀江に別かれ、両岸は宅地化して行くのであるが（図８）、堀江川掘削前の地図（図７）では土佐屋敷があるのみで、あとは不規則な水路が走る低湿地である。木村家は、蒹葭堂が生まれる以前からの造酒屋であったとの記録から見て、その家は土佐屋敷と共に、堀江の草わけと思われる[17]。

こうして背中合わせにあった土佐屋敷と、木村家とは他よりも交渉の多い間柄であったと思われる。蒹葭堂日記天明２年（1782）２月10日の所に「土佐邸に行」と記され、上欄余白には「八ツ時土州候着邸……鳳羽一匣、文貝七重、卵子餅、善知鳥、土候御覧ニ入ル」と記されている。京都大学にあった推定蒹葭堂貝類標本は、漆塗り七重の標本箱に入っており、正しく文貝七重に符合する。この天明２年は蒹葭堂47歳の血気盛りである。一介の町人が、大名の前に珍らしい標本類を並べ、得々と語る有様が目の前に見えるように思われる。

尚ここで、蒹葭堂関係品と推定する資料として検討を要するものが今一つある。この標本の覆箱として、木製の収納ケースが付加されているが、その収納口扉は蝶番をつけず、下部に凸出部を造り、上部を錠前で止める様になっている。そして中央上位に、飾りと把手を兼ねた円形の座板の様な

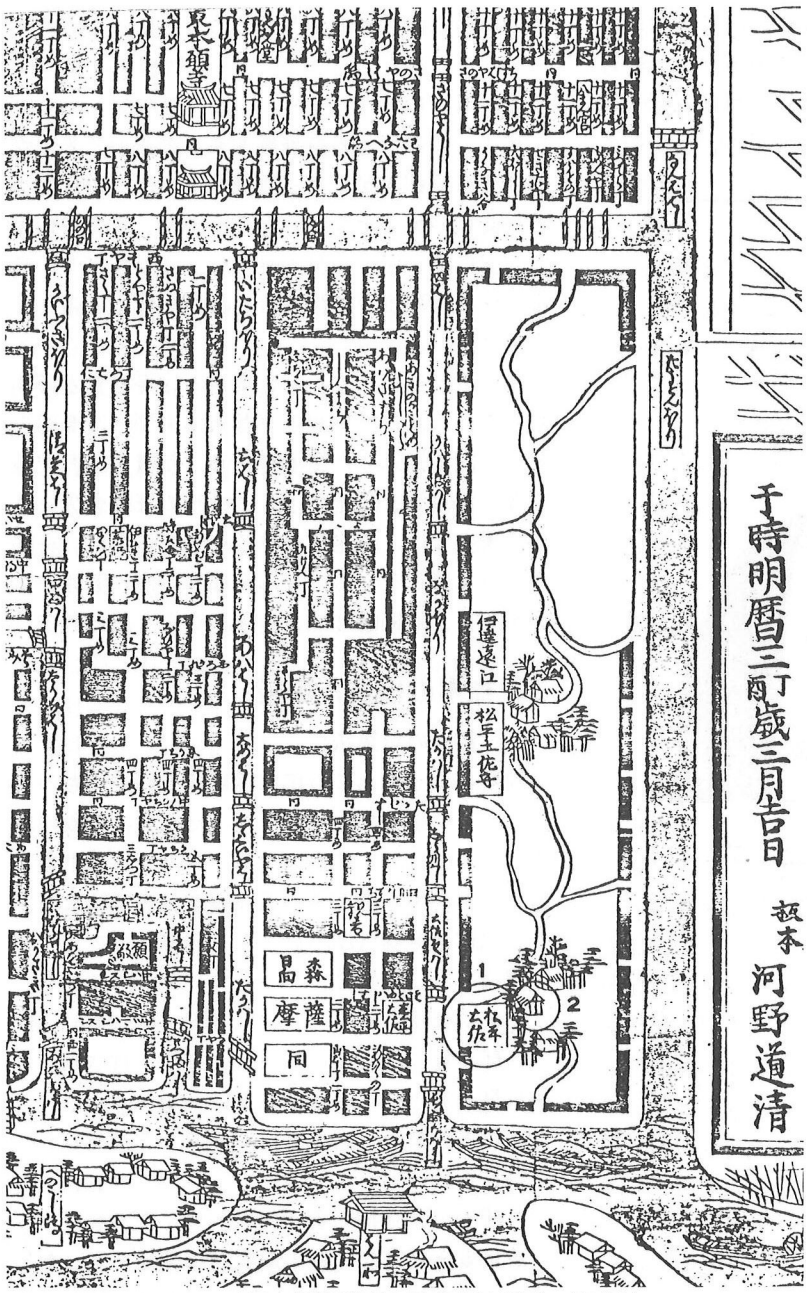


図７．堀江開鑿前の図（明暦大阪図）（東が上）
１：土佐屋敷．２：蒹葭堂．

ものが付けられている。そのままではカタバミ紋の崩れたものの様である(図10)。一方、蒹葭堂の定紋を調べるとする。谷文晁の画いた肖像画の衣服は無紋であるが、今一つ蒹葭堂の肖像が残っている。これは蒹葭堂没後、相続人の許に保管されていた遺品によって、暁鐘成が著した「蒹葭堂雑録」に登載されたものである(図9)。この絵は應擧の弟子の森徹山の画いたものであるが、この肖像画は紋付を着用しており、その紋形は完全には現れていないが、観察し得る範囲では、三つ柏または

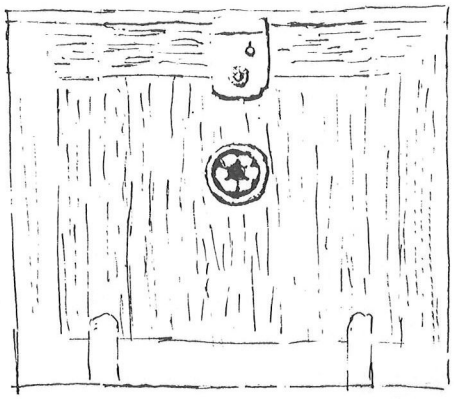


図9．上．蒹葭堂肖像図．森徹山筆
(暁鐘成．「蒹葭堂雑録」安政3年より引用)

図10．下．収納ケース扉中央飾り．

これに近いものと思われる。一方、収納ケース扉中央の飾りについては、これが単なる図案か、又は定紋を簡略化した模様か、紋とすれば木村家が三つ柏以外の替紋を持っていたかなど、今後検討を要する問題が残されている。しかし彼の定数との間には、中央から三方に走る葉状体を表現したという点で共通点を見出しうる。

8）まとめ

以上、この標本の特異性を長々と説いて来たが、要するに京都大学にあった標本は、江戸時代でも古い時代の風をそなえたものであり、その中のオランダの海に産する貝からみて、オランダとの交渉を保った環境下に作られた特殊な標本と言えるだろう。

蒹葭堂の貝類標本とした場合も、蒹葭堂と博物場との間、及び博物場と京都大学の間と、2回の不明時期を通過した標本である。伝来事項の記載銘等、決定的な断定を下しうる程の資料を欠いている現在では、断定はさけるべきであるが、一部の疑点を残しながら“ほぼ蒹葭堂標本に間違いなかろう”と一応信じてよい事になると思われる。

2．標本の出来た環境

1）標本の蒐集法

前章によって、この標本はほぼ蒹葭堂のものと信じてよい事となって来たが、それでは大阪の地で、どの様にして標本は蒐集されたか、以下順を追って論考する事とする。蒹葭堂日記には次のような記述がある（抄出)。

寛政8年11月朔日
　夜初夜琉人薩邸入（以上、欄外に記す)昼ヨリ薩邸ニ行　琉人夜ニ入見物　夜帰
11月2日
　琉人皆来
11月5日
　琉人川登見物

珍貝多き琉球から遠来の客が薩摩邸に入ったとの知らせが来ると、早速同邸へ出かけ、翌2日には「琉人皆来」で歓待につとめ、5日には趣を変

えて「川登見物」とあるから舟による見物に招待したものと思われる。いずれ彼等から物産貝類の送付を期待しながら、歓待に盡す有様は、現在の貝コレクターと何等変る所が無い。また、石のコレクションについても、

天明6年8月27日

備中鍾乳持参の人　助里要兵衛来　備後砂、盆石持参の由

とある。遠路重い石をわざわざ持参したのである。随分と労をねぎらった事であろう。

蒹葭堂は自分でも採集旅行をたびたび行っているが、一番遠い旅行は江戸行である[18]（一部に伝えられる長崎行には疑問の点がある）。天明4年（1784）8月、蒹葭堂は大番頭としての大阪城勤番を了えて江戸へ下る彼のパトロン増山雪齊に陪従して江戸に赴き、江戸では多くの知己と交遊し、10月朔日朝に大阪の家に帰着している。帰りは気ままな一人旅で、随分採集も行った事と思われる。日記には留守中の自宅への訪問者を整理記入し、上欄に東遊記行有と記されている。しかしこの紀行文は未だ発見されていない。

紀伊方面へは関心が深かった様である。和歌山城までわざわざ貝を拝見に行き、附近の名所を廻った日記に次のものがあり、抄出してみる。

寛政6年（1794）9月15日

朝六ツ時発足　大津中食　信達ニテ大苗代（ヲノシロ）ツタヤ宿

9月21日

高岡屋太郎右衛門逢　同伴吹上御殿御貝拝見　家老鈴村西山　辻久蔵　中村耕雲逢申候

9月22日

和歌浦

9月23日

桑山左内案内ニて海浜見物　権現天神浜ニ休　昼後船ニて玉津島紀三井寺ニ行

9月26日

貝塚発足　大庄夕飯　夜帰る

この旅行では貝の収穫も多かった事であろう。吹上御殿は和歌山城の西南寄りの吹上門を入った所にある。この時、紀州候には面会していないが、次の様な日記もある。即ち、享和元年（1801）2月23日の所に「此日紀州様御目見出　八ツ時帰ル」とあり、上部欄外には「紀州様貝塚ヨリ御登り、昼前ヨリ出て谷町ヲ南へ行　中村左源太逢　さし図ニて京橋土手下御目見」とある。

蒹葭堂の貝に対する態度は多分に学究的な面がある。その著「奇貝図譜」[19]を見ても、紀州方面の有名なコレクターのものを詳細に写生し、所蔵者の名も明記している。オキナエビスの如きも、これを図示したのは、彼が奇貝図譜に無名貝として登載したのが最初である。再版されたこの図譜には岩川友太郎氏の、次の如き説明がある。

『蒹葭翁百二十五年紀念展覧会を機会に其遺著の一部を複製再刊せられるといふ事は、まことに意義のある事で、また斯の如き珍本が百余年後の今日再び公にせられることは啻に好事の方面のみならず、学界の為にも喜ばしい事である』『最初にある紀州田辺の玉置氏蔵品の子ジヌキといふ貝は、北海道方面にある貝で現今でも珍しいものである。』『また、福田柳圃氏所蔵の「無名貝」は「アゲマキ」の一種ならんと推定してあるが、これは世界的に有名な「オキナエビス」一名「長者介」と称せられているもので……』とあり、また、金丸但馬氏は図譜について次の如く説明している[20]。

「蒹葭堂の単なる蒐集家でない事は上述によっても既に察せられる所ではあるが、世の蒐集家の中には往々所有慾の奴隷となり所謂玩物喪志の徒も無いではないが、蒹葭堂は物を愛するのみならず、之を研究する事を愛し克く之を識別する能力を有してゐた。而も奇貝図譜に於て見らるゝ所は同書が自家の蔵品を図した書ではなく、交友各人の所蔵の中から珍奇な貝を選択しその所有者を明示して図したものであって、かゝる図譜は前後に類を見ず誠に卓越した識見、高潔な気品の存する事が偲ばれるのである。書中の奇貝2～3に就て紹介しよう。最初に紀伊田辺玉置嘉市所蔵五品として、ネジヌキ外4種の5図が提出されているが、そのネジヌキは……(中略)……後に目八譜がこの貝を図しチマキボラ（千巻法螺）なる和名を命じた以外、前後に何人も図し得なかった珍品である。

「更に福田柳圃所蔵の中に無名介(按アゲマキの一種ならん)として*Pleurotomaria hirasei*が示されてある」さらに学名の脚注には、「此の貝の産地及び図から推して考へると本図の貝は明かにベニオキナエビス*Pleurotomaria hirasei*であるが、岩川氏がオキナエビス　*P. beyrichi* について述べて居られるのは、ベニオキナエビスなるものが当時世にまだ充分知られて店なかったためと思ふ」とある。

以上二者の説明の中には、無名介（オキナエビス)とネジヌキについて異った見解を示している。日本貝類学会の重鎮ともいえる両氏の、この見解の相違に対し、私としては、ネジヌキについてはその古い名を尊重しようとされた岩川氏より貝の形そのものによりチマキボラに同定された金丸氏の説に賛成する。金丸氏が解説を書かれた昭和10年頃には、オキナエビスは今よりもっと東に寄った海域からしか知られていなかったので、この無名介をベニオキナエビスに同定された氏の苦衷もわかる。しかし、オキナエビスが西の海域にも分布する事が判明している現在では、奇貝図譜の図によって、その何れかを判断しなくてはならない事となる。しかし、これ程精密な図でも種の同定は困難であって、現在、貝界に重きをなす人達の意見も、オキナエビス・ベニオキナエビスの２つに別れている。これが絵画でなく実物の貝標品であれば、たとえそれが破片であっても、種の特徴を現す部分のものであれば容易に判別出来るであろう。種の同定に耐え得る図を画く事は、それ程至難な事であるといわねばならない。とはいえ、奇貝図譜の図は、武蔵石寿の目八譜の出る70年も前に、現在の同定作業に耐え得る位の正確さで写生したものである。玩貝趣味者とは異なり、紀州の貝コレクターの蔵品を写した学究的態度には、最大の敬意を表したい。奇貝図譜の貝を写生して廻った旅行が日記の欠除部分にあるのか、或いは前記の和歌山城吹上御殿で貝拝見の時、そこへ集められていたものか判然としない。

2）木村家の経済状態

木村蒹葭堂の家は代々造酒業である。その経済力と、居住地が交通枢要の都会であるという地の利が加わって、随分珍しいものが彼の許に集められたのであるが、その晩年は交遊は盛んであったが、蒐集はそう思う様には行かなかったらしい。蒹葭堂の表面に現われた業績は随分多くの文献によって伝えられているが、次に木村家の経済面から見た状態を、蒹葭堂が寛政２年に松浦静山に送った書簡（甲子夜話所載)[21]その他によって綴ってみることにする。

幕府は天明６年（1786）の凶作によって、酒造米半減の令を下した。しかるに翌７年には各地で暴動が起るに到った。即ち天明の打毀である。幕府は更に酒造米に制限を加え、従来の造高の三分の一とした。木村家にあっては、主人が趣味に熱中し、酒造業とは名のみで、実体は宮崎屋次右衛門という支配人にまかせ切りであった。ところが寛政元年北組総年寄江川勝次郎の酒之石改めの節、過造を発見されたのである。こうして寛政２年３月裁許がおり、事に当っていた宮崎屋は大阪三郷から立ち退きを命じられ、酒造の権利や酒造の道具は召し上げられた。直接事に当っていなかった蒹葭堂は町内年寄役召し上げ、謹慎という事になった。家屋敷は無事だったものの、家族も大阪居住をよろこばず、また資産の面でも、居宅の外に懸屋敷が４カ所あるが、家賃銀は年々不納となり、“町役出銀も相弁じがたく、年々損失”の状態であった。彼の苦境を最も心配したのは、日頃交流の深かった伊勢長島の領主増山雪斎である。折良く大阪城勤番であったので、蒹葭堂と相談の結果、一家は雪斎の領内の川尻村に寓居する事になった。そしてここで２年余の歳月を送る結果となる。その間に一度大阪に出向き一カ月ほど暮しているが、彼の育った本宅には戻らず、知人の宅等に宿泊している。この頃のことを、蒹葭堂はのちに、「家は多難に値(あ)い、災厄兼ね到り、幾(ほと)んど流離塗炭す」と述懐している[22]。

寛政５年（1793）２月には、故郷大阪での生活がはじまる。帰郷してからの大阪の家も、堀江の彼の生家ではなく、備後町三丁目であった。日記では旅行中朱書されていた記事が、寛政５年２月

11日から墨書となり、「明六ツ時帰宅」とのみ記されている。それから2月17日、26日の2回「呉服町行」と記入され、3月9日に「呉服町引移夜引移」と書かれているのみである。水田紀久氏の指摘によると、東京玉川の静嘉堂文庫に蔵する、水戸藩儒髙野陸沈亭（昌碩）の「西游雑志」に、寛政5年に蒹葭堂を訪れた記事が登載されている[23]ので抄出する。

寛政5年3月9日

晴……帰路木村太吉郎ヲ堺筋ノ備後町第三街ニ訪フ。此日卜居ナリトテ紛雑不啻。他日ヲ期シテ旅舎ニ帰ル。

3月28日

晴……午後、蒹葭堂ヲ淀屋橋筋呉服町南入処ニ訪フ。

これによって葭葭堂日記の不備をおぎなう事が出来る。

彼は大阪に帰ると、先ず備後町三丁目に宿泊しつつ、引越先の呉服町の家への準備をすすめ、3月9日に転宅した事がわかる[24]。

この呉服町の家も、自分の家ではなく借家である。これは相続人の吉右衛門が蒹葭堂死後、その遺品上納に関して差し出した次の文書[25]によってわかる。

乍恐口上

呉服町天満屋太介支配

借屋　坪井屋吉右衛門

一、私儀多吉郎より持伝所持伝候書籍物産薬品類……

蒹葭堂はこの住居で病み、享和2年（1802）正月25日67歳で永眠するが、その場所は御堂筋の開通によって、道路敷地内となっている（図1）。少し南の芭蕉終焉の地や、北にあって蒹葭堂標本の移動に関係したと推定される平瀬家跡等も同じ運命をたどり、昔これらの家の建っていた土壌には、今では名物のイチョウ並木の根がはびこり、その下を地下鉄、地上を自動車が疾駆している。実に感慨無量である。

蒹葭堂の死後、養子の坪井屋吉右衛門と、奉行所の間に、書籍物産類の処置につき交渉があり、幕府の求めるものは上納手続きを済ませ、荷物は次の通り2回にわたり、江戸に差し立てられた[26]。

第一回は、

壹番櫃	唐本	237冊
	物品	6箱
貳番櫃	唐本医書	55冊
	同上写本	54冊
	写本	59冊
	物産	49冊

第二回は、

壹番長持	唐本	597冊
貳番長持	唐本	644冊
参番長持	唐本	577冊
	医書物産写本	27冊
四番長持	唐写本	182冊
	和版本	11冊
	地図	89冊
	風土記	97冊
	外国地理志類	47冊
五番長持	唐本医書	36冊
	物産	121品
	大明省図	1箱
	明嘉靖帝巻	1箱
	琉球夫子廟碑	1幅
	法帖	50冊

幕府はこれに対して、金子五百両を相続人坪井屋吉右衛門に支払っている。

3）蒹葭堂その後

蒹葭堂の墓碑は、菩提寺であった天王寺区餌差町の大応寺[27]にある。和泉砂岩製で正面に蒹葭翁之墓とあり、他の3面には増山雪斎の碑文がきざまれている。全文 747字の長文で、その内容は翁の学問、趣味、性行から家系に到るまで叙述して欠ける所がない。

明治34年3月10日に、鹿田静七氏の主宰で大阪市東区安土町四丁目の書籍商事務所にて、蒹葭堂百回忌が営まれた。そのとき、遺品が多数陳列され、その目録は同年7月に鹿田氏により公刊された[28]。これをみると、出品のなかに「介品　二百

七十種　七函　政岡氏蔵」がある。今回の標本は七重の箱ではあるが、総枡数は 567であり合致しない。また、大正15年11月に 125回忌が高島屋であり、同時に蒹葭堂遺墨遺品展覧会が開催された。その図録には、108，109として加賀豊三郎氏所蔵の「石類標本ノ内蒹葭堂遺愛」「介類標本ノ内蒹葭堂遺愛」の写真が出ている。これは大阪の郷土研究雑誌「上方」146号(昭和18年３月、蒹葭堂特集号)の口絵にも、所蔵者を明記せず転載された。この号はその年１月24日に大応寺で行われた 143回忌を記念するものであった。この標本は写真でみる限り、あまり儘ったものでも無さそうである。何れのコレクターも、余品を保存しているものであるから、一次標本、二次標本という様なまとめ方は有りがちの事である。蒹葭堂の標本と伝えられるものも、今回報告するものが唯一ではないだろう事を記して置く。

本標本については、益富氏の許にある時、東京の小出五郎氏によって、雑誌「ちりぼたん」に紹介されている[29]。標本箱の構造・意匠等について詳細に書かれているが、重ね箱は八重となっている。正しくは七重で、最下段は中が二重になっているのである。

4）貝類標本の今後の整理保存

標本に附随する目録には、前記の通り標本の枡に合わせて線を引き、その中に貝の名がくまなく書き込まれている。それには和歌の記入された所もあり、源氏貝には五十四帖の帖名が記入されている。その他、六歌仙、及び十二支の表示がある。これによって源氏貝、歌仙貝による標本とみる事ができるのである。それぞれの枡に入れられた貝は、見るたびに入れ間違えることもあり、後世の混乱期にも随分移動した事であろうから、原位置がどの枡であったかは不明である。

それでは目録の枡に書かれた貝名の貝を、如何にして選り出して元位置に戻すかという事になるが、古い貝譜による貝名は随分混乱していて、現在使用されている和名とは合致しないものが多い。次の時代即ち江戸末期になると、武蔵石寿の目八譜が現われて来る。そしてこれには全国の貝の方言が克明に記されている。多いものは１個の貝に20～30種の方言、風流名、本草学上の名が記入されて同物異名を明かにしている。現在の学名は動物命名規約によっており先取権が適用されて、一日でも早く発表されたものが有効であるが、和名には先取権は適用されていない。現在の貝の図鑑に使用されている古い時代からの和名は、江戸時代の図譜等を基にして、明治から大正にかけての先学が苦心の上整理設定されたものである。古い貝名を、現在の貝の和名と照合しようとする時、蒹葭堂以前の図譜では、写生図が稚拙、杜撰であり、現在の同定に耐え得る様な図はほとんど見当らない。要するに、近似のどの貝とも見られる様な図が多いのである。その様なわけで、推定蒹葭堂標本の目録に記入された名に相当する貝を、標本中から選出して、元の枡に納めるという作業は、容易に出来るものもあるが、全部というと至難の業という事になって来る。そこで、本標本の保存としては、取りあえず、自然史博物館到着の時点で存在した貝の位置をそのまま保持することとし、貝標本の同定も枡に収まったままで行った。将来研究が進めば、源氏貝、歌仙貝等を標本中から選択のうえ、紙上で構成出来るかも知れない。また、そうありたいと願っている。

ここで私の痛感するのは、如何に精魂を傾けて詳細な貝類の写生図を作っても、あとで自分の研究内容が進展すると標本の見方が変ってくるということである。そうすると絵もまた不充分なものとなってくる。人の書いた絵には個性があり、写真のない時代のそんな資料を基に研究をすすめる時、写生図以外に当時の標本があったなら……と痛感するのは、私一人では無かろうと思う。模式標本の貴重さはこの様なことからも判る。実物標本には、写真に写らない貴重な要素を多分に保持しているからである。次に金丸但馬氏の文を引用しておきたい[30]。

「武蔵石寿の目八譜と畔田伴存の介志とは天保時代に現れた貝類書の双璧とも称すべき名著であるが、之等とても詳細に見れば尚各所に図の不備、

説明の不充分な所があって今日同定に困難を感じ、若しその著述に用ひた標本が遺って居たならばとの感を深うするものがある。然るに書籍は比較的保存し易く、且複写も出来るが、標本は容積が大で後人に厄介視せらるゝ事あり且つ分散し易いので、之等大蒐集が原形の儘で遺って居るといふ事は望み得られぬ事に属する。

明治の御世に至り、世上伝来の標本にして之が博物館に蒐集せられたものも少くなかったらしく、聞くが如くんば彼の帝室博物館目録中に産地不詳として記されてある標本は其れの解体せられたものだといふ事である。中には来歴の判明して居る組物もあったであらうに今は尋ねる由もない。」

今回の推定蒹葭堂標本の伝来経路は、或いは将来書き替えられる時があるかも知れない。これは伝来を証する銘文等、決定的な資料を欠く標本としては、当然の弱点でもある。しかし変らないのは、この標本が相当古い時代の１セットであり、目録には 578枡（標本箱は 567枡）のほとんどに、収納されていたであろう貝類の、古い名が記されている事である。将来この標本の研究が進み、標本がそれぞれ所属した元の枡に納まる時が来れば、貝類古名の研究は飛躍的に進展を示す事であろう。この様な意味からも、本貝類標本の貴重さがうかがえる。

注記

1．益富寿之助（1967）『石（昭和雲根志）』益富寿之助博士紫綬褒章受賞記念会。〔３頁，20頁参照〕

2．金丸但馬（1938）『日本貝類学史（19）第５篇　江戸時代（其の２）　第９章　地方的貝類調査と標本商の出現』貝類学雑誌ヴィナス(The Venus)，８（１）：48—50．日本貝類学会。

3．望月信成（1973）『〔大阪の文化財〕第二章　芸術史的検討』毎日放送文化双書３「大阪の文化財」：97—275．毎日放送。〔225頁参照〕

4．木津宗泉ほか（1932）『露香翁を語る』上方，（14）：228—234．上方郷土研究会。

宮本又次（1974）『北浜界隈由来記』大阪春秋，２（２）24—44．大阪春秋社。〔29頁参照〕

5．この和名は，下記の図鑑ではじめて命名された。

鹿間時夫・堀越増興（1963）原色図鑑　世界の貝。北隆館。〔23図版４図及び35頁参照〕

現在，外国産の貝にもどんどん和名が付けられつつあり，命名者によって名が異り混乱することもありうる。

6．水田紀久編（1972）『蒹葭堂日記翻刻編』中尾松泉堂書店。

7．板沢武雄（1939）『日蘭文化交渉に於ける人的要素』「東西交渉史論上巻」冨山房に所収。これは次の80—128頁に転載されている。

板沢武雄（1959）『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館。

8．この次の参府の年，すなわち寛政10年（1798）２月22日の日記には「紅毛上坂」と記されているのみである。寛政６年と同じく，甲比丹は Hemmij であったが，江戸からの帰途，掛川で病死した。

9．岡田千曳（1935）『長崎屋と和蘭陀貢使』「日本橋」第３号に所収。これは次の93-113頁に転載されている。岡田千曳（1953）紅毛文化史話。創元社。

10．白井光太郎（明治41・1908）『増訂日本博物学年表』丸善・文淵堂。

11．それまで，江戸参府は年１回行われていたが，寛政２年からは５年目，すなわち４年に１回と改められた。従って寛政２年の次は寛政６年，その次は寛政10年となる。

12．木村恭〔蒹葭堂〕（安永４・1775）『貝よせの記』前川文栄堂。序２丁，本文（奈伎左乃玉）25丁，拾貝乃記〔田俊房　延享四年〕５丁〔ただし丁数未刻のまま〕。毎丁柱書には「奇貝図譜」とあるが，本文には図が無い。

13．大枝流芳（寛延４・1751）『貝盡浦之錦』（上，下）揚芳堂・稱觥堂。上44丁，下28丁。

14．金丸但馬（1935）『日本貝類学史（16）第５篇　江戸時代（其の２）貝掩いの発達』貝類学研究雑誌ヴィナス（The Venus)，5（2・3）：112—117．の第２図。これは『貝盡浦之錦』下巻20—21丁所載の絵を修正したものである。

15．この絵の題名については，源氏貝，歌仙貝を用いた。これらの組合わされた貝のセットを，この様に呼ぶ事は古くより行われた語であるが，これによる遊び方は古くから「貝合せ」なる語が使われている。ところがこれは「貝掩い」と可成り前から混同されて見分けがつかない様になっている。現在ではこれが最も甚だしく，たとえば『広辞苑』（第二版，1969）でも「かいおおい〔貝覆〕」の項には「かいあわせ（貝合）」の異称とし，「かいあわせ」の項に貝掩いの説明を付している。混乱をさける為，以下「貝合せ」の語を用いず，「源氏貝・歌仙貝遊技図」なる説明を付し，「貝掩いとの遊離をはかった。

16．金丸但馬（1942）『日本貝類学史（25）第6篇　江戸時代（其の3）　第4章　本草家の貝類標本』ヴィナス（Venus）12（1・2）：57—64。

17．下記には大阪市が建てた木村蕣葭堂邸跡碑が，実際地と離れる理を記しているが，出来れば碑には「西北50米」といった表示をし，現地には小さくてよいから，道路縁にでも跡地の表示をする配慮が望ましい。
　古西義麿（1979）『木村蕣葭堂邸跡周辺と市立中央図書館』大阪春秋，7（2）：42—45。大阪春秋社。

18．水田紀久（1972）『羽間文庫蔵蕣葭堂日記解説』「蕣葭堂日記翻刻編」：465—523〔499頁参照〕

19．谷上隆介編（大正15・1926）『〔木村蕣葭堂〕奇貝図譜』〔コロタイプ複製版，15丁。前文に岩川友太郎『奇貝図譜序説』3丁付き〕髙島屋蕣葭堂会。

20．金丸但馬（1935）『日本貝類学史（17）第5編　江戸時代（其の2）　第7章　木村蕣葭堂』貝類学研究雑誌ヴィナス（The Venus），5（4）：214—222。

21．松浦静山（中村幸彦・中野三敏校訂）（1977）『甲子夜話3』（東洋文庫 321）平凡社。〔88—91頁（巻四十）参照〕

22．寛政11年版『日本山海名産図会』の序文

23．前出注18の491—492頁に転載されている。

24．一説に蕣葭堂新居は，淀屋橋呉服町東南角といわれるから，「西游雑志」の淀屋橋筋呉服町南入る，は家が西向で入口が南寄りにあった事を示すのであろう。彼の号“巽斎”は家が東南角にあったからだといわれる。

25．高梨光司(1926)『蕣葭堂小伝』髙島屋蕣葭堂会〔147頁参照〕

26．前出注25の144頁に転載されている。

27．大阪の地には，現在も町人学者の気風が残されており。それらの人の中には蕣葭堂ファンが多い。墓所のある大応寺では，それらの人達によって，法要その他の催がたびたび行われている。昭和47年には，豪華な蕣葭堂日記が発行された。当然産まれるべくして産まれたものともいえるが，その渉に当られた人達の苦労に感謝しなくてはならない。

28．鹿田静七（明治34・1901）『蕣葭堂誌』私家本。〔参照6丁裏〕

29．小出五郎（1970）『蕣葭堂標本の発見——歴史的な200年前の貝類コレクション——』「ちりぼたん」6（3）：55—56。日本貝類学会。

30．前出注16。

貝類標本収納の標本箱

重箱（七段重）とこれに付属する手提げ台、及びこれらを入れる収納箱からなっている。

1．重箱

七段重ねの漆塗重箱で、これに同色で塗られた提げ台が付属している。重箱の四隅は、桜花花弁状に弯入した形である。重箱の蓋は平蓋。重箱の１段目（最上部の箱）は、左右に大小の２個に分離するようになっている。最下段（七段目）の箱は深くて、さらに浅箱ひとつが上部へはめこんである。従って、七重ではあるものの、箱の数は９箱あることになる。

重箱の大きさは、平蓋こみで天地31cmで、長辺は42cm、短辺27cmある。各段の箱は、第１段目・第２段目が天地23mm、第３段目から第５段目まで32mm、第６段目40mm、第７段目114mmである。第１段目の箱は、縦横がそれぞれ270×264mmと270×155mmの２個である。

〈外側〉

全体を臙脂色の漆で塗り、さらに蓋上面・身の側面には部分的に黒い絞漆を塗ってある。黒い漆の部分はいわゆる刷毛目塗によって、青海波と波浪の模様が凹線によって画き出されている。この青海波模様は、斜めの光線が当ると波頭が白く光り美しい。

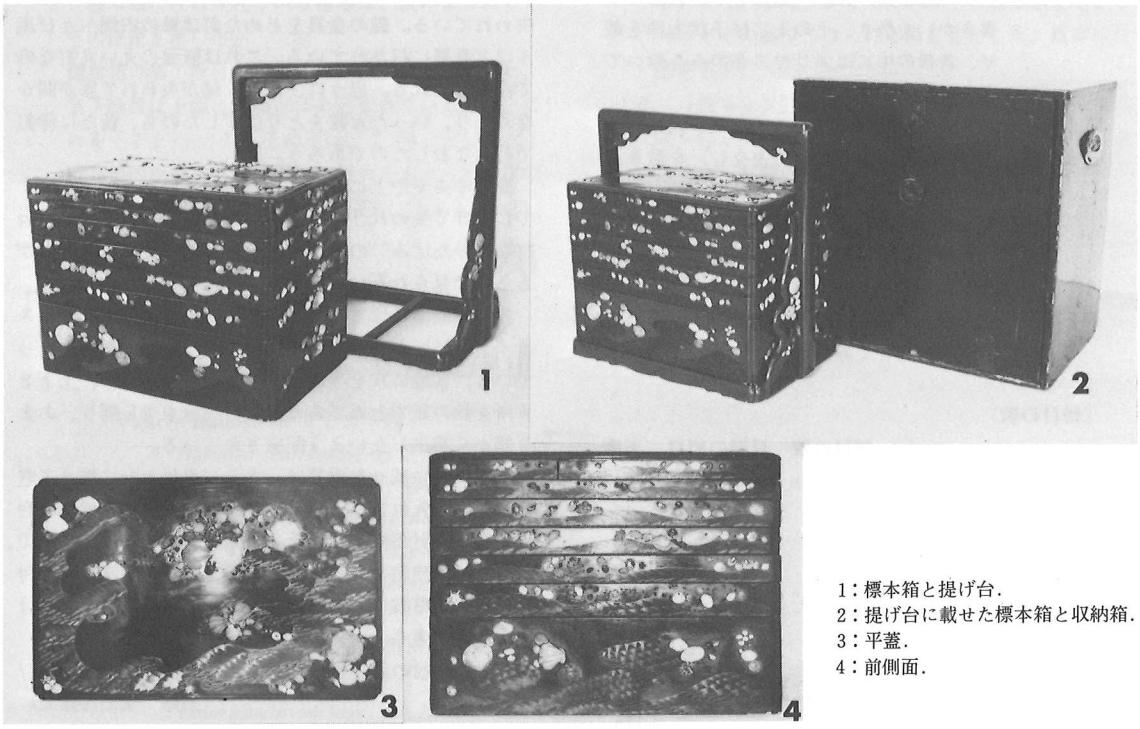
蓋と、身の側面の臙脂色の部分（洲浜の形）には、蒔絵も螺鈿もほどこされていず、唯、ありのままの貝殻のみが多数美的に配置して貼り付けられている。貝殻の貼り付けは、黒色の漆による接着であるが、貝はしばしば脱落していて、その跡は見苦しい。

各段（各箱）の左右側面中央には、把手代りに各１個のトコブシ（又はアワビ類の小型のもの）が、内側を外部へ向けて取り付けられている。これは他の貝と違い、貼付でなく素地に嵌め込みとなっていて、トコブシの外縁は臙脂色の漆で塗りこめてある。

平蓋上面には、随分と小さい貝（3—4mm）も集合して貼ってあり、このあたりは、あたかも砂浜に打ち揚げられた貝殻の集団を見るごとくである。こまかな青海波模様とあいまって、独特の世界をかもし出している。しかしこのようなところは、汚れに対して最も無防備な部分である。

〈蓋の内側〉

平蓋の裏面は濃い海老茶で、さらに金泥で、水仙、竹、梅、牡丹、椿・春蘭（組合わせ文）の草花円文が画かれている。季節を“貝寄せ”と合わせたのであろう。



1：標本箱と提げ台.
2：提げ台に載せた標本箱と収納箱.
3：平蓋.
4：前側面.

〈重箱の内部の状態〉

重箱内側面と底の内面は海老茶に塗られ、それぞれの箱の上縁は濁った金泥で彩色してある。これに、格子状に組んだ木枠がはめこんである。最上段と第2段目の木枠の上縁は、濃い銀朔の色紙(いろがみ)を細く切って貼り付けてある。他の段の木枠は素地のまま。

〈クッションの状態〉

それぞれの枡には綿花を敷いて、上に貝を載せるのが基本となっている。しかし、かなりの部分では、綿花の上へさらにメリヤス地(裏側は起毛し、綿花状)を四角く截ったものを起毛側を上にして載せてある。

第1段目　左右の箱とも、各枡には綿花(白)を敷く。1カ所のみ、薄く敷いた綿の上に布を載せたところがある。

第2段目　各枡に茶綿、綿花(白)または茜色に染めた綿花を敷き、上に前述のメリヤス布を載せてある。茶綿の他に、代赭色に染めたものもあるようである。

第3段目　各枡の底に綿花を敷き、その上にメリヤス布を載せる。綿花は、藍色染、茜色染、鬱金色染のものが交互に配置されている。しかしこれ等は、メリヤス布を除かないと外からは見えない。

第4段目　箱の底全面に和紙(墨書有り。目録の下書きか)を敷き、その上に格子状木枠を載せ、各枡の中にはメリヤス布のみを敷いてある。

第5段目　各枡の中にはメリヤス布のみを敷く。

第6段目　箱の底全面に和紙(墨書なし)を敷き、その上に木枠を置く、各枡にはメリヤス布のみを敷く。しかし木枠の底に藍色の綿繊維が付着しているので、もともとは着色綿花が敷いてあったのであろう。

第7段目　上下とも綿花を底全面に敷いて、その上に木枠を被せてある。

〈枡目の数〉

		枡目の数	目録の枡目	天地
第1段目	(右)(大)	56	56	23mm
	(左)(小)	36	(目録欠)*	23
第2段目		135	135	23
第3段目		104	104	32
第4段目**		50	50	32
第5段目**		104	104	32
第6段目		50	50	40
第7段目	(上)	15***	20	114
	(下)	17***	36	
		計 567枡		

* 枡目が36であるところから三十六歌仙貝が収められていたと想像される。

** この2箱は、逆に置かれていた。小出五郎氏が「ちりぼたん」誌(6巻3号)で昭和45年に発表された記録でも、ここでいう第4段目は5番目の位置にあった。しかし付属の目録では「四」が50枡、「五」が104枡に仕切ってあり、箱にも「四」「五」と朱書した小紙片がそれぞれに添えてあったので、これらに従い、上下の位置を逆転させてある。しかし目録に記入された番号も朱書であり、これが後世に書き加えられたとするなら、第3段目から第5段目までの当初の順序は、なお不明である。

*** もともとは目録通りであったが、貝を入れ変える都合で、枠の一部が取りはずされたようである。

2．手提げ台

重箱を載せて運ぶ為のものである。天地46cm。全体を臙脂色の漆で塗り、貝を貼りつけ、部分的には刷毛目塗で青海波を画く。

3．収納箱

手提げ台に載せた重箱を収納する黒塗の木箱である。天地52cm、左右53.5cm、奥行34cm。箱は厚さ12-13mmのキリ材で作られ、箱の天板の前の部分のみ2cm強の幅で針葉樹材(おそらくヒノキ)が使用されている。釘は竹釘である。ほかに木釘も使われているかも知れないが、断面が塗り込めてあるので不明である。扉もキリ材で、扉は箱の前面へはめ込み。扉の下部2カ所に爪付き金具があって、爪を箱の凹所へとめる。この金具は鉄の和釘で取り付けてある。扉の上部には錠が付いているが鍵は失われている。錠の金具をとめた釘は扉の内側へとび出るほど乱暴に打たれている。これは断面の丸い丸釘なので洋釘と知れる。思うに、後世、鍵が失われて扉が開かなくなり、いったん錠をとりはずしたのち、新たに洋釘で打ちなおしたのであろう。

扉の中央やや上に、つまみが付いていたらしいが、すでに抜けて失われ、跡は穴があいたままである。その台座は“かたばみ”の紋所である。これは梶山氏の考察があるので見られたい(30頁)。

箱の両側面にはアワビ(金子衛寿男氏同定によるとメカイアワビ)がそれぞれ1個取り付けられ、把手となっている。素地に穴をうがち、アワビの殻をはめ、上下2カ所を鉄の鋲でとめてある。殻は周縁を少し削り、あまり箱から突出しないよう配慮されている。

手提げ台に載せた重箱は、さらに車付き台に載せて収納箱へ出し入れするよう工夫されている。この車付き台は、底板が針葉樹材(おそらくスギ)、外枠はヒノキで、釘は竹釘が使用されている。車輪は底面の四隅に取り付けてある。車輪は木製(樹種不詳)、車軸は竹、軸受けはヒノキである。

収納箱の材の鑑定は、当館　布谷和夫による。

(当館　柴田保彦記)

木村蓁葭堂蒐集と推定される貝類標本の種名目録

金子寿衛男・梶山彦太郎ほか

第１部　軟体動物の貝殻……39頁
第２部　その他の動物……60頁
第３部　植物……62頁

種の同定は次のように分担した。第１部：金子寿衛男（堺市）〔全般〕、梶山彦太郎（大阪市）〔全般〕、山西良平（当館）〔ヒザラガイ〕、第２部：山西良平（当館）〔無脊椎動物〕、柴田保彦（当館）〔脊椎動物〕、第３部：鍋島靖信（大阪府立水産試験場）〔石灰藻〕、岡本素治（当館）〔顕花植物〕。

目録の構成と配列は柴田が行った。

凡　例

1．標本、及び標本箱（手提げ台・収納箱を含む）の外側に貼りつけられているものを対象とした。標本は幼貝や磨滅した貝殻が多く含まれ、若干の同定不能のものがある。また、平蓋に貼りつけられた微小貝には未同定のものが残った。

2．標本箱に収められている標本は、次のようにしてその位置を示した。

■重箱の第７段目までを「1)～7)」であらわした。第７段目は上部に浅箱がはめ込まれているので、これを「７上)」とし、その下は「７下)」とした。

■箱の内部の枡目の位置は、縦列を右から左へ片仮名の「イ」「ロ」「ハ」「ニ」……で、横列は上から下へ「1」「2」「3」……で示した。たとえば、「１)－ヌ－４」は第１段目の箱、ヌ列（すなわち右から数えて縦列の10番目）の４（すなわち上から４番目）の枡に入っていることを示している。

3．箱の外側に貼りつけられている貝殻は、同様に1)～7）と区分し、それぞれの箱の前・後・左・右の別を「前外」「後外」「左外」「右外」で示した。それぞれの側面では、向って右から左へ位置番号を個々の貝殻にふり当てた。たとえば「２）左外－6」は第２段目の左外側に貼りつけられた貝殻で、その位置は右から６番目である。

4．平蓋上面に貼りつけられたものは、「平蓋）」であらわし、数字は位置を示す。

5．手提げ台に貼りつけられたものは、「提）」であらわした。また、シャミセンガイの残る側をⅠとし、ベニガイの貼りつけられた側をⅡとした。数字は位置を示す。

6．〔角カッコ〕内は説明である。「２個」とあるは同一種が同一枡に２個入っている意味。「合弁」とあるは、双殻のそろった二枚貝１個を示す。

第　１　部

Phylum Mollusca 軟体動物門

Class Gastropoda 腹足目

Order Archaeogastropoda 原始腹足目

Family **Haliotidae** ミミガイ科

Haliotis (Nordotis) sp.〔アワビの１種〕

1）ヌ-4〔2個〕，　平蓋）28,-36，2）左外-6，3）右外-4，4）右外-5，7）左外-15.

Haliotis (Nordotis) gigantea Gmelin マダカアワビ

外箱の把手〔２個〕.

Sulculus aquatilis (Reeve) トコブシ

1）ニ-7，2）ハ-3，蓋）65，1）左外-6，右外-8，2）右外-9，3）左外-4，4）左外-9，5）左外-7，右外-7，6）左外-7，右外-7，7）右-12.

Family **Fissurellidae** スカシガイ科

Emarginula variegata A.Adams ススイロスソキレ

2）ヌ-6.

Tugali decussata A.Adams シロスソカケガイ

2）イ-6.

Scutus (Aviscutum) sinensis (Blainville) オトメガサ

5) ヘ-4, ヌ-3.

Diodora sieboldii (Reeve) クズヤガイ

平蓋) 25.

Diodora mus (Reeve) アサテンガイ

2) イ-6.

Macroschisma dilatatum (A.Adams)ヒラスカシガイ

3) ヘ-1, ト-2.

Family **Patellidae** ツタノハ科

Cellana nigrolineata (Reeve) マツバガイ

4) イ-5〔3個〕, 6) ハ-4, 平蓋) 16, 2) 前外-4, 6) 左外-8.

Cellana toreuma (Reeve) ヨメガガサ

2) ロ-2, ハ-5, リ-9, ヌ-9, ル-8, オ-8, 1) 前外-7, 後外-4, 3) 前外-1, 前外-10, 4) 前外-5, 前外-16, 左外-3, 右外-2, 後外-18, 5) 左外-9, 左外-10, 後外-4 , 6) 後外-15, 7) 左外-17, 右外-11, 後外-21.

Cellana grata grata (Gould) ベッコウガサ

7) 左外-5.

Family **Acmaeidae** ユキノカサ科

Patelloida (Callisellina) saccharina lanx (Reeve) ウノアシ

4) ロ-4, 7上) ロ-2, 4) 後外-8, 5) 後外-6, 6) 前外-17, 提) Ⅰ-7.

Chiazacmea pygmaea pygmaea (Dunker) ヒメコザラ

3) 後外-1.

Chiazacmea pygmaea lampanicola (Habe) ツボミ

2) イ-2.

Chiazacmea pygmaea signata (Pilsbry) シボリガイ

2) イ-6, ト-5.

Collisella (Conoidacmea) heroldi (Dunker) コガモガイ

2) ト-5〔2個〕.

Collisella (Kikukozara) langfordi Habe キクコザラ

2) ト-5〔2個〕, 平蓋) 68, 4) 後外-2.

Notoacmea schrenckii (Lischke) アオガイ

平蓋) 77.

Notoacmea concinna (Lischke) コウダカアオガイ

平蓋) 66, 1) 右外-5, 後外-14, 2) 後外-8, 3) 左外-6, 右外-9, 7) 右外-19.

Acmaea (Niveotectura) pallida (Gould) ユキノカサ

5) イ-7.

Family **Trochidae** ニシキウズ科

Tristichotrochus unicus (Dunker) エビスガイ

5) チ-8.

Monodonta (Monodonta) labeo (Linnaeus) イシダタミ

1) ロ-1, 3) ワ-8〔2個〕, 5〕ヘ-2〔2個〕

Monodonta (Neomonodonta) neritoides (Philippi) クロツケガイ

2) ヌ-8, 3) イ-7, イ-8.

Granata lyrata (Pilsbry) アシヤガイ

2) ロ-6, ト-3〔4個〕, ヌ-6, 3) オ-8〔2個〕, 平蓋) 41.

Vaceuchelus paupercula (Lischke) イボサンショウガイモドキ

2) ワ-1.

Clanculus margaritarius gordonis (Yokoyama) ナツモモ

1) ル-8, 3) ル-8.

Cantharidus japonicus (A.Adams) チグサガイ

3) ハ-4, リ-6〔2個〕

Cantharidus callichroa (Philippi) ハナチグサ

2) チ-9, ル-7, ル-9.

Iwakawatrochus urbanus (Gould) イワカワチグサ

平蓋) 113.

Diloma (Pictodiloma) suavis (Philippi) メクラガイ

1) ル-7, 2) チ-9.

Chlorostoma argyrostoma lischkei (Tapparone-Canefri) クボガイ

3) イ-8.

Chlorostoma xanthostigma A.Adams クマノコガイ

1) ヌ-7.

Chlorostoma sp. 〔クボガイの1種〕

2) リ-5.

Omphalius pfeifferi (Philippi) バテイラ

5) イ-6, ハ-3, 6) リ-5.

Omphalius rusticus (Gmelin) コシダカガンガラ

2) ト-5.

Trochus sacellum rota Dunker ウズイチモンジ

2) イ-7.

Umbonium (Suchium) costatum (Kiener) キサゴ

1) ル-8, 2) チ-6, リ-2, リ-6, ヌ-1〔2個〕, ヌ-6〔2個〕, 3) ト-1, ワ-1, 5) ハ-4, 提) Ⅰ-16.

Umbonium (Suchium) moniliferum (Lamarck) イボキサゴ

3) ハ-8, 5) リ-1.

Monilea smithi (Dunker) ノボリガイ

3) リ-8.

Ethminolia stearnsii (Pilsbry) キヌシタダミ

2) ロ-9, リ-1, ヌ-1.

Family **Stomatellidae** ヒメアワビ科

Stomatolla varia (A.Adams) ヒメアワビ

2) ト-6〔4個〕

Stomatelina rubra (Lamarek) アシヤガマ

3) チ-4.

Family **Turbinidae** リュウテンサザエ科

Turbo petholatus petholatus (Linnaeus) リュウテンサザエ

ワ上) ニ-2.

Marmarostoma stenogyrum (Fischer) コシダカサザエ

1) ル-2, 2) カ-3〔蓋4個〕, 5) ヌ-8.

Batillus cornutus (Lightfoot) サザエ

3) オ-6, 3) 右外-8, 5) 右外-10, 提) Ⅰ-9, Ⅱ-9.

Lunella coronata coreensis (Récluz) スガイ

1) ト-3〔蓋2個〕, 2) リ-3, ヌ-6, カ-3〔蓋6個〕, 6) イ-1, 平蓋) 24, 48, 59, 101, 2) 左外-5〔蓋〕, 右外-10〔蓋〕, 4) 右外-8〔蓋〕, 後外-12〔蓋〕, 5) 前外-3〔蓋〕, 6) 前外-8〔蓋〕, 7) 左外-9〔蓋〕, 提) Ⅰ-23.

Astralium haematragum (Menke) ウラウズガイ

6) ホ-5.

Guildfordia triumphans (Philippi) リンボウガイ

6) ニ-3.

Homalopoma nocturnum (Gould) サンショウガイ

2) ヌ-5.

Neocollonia rosea (Pilsbry) バラサンショウ

2) オ-5〔30個〕, 平蓋) 11, 33, 42, 79, 82, 91, 97, 104, 2) 右外-7, 右外-8, 後外-3, 3) 前外-8, 4) 後外-5, 後外-13, 6) 前外-11, 右外-6, 7) 前外-7, 左外-10, 左外-11, 右外-9, 右外-10, 右外-16, 後外-7, 後外-8, 後外-11, 提) Ⅱ-22.

Neocollonia pilula (Dunker) サンショウスガイ

2) チ-3.

Family **Phasianellidae** サラサバイ科

Phasianella modesta (Gould) サラサバイ

1) ホ-6, 2) オ-7, ワ-8, 3) ヘ-8, 平蓋) 62, 93.

Family **Neritidae** アマオブネ科

Heminerita japonica (Dunker) アマガイ

1) オ-1, 2) ハ-8, オ-6, 平蓋) 32, 1) 左外-7, 右外-7, 3) 後外-12, 7) 前外-9, 後外-2, 後外-24, 提) Ⅱ-6.

Clithon retropictus (v.Martens) イシマキガイ

2) ワ-7, 2) カ-6, ヨ-7.

Pictoneritina oualaniensis (Lesson) ヒメカノコガイ

2) イ-7, ワ-7〔2個〕, 平蓋) 86, 3) 前外-4.

Theliostyla albicilla (Linnaeus) アマオブネ

1) ロ-3〔蓋〕, ニ-3, 2) ハ-8, 4) ロ-1.

Order Mesogastropoda 中腹足目

Family **Cyclophoridae** ヤマタニシ科

Cyclophorus herklotsi v.Martens ヤマタニシ

3) ト-4, ト-8.

Spirostoma japonicum (A.Adams) ヤマグルマ

1) ト-7.

Family **Assimineridae** カワザンショウガイ科

Assiminea lutea japonica v.Martens カワザンショウガイ

平蓋) 110.

Family **Viviparidae** タニシ科

Cipangopaludina japonica japonica (v.Martens) オオタニシ

5) ロ-5.

Cipangopaludina chinensis malleata (Reeve) マルタニシ

2) イ-3, 5) イ-7.

Family **Pleuroceridae** カワニナ科

Semisulcospira libertina (Gould) カワニナ

5) チ-5.

Family **Lacunidae** チャイロタマキビ科

Stenotis smithi (Pilsbry) ヘソカドタマキビ

2) ワ-8.

Family **Littorinidae** タマキビ科

Littorina brevicula (Pilsbry) タマキビ

2) リ-9.

Granulilittorina exigua (Dunker) アラレタマキビ

2) リ-9.

Nodilittorina pyramidalis (Quoy et Gaimard) イボタマキビ

Family **Tornidae** イソマイマイ科

Sigaretornus planus (A.Adams) イソマイマイ

1) ニ-4〔2個〕

Pseudoliotia pulchella (Dunker) シラギク

1) ル-6.

Pygmaeorota duplicata (Lischke) アラウズマキ

1) チ-1.

Family **Turritellidae** キリガイダマシ科

Kurosioia fascialis (Menke) ヒメキリガイダマシ

1) チ-5.

Family **Siliquariidae** ミミズガイ科

Siliquaria cumingii (Mörch) ミミズガイ

1) ニ-6〔3個〕, 2) ロ-1, チ-3, 3) ロ-8.

Family **Vermetidae** ムカデガイ科

Vermetus renisectus (Carpenter) ムカデガイ

2) ト-3.

Serpulorbis imbricatus (Dunker) オオヘビガイ

6) イ-2, 7下) 1, 平蓋) 71.

Family **Potamididae** ウミニナ科

Batillaria multiformis (Lischke) ウミニナ

2) ワ-9〔2個〕,

Batillaria cumingii (Crosse) ホソウミニナ

2) オ-6, 3) イ-4, ロ-3, ハ-5, ヌ-4, ル-6.

Family **Diastomidae** モツボ科

Eufenella subpellucida Kuroda et Habe ツヤモツボ

2) へ-8.

Family **Litiopidae** ミジンウキツボ科

Diffalaba picta (A.Adams) シマハマツボ

2) へ-8〔15個〕

Family **Cerithiidae** オニノツノガイ科

Bittium variegatum Kuroda et Habe マダラケシカニモリ

2) へ-8〔破片〕

Ataxocerithium abnormale (Sowerby) カタワカニモリ

1) チ-5, 2) ハ-7〔2個〕, 蓋) 92.

Ischnocerithium rostratum (Sowerby) ハシナガツノブエ

2) ハ-6.

Ochetoclava kochi (Philippi) カニモリガイ

1) ル-6, 3) ハ-3.

Ochetoclava sinensis (Gmelin) トウガタカニモリ

4) チ-5.

Clypeomorus humilis (Dunker) カヤノミカニモリ

3) オ-4〔2個〕

Cerithium echinatum (Lamarck) メオニツノガイ

6) チ-5.

Cerithium kobelti (Dunker) コオロギ

1) ヌ-6, 3) チ-5.

Proclava pfefferi (Dunker) ヒメカニモリ

3) ヌ-4.

Family **Eulimidae** ハナゴウナ科

Eulima sp. 〔ハナゴウナの1種〕

2) へ-8.

Family **Aporrhaidae** モミジソデ科

Aporrhonis pespelecani (Linnaeus) モミジソデ

3) リ-7, 4) リ-1〔「ラン□□」と墨書〕, 6) ホ-1〔「チ□(ト？)セ」と朱書〕.

Family **Strombidae** スイショウガイ科

Terebellum terebellum delicatum Kuroda et Kawamoto ウストンボガイ

1) チ-4.

Conomurex luhuanus (Linnaeus) マガキガイ

3) ロ-4.

Canarium mutabilis (Swainson) ムカシタモト

3) ニ-8, 5) オ-7.

Doxander marginatus robustus (Sowerby) フドロ

6) ニ-1.

Doxander japonicus (Reeve) シドロ

1) ホ-2, 2) ヘ-2, ト-1.

Lambis lambis (Linnaeus) クモガイ

7下) 3.

Family **Hipponicidae** スズメガイ科

Amalthea conica Schumacher キクスズメ

2) ロ-6, リ-1, ヌ-1〔2個〕, カ-5, 3) リ-2, 平蓋) 5, 39, 52, 100, 1) 前外-11, 前外-14, 左外-3, 後外-2, 2) 前外-7, 前外-10, 左外-8, 3) 前外-3, 前外-9, 左外-7, 後外-13, 後外-18, 4) 前外-15, 左外-5, 左外-11, 右外-1, 後外-3, 後外-11, 5) 前外-1, 前外-4, 左外-6, 後外-1, 7) 右外-17, 提) Ⅰ-19.

Antisabia foliacea (Quoy et Gaimard) カワチドリ

2) 右外-3, 4) 後外-7.

Family **Trichotropidae** ヒゲマキナワボラ科

Amathina tricarinata (Linnaeus) イソチドリ

1) ヌ-8.

Family **Calyptraeidae** カリバガサ科

Bastrycapulus gravispinosus (Kuroda et Habe) クルスガイ, アワブネ

1) チ-3〔2個〕, 2) リ-1.

Ergaea walshi (Reeve) ヒラフネガイ

4) リ-4.

Family **Xenophoridae** クマサカガイ科

Tugurium exutum (Reeve) キヌガサガイ

1) ル-5.

Family **Triviidae** シラタマ科

Trivirostra oryza (Lamarck) シラタマ

2) ヘ-6〔5個〕.

Trivirostra sp. 〔シラタマ類の1種, 磨損のため同定不能〕

2) ル-9.

Family **Eratoidae** ザクロガイ科

Lachryma callosa (Adams et Reeve) ザクロガイ

2) ホ-7〔2個〕, ト-8〔6個〕, チ-8〔4個〕, 平蓋) 95, 98, 105, 106, 7) 後外-18.

Family **Ovulidae** ウミウサギ科

Primovula rhodia (A.Adams) ツグチガイ

3) チ-8.

Volva volva habei Oyama ヒガイ

3) ト-6, 4) ニ-3, 6) イ-4.

Phenacovolva (Pellasimnia) subreflexa (Adams et Reeve) キヌヅツミ

2) ハ-1, ル-5.

Family **Cypraeidae** タカラガイ科

Gen. et sp. indet. 〔幼殻，磨損のため同定不能，「天」と朱書あり」

5) ト-8.

Staphylaea limacina (Lamarck) シボリダカラ

3) ワ-7.

Monetaria (Monetaria) moneta rhomboides Schilder et Schilder キイロダカラ

3) ワ-6, 6) ヘ-5.

Cribaria cribaria (Linnaeus) カノコダカラ

1) ヘ-5.

Palmadusta artuffeli (Jousseaume) チャイロキヌタ

2) ロ-7.

Purpuradusta gracilis japonica (Schilder) メダカラガイ

1) ロ-7, 2) イ-5, オ-9, 3) チ-8.

Luria (Basilitrona) isabella rumphii Schilder ヤナギシボリダカラ

6) ト-1.

Family **Naticidae** タマガイ科

Cryptonatica lurida (Philippi) ホウシュノタマ

2) オ-4, 3) イ-8, イ-7.

Naticarius concinnus (Dunker) フロガイダマシ

1) ハ-4, 2) ル-7〔2個〕, オ-7〔2個〕, 5) 左外-11, 提) Ⅱ-23.

Polinices pyryformis (Récluz) トミガイ

2) ヨ-7, 5) ニ-1, 6) ト-3.

Polinices flamingianus (Récluz) ヘソアキトミガイ

2) ワ-6.

Glossaulax didyma (Röding) ツメタガイ

1) イ-4〔蓋〕, イ-7, 2) ハ-9〔2個〕, 5) ヘ-8, 平蓋) 44.

Glossaulax vesicalis (Philippi) ヒメツメタ

5) ル-5, ル-7.

Euspira bathyraphe (Pilsbry) オリイレシラタマガイ

3) ヘ-5.

Eunaticina papilla (Gmelin) ネコガイ

1) イ-6, 5) ヘ-7.

Family **Cymatiidae** フジツガイ科

Apollon natator (Röding) ウネボラ

5) ヘ-5.

Biplex microstoma (Fulton) クビレマツカワ

5) ホ-4.

Monoplex echo (Kuroda et Habe) カコボラ

7上) ホ-3.

Septa pileare (Linnaeus) シノマキ

7下) 2.

Distorsio (Rhysema) reticulata (Röding) イボボラ

3) オ-1.

Charonia sauliae (Reeve) ボウシュウボラ

チ) ニ-4, 6) ホ-4, ワ上) ホ-1.

Family **Cassididae** トウカムリ科

Phalium (Bezoardicella) flammiferum (Röding) カズラガイ

5) ト-5.

Phalium (Phalium) glaucum (Linnaeus) カンコ

6) ヘ-3.

Semicassis bisulcata pila (Reeve) ウラシマ

5) ル-5, 6) ロ-5.

Semicassis japonica (Reeve) ウネウラシマ

5) ニ-3.

Casmaria ponderosa (Gmelin) アメガイ

3) ヘ-2.

Casmaria erinacea (Linnaeus) ヒナヅル

5) ト-3.

Family **Bursidae** オキニジ科

Gyrineum rana (Linnaeus) ミヤコボラ

3) ホ-8.

Family **Tonnidae** ヤツシロガイ科

Tonna luteostoma (Küster) ヤツシロガイ

1) ニ-2〔2個〕, 2) ロ-4, 4) チ-4, 5) チ-7, ワ上) ハ-2.

Family **Ficidae** イチチクガイ科

Ficus subintermedia (d'Orbigny) ビワガイ

4) ト-1.

Order Neogastropoda 新腹足目

Family **Muricidae** アクキガイ科

Murex (Acupurpura) pecten (Lightfoot) ホネガイ

4) ト-4.

Murex (Murex) sobrinus (A.Adams) ヒメホネガイ

4) ヘ-2.

Chicoreus brunneus (Link) ガンゼキボラ

4) ヘ-3.

Homalocantha anatomica (Perry) イチョウガイ

6) ハ-2.

Rapana venosa (Valenciennes) アカニシ

2) ハ-4, 4) ロ-3.

Rapana rapiformis (Born) シロニシ

3) イ-6.

Muncinella echinate (Blainville) ウニレイシ

5) イ-8.

Reishia luteostoma (Holten) クリフレイシ

2) ロ-8, ヘ-5, カ-5, ヨ-8.

Reishia clavigera (Küster) イボニシ

4) ハ-4, 5) オ-8.

Ocinebrellus falcatus (Sowerby) ヨウラクガイ

5) ハ-7.

Ocinebrellus aduncus (Sowerby) イセヨウラク

4) ロ-5, 平蓋) 9.

Bedevina birileffi (Lischke) カゴメガイ

1) ヘ-2, 2) ワ-4〔2個〕.

Ergalatax contractus (Reeve) ヒメヨウラク

2) ロ-9〔2個〕, ト-2, ワ-1.

Lataxiena fimbriata (Hinds) オニカゴメ

チ) ヌ-3.

Family **Rapidae** カブラガイ科

Latiaxis mawae (Griffith et Pidgeon) ミズスイ

7上) ハ-1.

Leptoconchus striatus (Rüppell) ムロガイ

1) ル-4.

Family **Pyrenidae** タモトガイ科

Pyrene flava (Bruguière) ムシエビ

1) へ-7〔サンカクフジツボ付〕, 2) リ-5, ヌ-3, 3) ロ-6, ル-7.

Mitrella bicincta (Gould) ムギガイ

1) ヌ-8, 2) ニ-9, へ-5, へ-6, ト-3, チ-5〔3個〕, リ-4, リ-7〔12個〕, ヌ-2, ヌ-5〔5個〕, ヌ-6〔2個〕, ヌ-8, ル-7〔2個〕, ル-8, オ-7〔2個〕, ワ-7〔4個〕, カ-5, カ-6, カ-7〔4個〕, 平蓋) 6, 8, 17, 80, 102, 6) 後外-11, 7) 前外-8, 左外-12, 後外-20.

Mitrella burchardi (Dunker)コウダカマツムシ

2) ロ-2, ロ-3, ル-6, オ-5, 3) ル-4, ル-7.

Indomitrella lischkei (Smith) シラゲガイ

2) チ-5, 蓋) 99〔aff.〕

Indomitrella martensi (Lischke) マルテンスマツムシ

3) へ-4.

Pyrenola semipicta (Sowerby) カゲロウマツムシ

蓋) 109.

Anachis misera (Sowerby) ボサツガイ

3) へ-4, へ-8, ル-6, 平蓋) 61, 64.

Zofra mitriformis (A.Adams) ノミニナモドキ

2) へ-8, 平蓋) 111, 112.

Pleurotomitrella pleurotomoides (Pilsbry) クダマキマツムシ

2) ハ-9〔4個〕ニ-9, チ-5.

Euplica versicolor (Sowerby) フトコロガイ

2) ト-8〔3個〕, 平蓋) 22, 提) Ⅱ-1.

Family **Buccinidae** エゾバイ科

Babylonia japonica (Reeve) バイ

1) ハ-6〔2個〕, 2) ヨ-9, 5) ヌ-4, ワ上) ニ-1.

Phos nigroliratum (Habe) クロスジトクサバイ

1) オ-5.

Pollia mollis (Gould) シワホラダマシ

3) ヌ-6.

Siphonalia trochulus (Reeve) ミオツクシ

1) オ-6, 4) チ-1, 5) リ-6.

Siphonalia cassidariaeformis (Reeve) ミクリガイ

1) リ-6, ル-9, 2) イ-9, ハ-7〔3個〕, オ-2.

Family **Nassariidae** オリイレヨウバイ科

Reticunossa festiva (Powys) アラムシロ

2) ロ-9.

Reticunassa spurca (Gould) ヒメムシロ

2) ホ-3〔3個〕, へ-2.

Reticunassa japonica (A.Adams) キヌボラ

1) チ-6〔2個〕, 2) ホ-2, オ-5.

Alectrion glans nipponensis (Kuroda et Habe) キンシバイ

5) ワ-3.

Tarazeuxis sufflatus (Gould) ヨウバイ

3) ホ-6.

Zeuxis siquijorensis (A.Adams) ハナムシロ

2) オ-2, 3) ト-3, ヌ-4.

Niotha livescens (Philippi) ムシロガイ

2) チ-4, ヌ-7, オ-1, オ-4〔2個〕, オ-7.

Cyllene japonica Pilsbry ホソシレネガイ

2) カ-2, チ-5〔2個〕

Family **Melongenidae** テングニシ科

Pugilina (Hemifusus) ternatana (Gmelin) テングニシ

3) チ-6.

Family **Fasciolariidae** イトマキボラ科

Pleuroploca glabra (Dunker) ツノキガイ

3) ト-7.

Fusinus perplexus (A.Adams) ナガニシ

5) チ-4, 7上) イ-2.

Fusinus tuberosus (Reeve) ツノマタガイ

5) イ-2.

Granulifusus nipponicus (Smith) アラレナガニシ

1) ハ-7.

Family **Mitridae** フデガイ科

Nebularia rosacea (Reeve) ベニフデ

5) イ-4.

Chrysame proscisea (Reeve) トビイロフデ

3) オ-5.

Strigatella scutulata (Gmelin) ヤタテガイ

5) ル-4.

Pterygia undulosa (Reeve) ヒメイモフデ

1) ヘ-1, 3) チ-7, ヌ-1.

Pusia inermis (Reeve) ヒゼンツクシ

2) ル-2, オ-1, ワ-8.

Pusia aemula (Smith) シイノミツクシ

2) オ-6.

Family **Olividae** マクラガイ科

Baryspira hinomotoensis (Yokoyama) ウラシマボタル

1) リ-5, 5) リ-4〔2個〕, 6) チ-2.

Oliva mustelina Lamarck マクラガイ

3) ホ-3

Oliva annulata (Gmelin) タカサゴビナ

5) ヌ-7.

Olivella spreta (Gould) ササノミガイ

2) チ-6.

Olivella japonica Pilsbry ホタルガイ

1) ニ-5〔2個〕, ヌ-3, ワ-1, ワ-2, 平蓋) 27, 38, 103, 114, 提) Ⅱ-21.

Olivella fulgurata (Adams et Reeve) ムシボタル

2) ヘ-5, チ-4, チ-5〔2個〕.

Family **Volutidae** ガクフボラ科

Lyria cassidula (Reeve) スジボラ

3) ヘ-6.

Family **Marginellidae** コゴメガイ科

Granulina tantilla (Gould) タカラコゴメ

平蓋) 107.

Family **Cancellariidae** コロモガイ科

Sydaphera spengleriana (Deshayes) コロモガイ

4) イ-2, 6) ロ-4.

Trigonaphera bocageana (Crosse et Debeaux) オリイレボラ

3) ハ-6, 4) ヌ-2, 5) オ-4.

Family **Turridae** クダボラ科

Clavus (Tylotiella) japonicus (Lischke) オハグロシャジク

5) ヘ-6.

Clavus (Tylotiella) sp. 〔オハグロシャジク類の1種〕

5) ヘ-6.

Inquisitor jeffreysii (Smith) モミジボラ

1) ヌ-9, 2) ホ-1, ト-2, 4) ヌ-5.

Inquisitor sp. 〔モミジボラ類の1種〕

3) ホ-5〔2個〕

Gemmula (Gemmula) pulchella Shuto "var." ホソジュズカケクダマキ

1) ト-7.

Turris crispa (Lamarck) クダボラ

6) ト-2.

Mangelia deshayesii (Dunker) スソチャマンジガイ

平蓋) 108.

Mangelia semicarinata (Pilsbry) カタカドマンジガイ

2) ニ-7.

Ithycythra oyuana (Yokoyama) キバコトツブ

平蓋) 115.

Clathurella subauriformis (Smith) ヌノメシャジク

2) ニ-7.

Clathurella sp. 〔チャイロフタナシシャジク類の1種〕

2) チ-5.

Family **Conidae** イモガイ科

Gen. et sp. indet. 4 spp.〔いずれも幼殻または磨損のため同定不能〕

1) イ-1, ト-2, ト-3. 5) イ-1.

Asprella orbignyi (Aubouin) オルビニイモ

6) ニ-2.

Gastridium obscurum (Reeve) ムラサキアンボイナ

3) ロ-7.

Chelyconus pauperculus (Sowerby) ベニイモ

1) ト-4.

Rhizoconus copitaneus (Linnaeus) サラサミナシ

1) ル-9.

Verroconus ebraeus (Linnaeus) マダライモ

5) ニ-5.

Family **Terebridae** タケノコガイ科

Hastula strigillata nipponensis Kuroda et Habe シチクガイ

1) ヘ-3.

Strioterebrum (Strioterebrum) subtextile hizense (Pilsbry) ヒゼンシラタケ

2) ヌ-4.

Brerimyurella japonica (Smith) トクサガイ

3) ワ-5, 5) ル-6.

Order Heterogastropoda 異腹足目

Family **Janthinidae** アサガオガイ科

Janthina belteata (Reeve) アサガオガイ

5) リ-7.

Janthina janthina (Linnaeus) コシダカアサガオガイ

平蓋) 72, 5) 左外-1.

Iodina umbilicata (d'Orbigny) ヒメルリガイ

2) オ-3〔11個〕

Family **Epitoniidae** イトカケガイ科

Cinctiscala sagamiensis (Pilsbry) サガミイトカケ

2) ハ-6.

Amaea thielei (de Boury) クリンイトカケ

1) ホ-6, 3) ト-5〔3個〕.

Depressiscala aurita (Sowerby) オダマキ

2) ロ-5, ホ-5〔2個〕

Papyriscala latifasciata (Sowerby) クレハガイ

3) リ-5, 4) へ-1.

Family **Architectonicidae** クルマガイ科

Architectonica perspectiva (Linnaeus) クロスジグルマ

6) ヌ-2.

Philippia radiata (Röding) ゴショグルマ

2) ハ-2.

Torinista enoshimensis (Merville) ナワメグルマ

2) へ-5.

Family **Triphoridae** ホソアラレキリオレ科

Triphora sp.

平蓋) 94.

Mastonia cf. *rubra* (Hinds) 〔ムラサキハラブトキリオレ?〕

2) ル-8.

Order Entomotaeniata 腸紐目

Family **Pyramidellidae** トウガタガイ科

Leucotina dianae (A.Adams) コマキモノガイ

3) ヌ-5〔殻口内に「濱ツト」と墨書した小紙片が入っている〕

Colsyrnola brunnea (A.Adams) チャイロクチキレ

2) ヌ-4〔2個〕, ル-3.

Turbonilla (Chemnitzia) actopora Dall et Bartsch ナガレウネイトカケギリ

2) ホ-2, へ-8〔6個〕

Turbonilla (Pselliogyra) cf. *sagamiana* Yokoyama 〔サガミイトカケギリ近似種〕

2) へ-8.

Family **Hydatinidae** ミスガイ科

Hydatina (Hydatoria) albocincta (Van der Hoeven) ヤカタガイ

5) ヌ-6, 6) リ-4.

Family **Bullidae** ナツメガイ科

Bulla vernicosa (Gould) ナツメガイ

5) ハ-2.

Family **Haminoeidae** ブドウガイ科

Aliculastrum cylindricum (Holbling) カイコガイ

2) ヌ-2〔3個〕.

Liloa porcellana (Gould) カイコガイダマシ

2) ホ-5.

Family **Scaphandridae** スイフガイ科

Adamnestia japonica (A.Adams) クダタマガイ

2) ロ-6.

Family **Acteocinidae** オオコメツブガイ科

Decorifer insignis (Pilsbry) コメツブガイ

平蓋) 96.

Family **Philnidae** キセワタ科

Philine argentata (Gould) キセワタ

2) チ-6.

Order Thecosomata 有殻目

Family **Cavolinidae** カメガイ科

Cavolinia longirostris (Blainville) ササノツユ

ワ下) 1〔10個〕.

Order Basommatophora 基眼目

Family **Limnaeidae** モノアラガイ科

Radix auricularia japonica (Jay) モノアラガイ

1) リ-7.

Family **Ellobiidae** オオミミガイ科

Melampus castaneus Mühlfeld ハマシイノミガイ

1) ト-5, 3) リ-6.

Melampus luteus (Quoy et Gaimard) ツヤハマシイノミガイ

3) ホ-4〔2個〕

Family **Siphonariidae** コウダカカラマツガイ科

Sacculosiphonaria japonica (Donovan) カラマツガイ

1) イ-3〔2個〕

Anthosiphonaria sirius (Pilsbry) キクノハナガイ

平蓋) 10, 31, 45, 85, 87, 2) 前外-8, 3) 後外-14, 5) 前外-9, 6) 後外-2, 7) 前外-12.

Order Stylommatophora 柄眼目

Family **Clausiliidae** キセルガイ科

Pinguiphaedusa pinguis platydera (Martens) ツムガタギセル

1) ロ-6.

Family **Camaenidae** ナンバンマイマイ科

Satsuma japonica (Pfeiffer) ニッポンマイマイ

3) ト-8.

Mandarina mandarina (Sowerby) カタマイマイ

4) ヌ-4〔2個〕

Family **Bradibaenidae** オナジマイマイ科

Aegista (Plectotropis) vulgivaga (Schmacker et Boettger) オオケマイマイ

1) ロ-2, 3) ニ-7.

Euhadra sandai communis (Pilsbry) ナミマイマイ

5) ル-3.

以下は未同定・不明

5) へ-1〔螺心〕1) ト-7, 2) ヨ-8, 2) ワ-1, 2) ホ-2, 平蓋) 60, 7) 後9, 後19,

Class Scaphopoda 掘足綱

Order Dentalioida ツノガイ目

Family **Dentaliidae** ツノガイ科

Dentalium *(Paradentalium) octangulatum* Donovan ヤカドツノガイ, ムカドツノガイ

4) ト-2〔ヤカド型2個体〕, 6) ロ-3〔ムカド型3個体〕

Class Bivalvia 二枚貝綱

Order Nuculoida クルミガイ目

Family **Nuculanidae** シワロウバイ科

Saccella confusa (Hanley) ゲンロクソデガイ

2) ト-4〔4片〕, 3) ロ-3.

Order Arcoida フネガイ目

Family **Arcidae** フネガイ科

Arca navicularis Bruguière ワシノハ

3) 後外-16.

Arca avellana Lamarck フネガイ

2) イ-1, イ-2〔3片〕, 6) ハ-3～ト-4〔合弁〕, 5) 後外-8.

Barbatia (Abarbatia) velata (Sowerby) エガイ

5) ロ-6〔合弁〕, 2) 右外-12

Barbatia (Savignyarca) virescens (Reeve) カリガネエガイ

2) ロ-8〔7片〕, ホ-1, 4) ロ-1, 5) ト-1, ヌ-1〔合弁〕, 7) 左外-6.

Barbatia (Ustularca) stearnsi (Pilsbry) ハナエガイ

2) イ-2.

Acer plicatum (Dillwyn) コシロガイ

2) チ-1, 3) ハ-1, ホ-2, 5) 前外-10.

Scapharca subcrenata (Lischke) サルボウ

6) ホ-3, チ-4〔上記2片で合弁〕, 平蓋) 26, 51, 63, 5) 前外-16, 後外-5, 提) Ⅰ-5, Ⅰ-11.

Tegillarca granosa (Linnaeus) ハイガイ

5) ニ-2, 5) ニ-7〔2片〕.

Arcopsis symmetrica (Reeve) ミミエガイ

2) イ-6, ロ-4〔1対〕, ロ-5〔3片〕, 平蓋) 7, 19, 53, 67, 69, 75, 88, 1) 前外-8, 前外-13, 左外-8, 右外-6, 後外-13, 3) 左外-5, 右外-11, 後外-2, 4) 前外-2, 前外-11, 前外-17, 左外-4, 左外-12, 左外-16, 右外-3, 後外-14, 5) 左外-8, 右外-4, 後外-10, 6) 前外-14, 左外-9, 右外-8, 後外-13, 7) 前外-17, 右外-8, 右外-20, 提) Ⅰ-22, Ⅱ-24.

Didimacar tenebricum (Reeve) マルミミエガイ

7) 前外-25.

Family **Glycymerididae** タマキガイ科

Glycymeris vistita (Dunker) タマキガイ

2) ハ-3〔2片〕, ヌ-6, 5) ホ-7, 6) ロ-2, 平蓋) 1) 4, 14, 56, 58, 78, 90, 1) 前外-12, 右外-1, 右外-9, 後外-10, 後外-15, 2) 左外-1, 左外-4, 後外-6, 3) 右外-1, 右外-6, 後外-7, 後外-17, 4) 前外-4, 前外-8, 前外-19, 左外-1, 左外-7, 左外-13, 後外-4, 後外-6, 後外-16, 後外-19, 5) 前外-2, 前外-11, 前外-13, 右外-2, 右外-5, 右外-13, 後外-3,

前外-5，前外-6，前外-7，左外-4，左外-10，右外-10，後外-4，後外-10，後外-16，後外-19，7）前外-23，前外-24，前外-26，7）左外-13，左外-14，左外-20，右外-1，右外-6，右外-14，後外-3，後外-10，後外-23，後外-25，　提）Ⅰ-8，Ⅱ-2，Ⅱ-13，Ⅱ-14，Ⅱ-20.

Glycymeris albolineata (Lischke) ベンケイガイ

提）Ⅱ-8.

Order Mytiloida イガイ目

Family **Mytilidae** イガイ科

Mytilus coruscus (Gould) イガイ

3）ロ-2〔1対〕，5）ワ-2.

Septifer (Septifer) bilocularis (Linnaeus) クジャクガイ

1）ハ-1〔合弁〕，2）チ-9，ヌ-9，ル-8〔3片〕，ヨ-5〔2片〕，4）ロ-4，5）ホ-1〔合弁〕，オ-3〔2片〕.

Septifer (Mytilisepta) virgatus (Wiegmann) ムラサキインコ

1）リ-3〔合弁〕，2）ヌ-8，3）ニ-4〔合弁〕，4）ハ-5.

Septifer (Mytilisepta) keenae (Nomura) ヒメイガイ

2）ワ-3，3）チ-2，1）前外-5，提）Ⅱ-4，Ⅱ-15.

Modiolus (Modiolus) nipponicus (Oyama) ヒバリガイ

2）ヌ-8，3）左外-1.

Modiolus (Modiolusia) elongatus (Swainson) カラスノマクラ

2）リ-9〔合弁〕

Musculus (Modiolarca) cupreus (Gould) タマエガイ

3）オ-7〔合弁〕

Musculus (Musculista) senhousia (Benson) ホトトギスガイ

2）ヌ-8.

Musculus (Musculista) japonicus (Dunker) ヤマホトトギス

1）ロ-5〔合弁2個〕

Family **Pinnidae** ハボウキガイ科

Pinna (Cryptopinna) bicolor Gmelin ハボウキガイ

5）ト-7〔合弁〕

Order Pterioida ウグイスガイ目

Family **Pteriidae** ウグイスガイ科

Pteria brevialata (Dunker) ウグイスガイ

7上）イ-1〔合弁〕

Pinctada margaritifera (Linnaeus) クロチョウガイ

6）ニ-4〔合弁〕

Pinctada fucata martensii (Dunker) アコヤガイ

1）ヘ-4〔合弁〕，リ-8〔合弁〕，ル-8，　提）Ⅰ-14.

Family **Vulsellidae** ホウオウガイ科

Vulsella vulsella (Linnaeus) ホウオウガイ

7上）ニ・ホ-4〔合弁〕

Family **Pectinidae** イタヤガイ科

Amusium japonicum (Gmelin) ツキヒガイ

2）リ-5〔合弁，殻内面を金泥で塗ってある〕，6）イ-1〔3片〕，　平蓋）30.

Chlamys (Coralichlamys) irregularis (Sowerby) ナデシコガイ

1）ハ-2〔合弁〕，ル-7，オ-2，オ-3〔合弁〕，オ-7，オ-8〔合弁〕，2）ニ-9，4）ヘ-5〔合弁〕，5）チ-6〔合弁〕，6）ホ-1　平蓋）12，21，34，　1）前外-2，前外-10，2）左外-2，右外-4，右外-10，右外-11，後外-1，後外-9，後外-12，2）右外-2，右外-6，後外-5，

3) 左外-9, 後外-8, 後外-15, 4) 前外-7, 前外-12, 左外-10, 左外-12, 後外-9, 後外-15, 後外-17, 5) 前外-15, 右外-1, 右外-11, 後外-2, 後外-9, 6) 前外-1, 前外-12, 右外-3, 後外-9, 後外-17, 7) 前外-15, 前外-18, 左外-2, 右外-3, 右外-7, 右外-18, 後外-4, 後外-22, 提) Ⅰ-21, 提) Ⅱ-17.

Chlamys (Mimachlamys) nobilis (Reeve) ヒオウギガイ

1) オ-8, 5) ワ-5〔合弁〕, 6) へ-2〔合弁〕, 7上) ロ-2〔合弁〕, 2) 後外-1.

Chlamys (Mimachlamys) asperulata (Adams et Reeve) ヒナノヒオウギガイ

5) 後外-11.

Chlamys (Azumapecten) farreri (Jones et Preston) アズマニシキガイ

平蓋) 55.

Chlamys (Azumapecten) squamata (Gmelin) ニシキガイ

1) オ-4〔合弁〕, 4) ト-5〔合弁〕, チ-2〔合弁〕, 平蓋) 15, 1) 前外-1, 2) 後外-9, 7) 後外-16.

Semipallium fulvicostum (Adams et Reeve) ツヅレノニシキ

提) Ⅱ-18.

Bractechlamys schmeltzii (Reeve) ヤガスリヒヨク

6) 前外-4.

Cryptopecten versiculosus (Dunker) ヒヨクガイ

6) イ-5(合弁〕

Decatopecten striatus (Schumacher) キンチャクガイ

2) へ-9, 3) イ-1, 4) ニ-1〔2片〕, 5) ロ-1, ロ-2, ヌ-5, 平蓋) 76, 81, 84.

Excellichlamys spectabilis (Reeve) チヒロガイ

6) ホ-2〔合弁〕.

Pecten (Notovola) albicans (Schröter) イタヤガイ

1) ト-1, チ-2〔合弁〕, 4) ヌ-1〔合弁〕, 5) オ-1, 5) 前外-7.

Family **Spondylidae** ウミギク科

Spondylus (Spondylus) barbatus Reeve ウミギク

7上) ロ-2.

Spondylus (Spondylus) cruentus Lischke チリボタン

平蓋) 49, 1) 後外-3, 前外-4, 3) 前外-7, 左外-8, 4) 前外-3, 左外-6, 5) 前外-12, 前外-14, 6) 後外-7, 7) 左外-1, 左外-7, 右外-2, 右外-7, 右外-13, 後外-13, 提) Ⅰ-4, Ⅰ-6, Ⅰ-13.

Spondylus (Eleutherospondylos) sinensis Schreibers ダンドクメンガイ

7) 前外-6, 前外-13.

Spondylus (Eltoperna) sanguineus Dunker チイロメンガイ, メンガイモドキ

提) Ⅱ-10.

Family **Plicatulidae** ネズミノテ科

Plicatula simplex Gould ネズミノテ

2) チ-6, リ-3〔合弁4個および2片〕, ヌ-5, ヌ-6, 5) 左外-2.

Family **Placunidae** マドガイ科

Placuna (Placuna) placenta (Linnaeus) マドガイ

7上) イ-2〔合弁2個, このうち殻表に「海鏡」と墨書あるもの2片〕

Family **Limidae** ミノガイ科

Lima valgaris Link ミノガイ

1) ハ-3〔合弁〕, 4) リ-3〔合弁〕, 蓋) 13, 1) 前外-3.

Ctenoides lischkei (Lamy) ハネガイ

2) 前外-3, 前外-6, 3) 前外-5, 4) 前外-6.

Limaria orientalis (Adams et Reeve) フクレユキミノ

2) チ-6.

Family **Anomiidae** ナミマガシワ科

Anomia chinensis Philippi ナミマガシワ

1) リ-2〔合弁〕, 4) リ-2, 5) ヌ-1, ル-2〔以上で合弁〕

Monia umbonata (Gould) ナミマガシワモドキ

3) ロ-5.

Family **Glyphaeidae** ベッコウガキ科

Neopycnodonte cochlear (Poli) ベッコウガキ

4)ニ-2〔1塊〕

Family **Ostreidae** イタボガキ科

Crassostrea gigas (Thunberg) マガキ

2) チ-7〔合弁〕, 4) ホ-5〔合弁〕

Saccostrea mordax (Gould) オハグロガキ

3) ワ-4.

Ostrea futamiensis (Seki) クロヒメガキ

3) ニ-2, ホ-1.

Lipha folium (Linnaeus) ワニガキ

2) ニ-8.

Order Unionoida イシガイ目

Family **Unionidae** イシガイ科

Inversidens japanensis (Lea) マツカサガイ

5) チ-7〔合弁〕

Lanceolaria oxyrhyncha (Martens) ササノハ

3) ハ-7〔合弁, 殻皮をとり磨いてある〕

Anodonta (Sinanodonta) woodiana (Lea) ドブガイ

4) チ-3〔合弁〕, リ-4.

Order Veneroida マルスダレガイ目

Family **Lucinidae** ツキガイ科

Epicodakia bella (Conrad) ウミアサガイ

2) ヘ-7〔合弁〕, ト-9〔合弁1個と4片〕

Pillucina (Pillucina) pisium (Dunker) ウメノハナガイ

2) ト-5, ト-6, チ-5〔2片〕, リ-6〔9片〕, 7) 前外-1, 前外-2, 前外-3, 前外-4.

Family **Ungulinidae** フタバシラガイ科

Phlyctiderma japonicum (Pilsbry) ヤエウメ

1) ニ-4〔合弁〕, 4) ロ-2〔2片〕

Family **Chamidae** キクザル科

Chama japonica (Lamarck) キクザル

3) ヌ-8, 平蓋) 70.

Family **Carditidae** トマヤガイ科

Cardita leana (Dunker) トマヤガイ

6) ホ-1, 平蓋) 54, 74, 1) 左外-1, 右外-2, 後外-8, 後外-11, 2) 前外-5, 左外-2, 3) 前外-2, 前外-6, 左外-3, 後外-11, 4) 前外-9, 前外-11, 左外-14, 右外-6, 5) 前外-8, 左外-3, 右外-6, 右外-8, 右外-9, 後外-14, 6) 前外-16, 右外-12, 7) 左外-19, 左外-21, 後外-26, 提) Ⅰ-2, Ⅰ-18, Ⅰ-20, Ⅱ-11.

Family **Cardiidae** ザルガイ科

Vasticardium arenicola (Reeve) キヌザルガイ

平蓋) 2, 23, 37, 7) 後15.

Vasticardium unicolor (Sowerby) チュウザルガイ

6) ニ-5〔合弁〕, 7上) ホ-2〔合弁〕

Corculum cardissa (Linnaeus) リュウキュウアオイ

4) ホ-3, ヘ-4〔以上で合弁〕

Fulvia undatopicta (Pilsbry) マダラチゴトリガイ

1) オ-2〔合弁〕, 2) イ-5〔2片〕, ニ-7, ホ-6, 3) イ-2, イ-3〔合弁〕

Fulvia mutica (Reeve) トリガイ

5) ト-2〔合弁〕.

Family **Mactridae** バカガイ科

Mactra (Mactra) chinensis (Philippi) バカガイ

5) チ-2〔合弁〕.

Mactra (Mactra) veneriformis (Reeve) シオフキ

1) ヌ-2.

Mactra (Telemactra) sp. 〔ナガタマキの幼貝か?〕

2) ニ-2〔合弁〕

Family **Mesodesmatidae** チドリマスオ科

Actactodea striata (Gmelin) イソハマグリ

1) ル-3〔合弁〕, 7) 後17.

Donacilla picta Dunker チドリマスオガイ

6) イ-1, 平蓋) 73, 83, 1) 前外-9, 右外-3, 2) 前外-1, 3) 右外-5, 4) 前外-13, 左外-8, 右外-4, 後外-1, 6) 前外-10, 左外-6, 右外-1, 右外-5, 後外-3, 後外-14.

Family **Cardiliidae** キサガイ科

Cardilia semisulcata (Lamarck) キサガイ

1) ロ-4.

Family **Donacidae** フジノハナガイ科

Chion semigranosus (Dunker) フジノハナガイ

1) リ-9, 2) 左外-3, 右外-11, 後外-2, 3) 後外-5, 後外-6, 右外-12, 7) 左外-22, 提) Ⅰ-17.

Tentidonax kiusiuensis (Pilsbry) キュウシュウナミノコ

2) ホ-4〔合弁1個と1片〕

Latona cuneata (Linnaeus) ナミノコガイ

1) ヌ-3〔合弁〕, 3) ニ-6〔合弁〕, 7) 後外-5.

Family **Tellinidae** ニッコウガイ科

Pharaonalla sieboldii (Deshayes) ベニガイ

5) 前外-5, 提) Ⅱ-2.

Peronidia venulosa (Schrenck) サラガイ

7上) ニ-3〔合弁〕.

Loxoglypta clathrata (Deshayes) シボリザクラ

1) リ-1〔合弁〕, 2) ロ-8, 3) オ-2〔合弁〕, 1) 右外-12, 5) 右外-3, 6) 左外-1, 後外-1, 7) 前外-20, 右外-15, 後外-6, 提) Ⅱ-19.

Loxoglypta transculpta (Sowerby) ハスメザクラ

2) リ-8〔合弁3個と4片〕, 6) 右外-11.

Semelangulus tokubeii (Habe) コメザクラ

2) ホ-4.

Moerella jedoensis (Lischke) モモノハナガイ

1) ト-2〔合弁〕, 2) ホ-9〔合弁〕.

Moerella rutila (Dunker) ユウシオガイ

2) ニ-1〔合弁〕, 5) イ-3〔合弁〕, 7) 後外-12.

Nitidotellina nitidula (Dunker) サクラガイ

1) ホ-3〔合弁2個〕, 1) 前外-4, 2) 右外-4, 6) 左外-2, 7) 前外-19, 7) 左外-16,

提) Ⅱ-12.

Macoma (Macoma) praetexta (Martens) オオモモノハナ

5) ニ-6〔合弁〕, 平蓋) 46, 7) 前外-10.

Macoma (Macoma) incongrua (Martens) ヒメシラトリ

2) ニ-1〔合弁〕.

Macoma (Psammacoma) candida (Lamarck) アワジチガイ

5) ワ-7〔合弁〕.

Rexithaerus sectior Oyama サギガイ

5) ル-2〔合弁〕.

Family **Psammobiidae** シオサザナミ科

Gari truncata (Linnaeus) シオサザナミ

3) ヘ-7〔合弁〕.

Hiatula atrata (Reeve) アケボノキヌタ

6) ヌ-1〔合弁〕.

Nuttalla japonica (Reeve) イソシジミ

6) リ-3, ヌ-3〔以上で合弁, 殻の外側に「平蜆」と朱書〕

Family **Solecurtidae** キヌタアゲマキ科

Solecurtus divaricatus (Lischke) キヌタアゲマキ

1) ハ-5〔合弁〕, 4) ホ-4〔合弁〕, 6) ロ-1.

Family **Solenidae** マテガイ科

Solen (Solen) gordonis (Yokoyama) アカマテ

4) ト-3〔合弁〕.

Solen (Ensisolen) roseomaculatus Pilsbry バラフマテ

2) ト-4〔2片〕, 3) ヌ-7〔合弁〕.

Family **Cultellidae** ユキノアシタ科

Siliqua pulchella (Dunker) ミゾガイ

5) ハ-1〔合弁〕

Ensiculus cultellus (Linnaeus) タカノハガイ

2) ヘ-4〔2片〕.

Family **Corbiculidae** シジミ科

Corbicula (Corbicula) japonica Prime ヤマトシジミ

5) ホ-3〔合弁〕.

Family **Veneridae** マルスダレガイ科

Venus (Ventricolaria) toreuma Gould マルスダレガイ

3) チ-3〔2片〕

Venus (Ventricoloidea) foveolata (Sowerby) ビノスガイモドキ

1) ヌ-8〔合弁〕.

Antigona lamellaris Schumacher サツマアサリ

5) ホ-8.

Anomalocardia (Anomalocardiscus) squamosa (Linnaeus) シオヤガイ

3) イ-3〔合弁〕.

Placamen tiara (Dillwyn) ハナガイ

5) ロ-7〔合弁〕.

Veremolpa micra (Pilsbry) ヒメカノコアサリ

2) ニ-6, ヘ-1〔合弁〕

Veremolpa costellifera (Adams et Reeve) チリメンカノコアサリ

2) イ-4〔2片〕, 平蓋) 35, 提) Ⅰ-1.

Veremolpa laericostata (Kuroda) オオギカノコアサリ

2) イ-4.

Glycydonda marica (Linnaeus) カノコアサリ

2) ホ-6.

Protothaca (Notochione) jedoensis (Lischke) オニアサリ

3) リ-4〔合弁〕, ワ-2〔合弁〕, 6) 左外-5.

Protothaca (Novatheca) euglypta (Sowerby) ヌノメアサリ

5) ニ-8, 〔合弁〕.

Gafrarium divaricatum (Gmelin) ケマンガイ

1) ニ-1〔合弁〕, 3) ル-3.

Circe scripta (Linnaeus) シラオガイ

1) イ-2〔合弁〕, 5) オ-6〔合弁〕

Pitar (Pitarina) lineolatum (Sowerby) ガンギハマグリ

2) ヨ-2〔合弁〕, 4) ハ-2〔合弁〕.

Pitar (Pitarina) sulfureum (Pilsbry) イオウハマグリ

5) ホ-6〔合弁〕

Dosinorbis (Phacosoma) japonicns (Reeve) カガミガイ

1) イ-5〔合弁〕, リ-4〔合弁〕, 6) ヘ-4〔合弁〕, 7上) ロ-1〔合弁2個〕, 7下) 2〔合弁〕.

Paphia (Paphia) euglypta (Philippi) スダレガイ

4) イ-1〔合弁〕, 5) ヘ-3, 6) イ-3〔合弁〕, ハ-5, リ-1, 7上) イ-2〔合弁〕.

Paphia (Paphia) schnelliana (Dunker) オオスダレ

1) ヌ-1〔合弁〕.

Paphia (Paphia) amabilis (Philippi) サツマアカガイ

2) ホ-8, 6) リ-1, 提) Ⅰ-3.

Paphia (Paphia) vernicosa (Gould) アケガイ

3) オ-3〔合弁〕

Paphia (Neotapes) undulata (Born) イヨスダレ

2) チ-2〔合弁〕, 3) チ-1, 5) リ-8〔合弁〕, 提) Ⅱ-5.

Tapes platyptycha (Pilsbry) スリガハマ

5) ワ-2〔合弁〕.

Ruditapes philippinarum Adams et Reeve アサリ

1) チ-1〔合弁〕, 2) イ-4, ワ-5〔合弁〕, カ-5〔合弁〕, 3) ニ-1〔合弁〕, ニ-3〔合弁〕, ヌ-3〔合弁〕, 5) ロ-3〔合弁〕, ハ-5〔合弁〕, 6) ヘ-1〔合弁〕, 平蓋) 20, 29, 2) 左外-7, 3) 右外-2, 5) 前外-6, 左外-12, 6) 前外-2, 前外-3, 左外-3, 後外-18, 7) 前外-16, 右外-4.

Ruditapes variegata (Sowerby) ヒメアサリ

提) Ⅱ-16.

Gomphina (Macridiscus) veneriformis (Lamarck) オキアサリ

2) イ-4〔2片〕, ロ-5, ニ-5, ワ-8, 3) チ-1, ヌ-2〔合弁〕, ル-2, 4) ホ-1〔合弁〕, 5) リ-3〔合弁〕, リ-5, ワ-6〔合弁〕, 平蓋) 43, 50, 5) 左外-5, 6)前外-9, 7)前外-11.

Gomphina (Macridiscus) melanaegis (Römer) コタマガイ

7上) ハ-4〔合弁〕

Irus mitis (Deshayes) マツカゼ

3) リ-3〔合弁2個〕, 5) ト-1, ト-2〔以上で合弁〕

Callista chinensis (Holten) マツヤマワスレ

1) ロ-7〔合弁〕, ホ-7, ヘ-7〔以上で合弁〕, 2) ハ-5, ニ-5, 1) 前外-6, 3) 右外-3, 4) 前外-10, 5) 後外-7.

Saxidomus purpurata (Sowerby) ウチムラサキ

2) オ-8, 5) ニ-1〔合弁〕

Cyclosunetta menstrualis (Menke) ワスレガイ

1)ロ-3〔合弁1個と1片〕, ル-1〔合弁〕, 2)ロ-8〔2片〕, オ-9, 3)ル-5, 6)チ-3, リ-2〔以上で

合弁，内側を金泥で塗る〕，平蓋）3，1）左外-9，後外-5，2）前外-9，右外-1，右外-5，後外-7，3）右外-10，後外-3，後外-4，後外-10，4）前外-18，右外-7，後外-10，5)左外-4．左外-13，後外-13，6)後外-5，後外-6，7）前外-5，左外-3，左外-8，左外-18，後外-1，後外-14．

Cyclosunetta concinna (Dunker) シマワスレ

3）ル-5，6）前外-13，右外-4，後外-12，7）右外-5，提）Ⅰ-12．

Sunettina solanderii (Gray) ベニスワレ

1）左外-4，3）左外-2，6）右外-2，右外-9，提）Ⅱ-7．

Meretrix lusoria (Röding) ハマグリ

2)ヘ-5〔合弁2個〕，ヘ-7〔合弁〕，3）イ-3，イ-5，ホ-7，平蓋）18，40，47，57，89，1)前外-15，左外-5，2)前外-2，3)後外-9，4)前外-1，前外-14，左外-2，後外-12，6)前外-15，後外-8，7)前外-21，左外-4，提）Ⅰ-10．

Family **Petricolidae** イワホリガイ科

Claudiconcha monstrosa (Gmelin) ヌノメセミアサリ

3）ワ-3〔2片〕

Claudiconcha japonica (Dunker) セミアサリ

4）イ-2，5）イ-2．

Order Myoida オオノガイ目

Family **Corbulidae** クチベニ科

Anisocorbula venusta (Gould) クチベニデ

2）ヘ-7〔合弁〕，チ-4．

Solidicorbula erythrodon (Lamarck) クチベニ

3）ニ-5，5）ワ-8〔合弁〕．

Family **Pholadidae** ニオガイ科

Barnea (Anchomosa) manilensis (Philippi) ニオガイ

5）ワ-4〔合弁〕

Penitella kamakurensis (Yokoyama) カモメガイ

1）チ-7〔合弁〕．

Jauannetia (Jouannetia) cumingii (Sowerby) スズガイ

3）ロ-1〔合弁〕．

Order Phaladomyoida ウミタケガイモドキ目

Family **Lyonesiidae** サザナミガイ科

Agriodesma navicula (Adams et Reeve) オビクイ

3）リ-1〔合弁〕．

Family **Pandoridae** ネリガイ科

Pandorella wardiana (A.Adams) ヒラネリガイ

3）ヘ-1〔合弁〕．

Family **Myochamidae** ミツカドカタビラガイ科

Myadora japonica (Habe) ヒロカタビラガイ

2）ト-4．

以下は未同定・不明

2）イ-2，ニ-6，1）後-6，後-7，7）前-22，後-9，後-19．

Class Cephalopoda 頭足綱

Order Octopoda 八腕目

Family **Argonautidae** アオイガイ科

Argonauta argo Linnaeus アオイガイ

5）ロ-8．

Argonauta hians 〔Lightfoot〕 タコブネ
4) ヘ-1, 5) チ-5, 7下) 3.

Class Polyplacophora 多板綱
Order Ischnochitonida ウスヒザラガイ目
Family **Mopaliidae** ヒゲヒザラガイ科
Placiphorella japonica (Dall) ババガセ
4) イ-3〔3個体〕

第 2 部 その他の動物

Phylum Coelenterata 腔腸動物門
Class Hydrozoa ヒドロ虫綱
Order Hydroida ヒドロ虫目
Family **Hydractiniidae** ウミヒドラ科
Hydrissa sodalis (Stimpson) イガグリガイ
6) ト-5.
Class Anthozoa 花虫綱
Order Stolonifera 根生目
Family **Tubiporidae** クダサンゴ科
Tubipora musica Linnaeus クダサンゴ
4) ホ-2.
Order Madreporaria イシサンゴ目
Family **Fungiidae** クサビライシ科
Gen. et sp. indet.〔クサビライシ類の1種〕
4) ハ-1.
Fungia sp.〔クサビライシの 1種〕
7下) 3.
Family **Caryophylliidae** チョウジガイ科
Deltocyathus vaughani Yabe et Eguchi コザラサンゴ
1) ヌ-5.
Family **Dendrophylliidae** キサンゴ科
Turbinaria sp.〔スリバチサンゴの1種〕
7下) 1.〔2個〕, 2.

Phylum Annelida 環形動物門
Class Polychaeta 多毛綱
Family **Chaetopteridae** ツバサゴカイ科
Gen. et sp. indet.〔ツバサゴカイ類〕
5) イ-5〔棲管2本〕
Family **Serpulidae** カンザシゴカイ科
Gen. et sp. indet.〔カンザシゴカイ類〕
6) ヌ-5〔棲管, ノコギリウニの棘に付着のもの〕

Phylum Arthropoda 節足動物門
Class Crustacea 甲殻綱
Subclass Cirripedia 蔓脚亜綱

Family **Lepadidae** エボシガイ科

Lepas anatifera Linnaeus エボシガイ

3) ル-1, 5) ニ-5, ホ-2.

Family **Scalpellidae** ミョウガガイ科

Pollicipes mitella (Linnaeus) カメノテ

1) オ-9, 5) ハ-8〔2個〕.

Family **Balanidae** フジツボ科

Tetraclita squamosa japonica Pilsbry クロフジツボ

1) ホ-1〔周殻，殻口に「汐尻」と墨書した小紙片をはさむ〕，5（オ-2)(cf.)〔周殻破片〕

Balanus trigonus (Darwin) サンカクフジツボ

1) ヘ-7〔周殻，ムシエビに付着〕，4) リ-5〔周殻約10個，一塊〕 6) ヌ-5〔周殻4個，ノコギリウニの棘に付着〕

Balanus kondakovi Tarasov et Zevina ドロフジツボ

2) オ-5〔蓋板2個体分〕

Coronula diadema (Linnaeus) オニフジツボ

4) ト-2〔周殻〕，7下) 2〔周殻3個〕

Phylum Tentaculata 触手動物門

Class Bryozoa 苔虫綱

Family **Reteporidae** アミコケムシ科

Iodictyum axillare (Ortmann) ベニアミコケムシ

6) ハ-1.

Class Brachyopoda 腕足綱

Family **Lingulidae** シャミセンガイ科

Lingula unguis (Linnaeus) ミドリシャミセンガイ

提) Ⅰ-15.

Family **Laqueidae** ラクエウス科

Laqueus rubellus (Sowerby) ホウズキチョウチン

5) ト-4.

Laqueus blanfordi (Dunker)

5) ハ-6.

このほか腕足類化石3個，7下)2にあり．未同定．

Phylum Echinodermata 棘皮動物門

Class Crinoidea ウミユリ綱

Gen. et sp. indet.

7下)1〔分解〕

Class Ophiuroidea クモヒトデ綱

Gen. et sp. indet.

2) ト-2〔中央盤〕

Class Echinoidea ウニ綱

Order Cidaroida キダリス目

Family **Cidaridae** フトザオウニ科

Prionocidaris baculosa annulifera (Lamarck) ノコギリウニ

6) ヌ-5〔棘2本〕

Order Diadematoida ガンガゼ目

Family **Diadematidae** ガンガゼ科

Diadema sp.〔ガンガゼの1種〕

6) チ-1〔棘多数〕

Order Echinoida サンショウウニ目

Family **Temnopleuridae** サンショウウニ科

Temnopleurus toreumaticus (Leske) サンショウウニ

4) ニ-5〔裸殻〕

Family **Strongylocentrotidae** オオバフンウニ科

Hemicentrotus pulcherrimus (A.Agassiz) バフンウニ

2) へ-3〔裸殻2個〕

Family **Echinometridae** ナガウニ科

Anthocidaris crassispina (A.Agassiz) ムラサキウニ

5) ホ-5〔裸殻，棘もわずかに残存〕

Heterocentrotus mamillatus (Linnaeus) パイプウニ

7下) 3〔裸殻〕

Order Clypeasteroida タコノマクラ目

Gen. et sp. indet.

1) ト-6〔周口部縁の殻板〕

Family **Clypeasteridae** タコノマクラ科

Clypeaster sp.（又はspp.）

2) ヨ-6〔顎骨対〕, 3) ハ-2〔顎骨対〕, 5) チ-1〔顎骨対〕.

Family **Scutellidae** ハスノハカシパン科

Scaphechinus mirabilis A.Agassiz ハスノハカシパン

1) ホ-5〔裸殻〕

Scaphechinus brevis (Ikeda) ナミベリハスノハカシパン

2) ト-2〔裸殻2個〕, ト-7〔裸殻2個〕, 7) ハ-3〔裸殻2個〕.

Phylum Vertebrata 脊椎動物門

Myliobatis sp.〔軟骨魚類，トビエイ科，トビエイの1種〕

4) イ-4〔顎歯（正中歯及び側歯の連結したもの)〕

Mugil cf. *cephalus* Linnaeus〔硬骨魚類，ボラ科，ボラの1種〕

6) チ-3〔鰓蓋骨，「末廣」と墨書あり〕

Sus scrofa Linnaeus イノシシ

7下) 3〔下顎右側犬歯〕

第 3 部 植 物

Lithophyllum okamurai (Foslie) ヒライボ〔紅藻，サンゴモ科（石灰藻)〕

3) へ-3, 4) ハ-3.

Buckleya lanceolata (Sieb. et Zucc.) ツクバネ〔顕花植物，ビャクダン科〕

4) ロ-2〔果実付き小枝〕

Phaseolus radiatum Linnaeus var. *aurea* Prain アズキ〔顕花植物，マメ科〕

2) へ-4〔3個〕, ヌ-1, ヌ-6, ヌ-7〔2個〕, ル-4, ル-7〔16個〕, カ-4, ヨ-4〔4個〕 6) ハ-5, ニ-5〔8個〕, ヌ-5.〔以上すべて種子〕

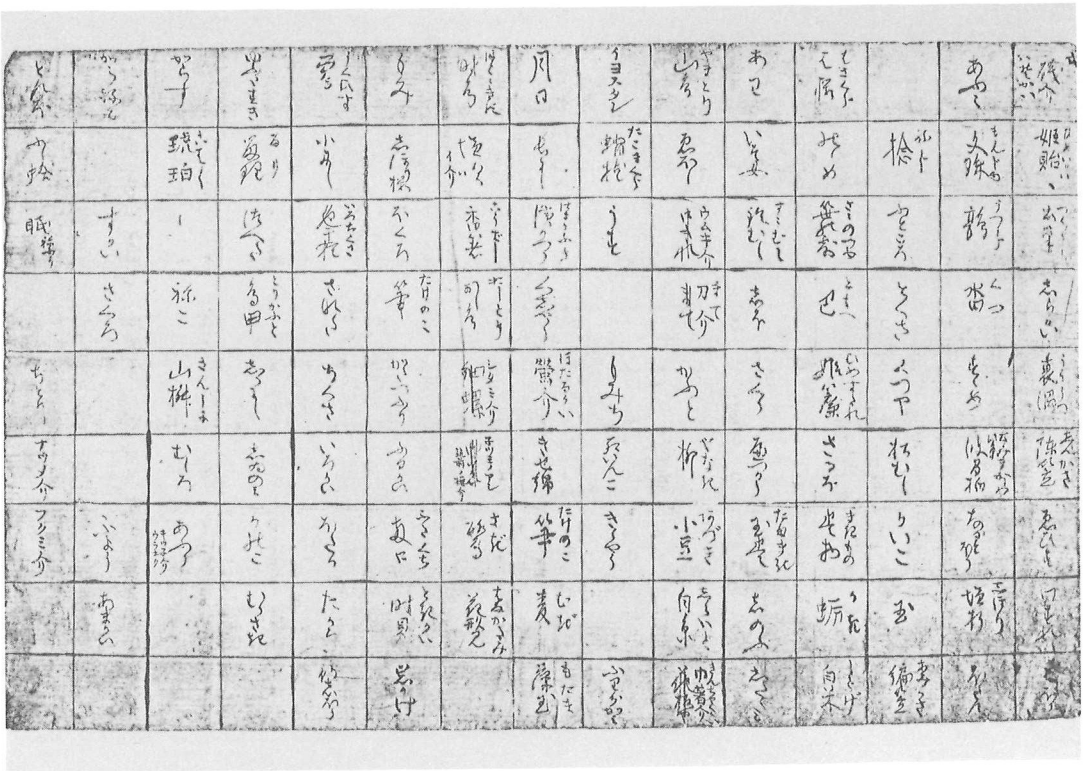
貝類標本に付属していた

古目録

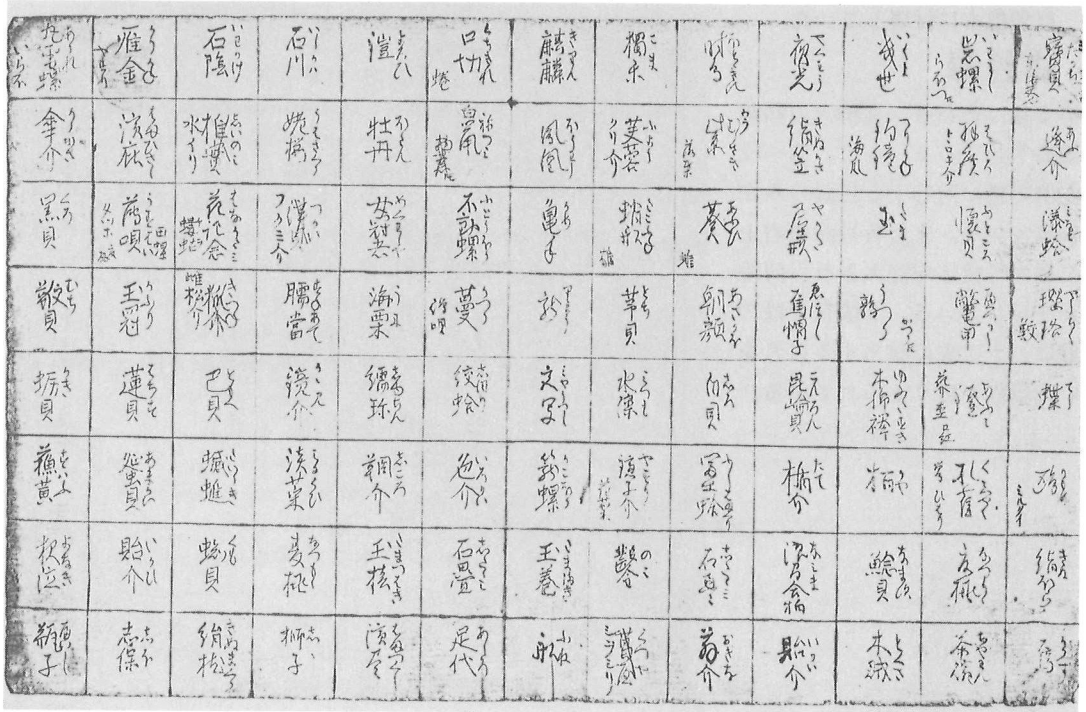
標本箱に合わせ、実物大の和紙に墨書されている。ただ、第一段目左側の箱に対応する目録のみが失われている。また各目録の右上端には朱で数字が記入され、何段目かを示している。7段目下段の目録は、十二支に該当する貝名を書いた紙片が破りとられている。

第1段目（右）

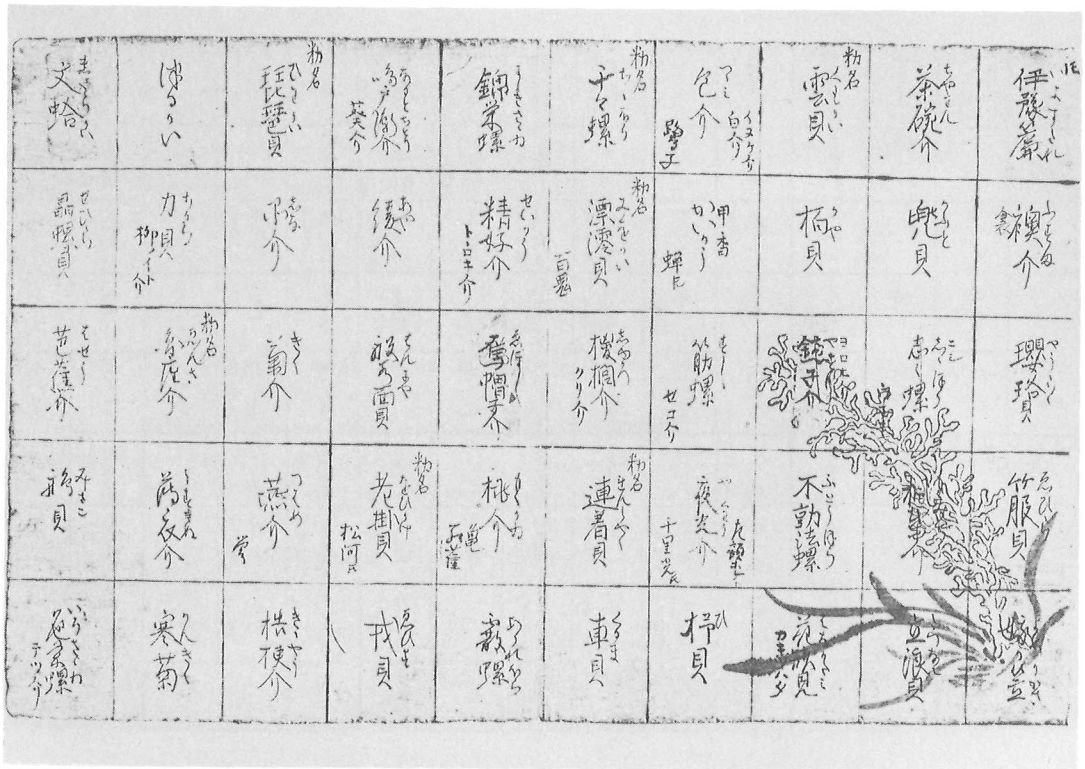
第2段目



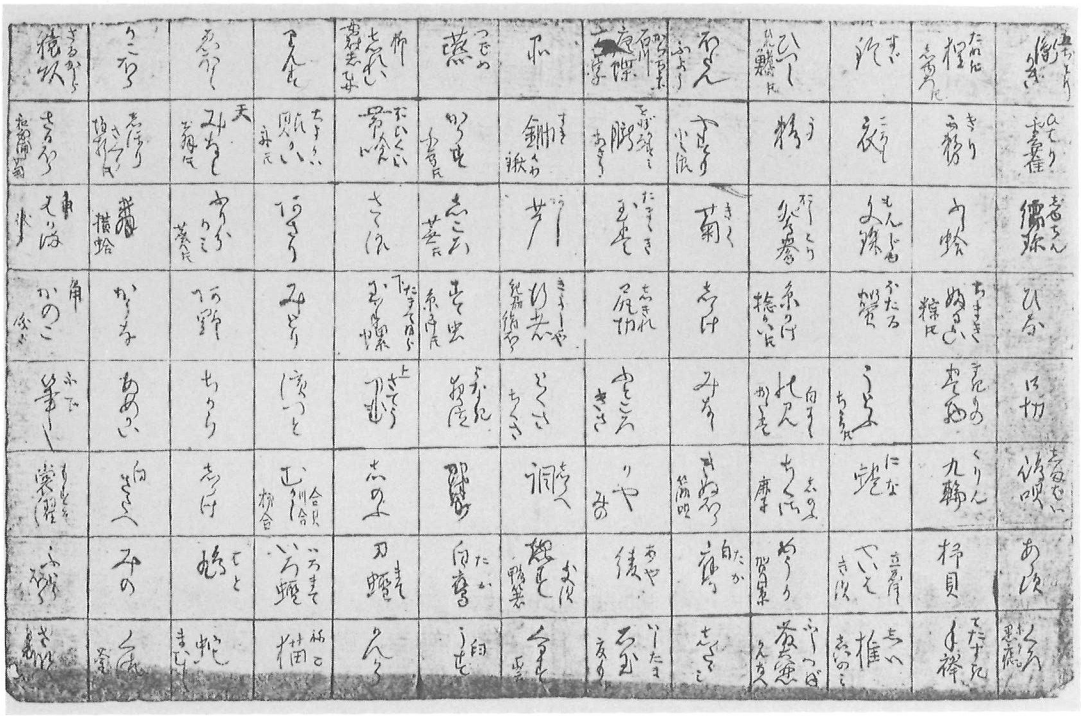
第３段目



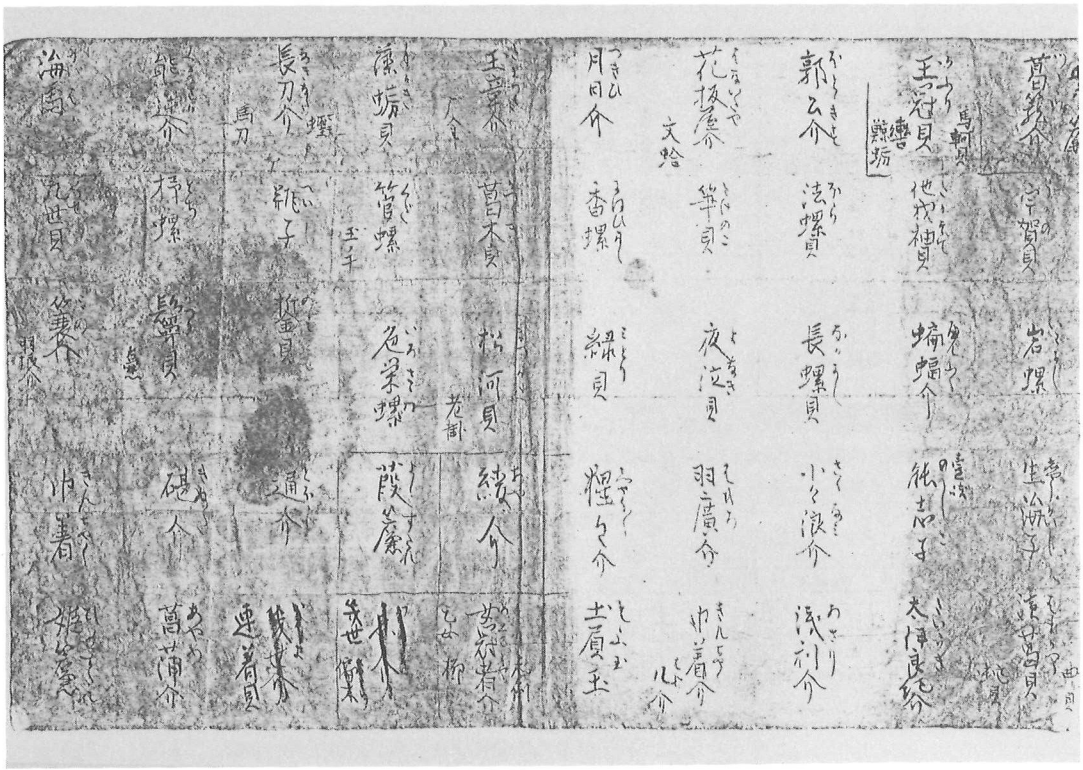
第４段目



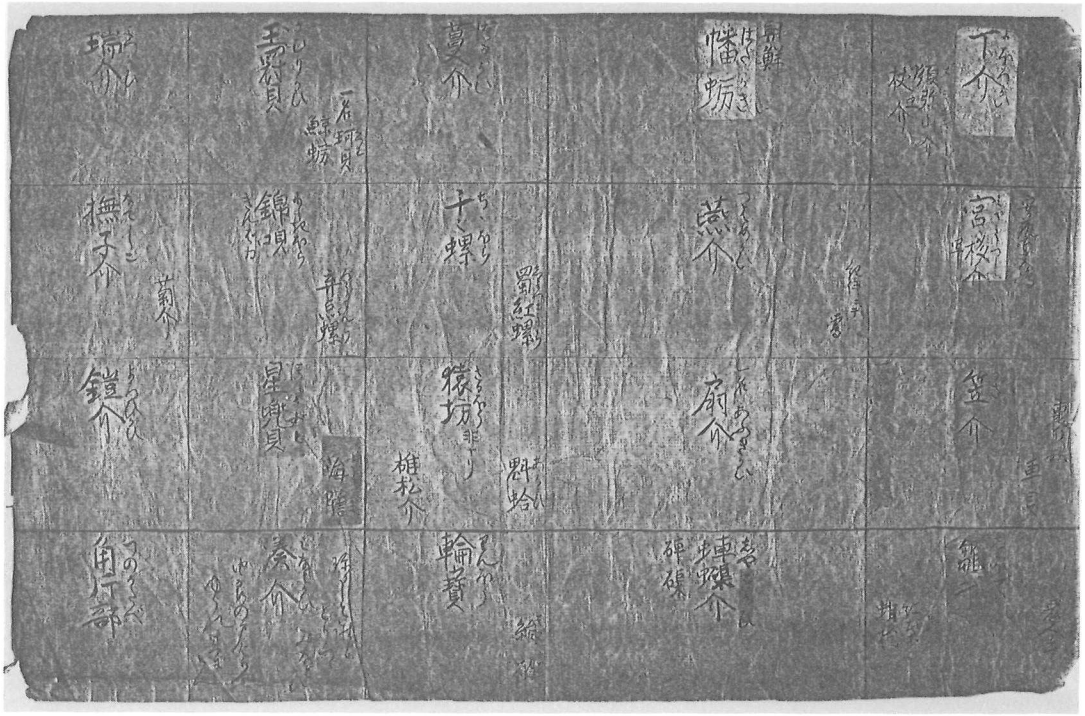
第５段目



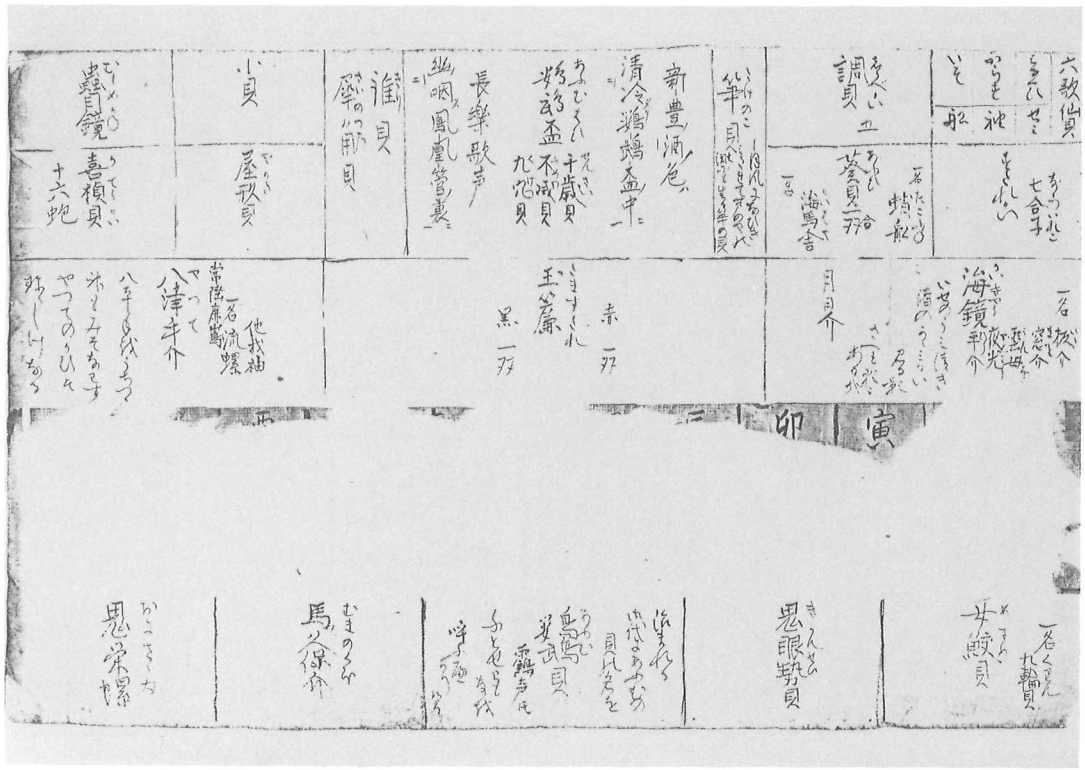
第６段目



第７段目（上）



第７段目（下）



木村蒹葭堂略年譜（博物学関係）

＊蒹葭堂日記のある年

柴田保彦　編

■堀江時代（宝暦・天明まで）

元文元	1736		○11月28日、大坂北堀江に生れる〔巽斎翁遺筆．以下，遺筆と略記〕。
延享4	1747	12歳	○この頃（十二、三歳）、父の吉右衛門と共に、京都の津島如蘭（恒之進・桂庵）（松岡玄達の門人）に会う〔遺筆〕
寛延元	1748	13歳	• 堺の安達喜之による『金魚養玩草』刊。寛延2年には後編の『金草秘訣録』刊。
寛延3	1750	15歳	○父死去〔遺筆〕。家業（酒造）をつぐ。
寛延4	1751	16歳	○母につれられて、京都で如蘭に入門。如蘭は、この頃から毎年大坂で本草会を催す〔遺筆〕。 • 大枝流芳『貝盡浦の錦』大坂で刊。
宝暦3	1753	18歳	• 京都にて小野蘭山、塾を開く。
宝暦4	1754	19歳	• 津島如蘭、大坂で没す。 • 大口美明（灌畦）『薬品辨惑』大坂で刊。
宝暦6	1756	21歳	○森示子と結婚〔遺筆〕
宝暦7	1757	22歳	• 松岡恕庵（玄達）『怡顔斎桜品』大坂で刊。 • 平賀源内の企画で、田村藍水、江戸湯島で薬品会を開く。この頃より物産会盛ん。 • 大槻玄沢生れる。
宝暦8	1758	23歳	• 松岡恕庵『怡顔斎介品』京都で刊。 • 島田充房『花彙』（草部巻一，二）刊。 • 翌年にかけ、リンネの『自然分類大系(Systema Naturae)』刊。
宝暦10	1760	25歳	○この頃、邸内で井戸を堀る。一片の芦（蒹葭）の根が出たので、これぞ古の浪華の芦と大いに喜び、家号を蒹葭堂とした〔遺筆〕。 ○4月、大坂の浄安寺にて、戸田旭山（津島如蘭の門人）が物産会を開き、蒹葭堂も出品。平賀源内も出品している〔文会録〕。 • 浅尾遠視『鮫皮精鑒録』大坂で刊。 • 松岡恕庵『梅品』京都で刊。 • 平賀源内、高松候の命で、加太・和歌浦・塩津・由良から田辺・瀬戸まで貝類採集。
宝暦11	1761	26歳	• 戸田旭山、大坂で物産会。『浪華物産会目録』刊。 • 豊田養慶（岩国の人）京都で物産会。
宝暦13	1763	28歳	• 鑑古堂・不磷斎、京都で物産会。 • 平賀源内『物類品隲』刊。 • 小野蘭山『花彙』（草部巻三～四，木部巻一～四）刊。
明和元 (宝暦14)	1764	29歳	• 戸田旭山、大坂で物産会。 • 鑑古堂・五枝軒、京都で物産会。 • 平賀源内、京都の吉文屋浄貞の『五百介図』（大坂天満宮神主　渡辺主税蔵の写本）を写し、序文を書いた。刊行は無かったらしい。（蒹葭堂所蔵の『浄貞五百介図』写本は、のち岩瀬文庫本となり、昭和46年に京都光楽堂から写真複写本がでた）
明和2	1765	30歳	• 平賀源内『火浣布略説』大坂で刊。 • 島田充房・小野蘭山『花彙』京都にて再刊。
明和3	1766	31歳	○伊良子光顕、京都で物産会。蒹葭堂・木内石亭が品評執事 〔上田穣,1979.ルーツ日本の博物館:2〕
明和8	1771	36歳	○明の宋應星『天工開物』の和刻本、大坂で出版。これは蒹葭堂蔵本（崇禎本）により、備前の江田益英が校訂し訓点を施したもの。儒医の都賀庭鐘（上田秋成の師）が撰者となっている。
安永元	1772	37歳	• 松岡恕庵『怡顔斎蘭品』京都で刊。 • 田沼意次が老中となる（～1786）。いわゆる田沼時代。

安永２	1773	38歳	○蒹葭堂、『大同類聚方』を校正刊行。 ・木内石亭（小繁）『雲根志』（前編）、大坂で刊。
安永３	1774	39歳	・春帆堂主人『養鼠玉のかけはし』大坂で刊。 ・杉田玄白ら『解体新書』刊。
安永４	1775	40歳	○３月、『貝よせの記』を大坂で刊行す。なかに『渚の玉』をのせる。（35頁注12参照） ○木内石亭が蒹葭堂を訪問〔白井光太郎，1908による〕（35頁注10参照） ・大坂で物産会
安永５	1776	41歳	・ツンベルグ、江戸参府の際に大坂を通過。 ・平賀源内、エレキテル完成。
安永７	1778	43歳	○母死去〔大應寺過去帖．高梨光司，1926：16〕 ・山本亡羊生れる。
安永８＊	1779	44歳	○２月、“駝鳥見物”〔蒹葭堂日記．以下，日記と略記〕。 ○４月、京都にて蘭山に会う。９月２日から京都へ出発し26日帰宅。この間しばしば小野蘭山の許へかよう〔日記〕。５日から20日までは、日記欄外に、大和本草の「湿草」「灌本」「魚部」「鳥部」の書きこみが有り、蘭山に講義をうけたものか。 ・木内石亭『雲根志』（後編）刊。 ・平賀源内、牢死。
安永９＊	1780	45歳	○蒹葭堂校訂、加藤謙斎『増訂片玉六八本草』京都にて刊。 ・京都で、蘭山による大和本草の連続講義はじまる。
元明元 （安永10）	1781	46歳	○中井履軒『顕微鏡記』あらわす（未刊か）。蒹葭堂所蔵の舶来顕微鏡を模して、友人の油屋吉右衛門が製作したものにもとずく。
天明２＊	1782	47歳	○２月、土佐候に“文貝七重”を見せる〔日記〕。 ○４月、蘭山に会う〔日記〕。
天明３＊	1783	48歳	○３月、蘭山来訪〔日記〕。 ○11月、エレキレル（エレキテル）を見る〔日記〕。
天明４＊	1784	49歳	○２月、伊勢長島藩主増山河内守（雪斎）に会う〔日記〕。（閏正月にも「増山河内守宴」と日記にあり） ○３月、小野蘭山に内門（特別の門人）許されるにつき誓盟状をしたためる〔国立国会図書館蔵〕 ○８～10月、江戸旅行〔日記〕。 ○10月、紀州田辺吉野屋惣兵衛、貝見物にくる〔日記〕。 ・ツンベリー『日本植物誌』刊。
天明５＊	1785	50歳	○２月、シャチの牙とどく。八代石玉・鶏冠石・和ハンメウとどく〔日記〕。 ○３月、京都にて蘭山に会う。 ○10月、平戸藩主松浦壱岐守（静山，甲子夜話の著者）に会う〔日記〕。 ○同月、長崎へ行く途中の大槻玄沢は蒹葭堂の家へ訪れ〔日記〕、『六物新志』の原稿をみせる。蒹葭堂は出版を約す〔木村陽二郎，1974，日本自然誌の成立：157による〕。 ○12月、佐藤成裕（中陵）来訪〔日記〕
天明６＊	1786	51歳	○２月、“唐鳥見物”〔日記〕。 ○３月、長崎からの帰途、大槻玄沢再訪〔日記〕。この年、彼の『六物新志』は司馬江漢の図を入れ、稿なる〔盤水年譜〕。天明７年刊。 ○４月、松浦静山来訪〔日記〕。 ○閏10月、ウニコールとどく〔日記〕。 ○12月、『一角纂考』の稿なる。これは寛政７年（1795）に刊行された。 ・幕府は酒造米の量を制限し、従来の二分の一とした。
天明７＊	1787	52歳	○２月、近江にて木内石亭宅へ泊る。つづいて３月、岐阜金生山へ登る〔日記〕。 ○３月、長島にて増山雪斎に会い、京にて蘭山に会う〔日記〕。 ○大槻玄沢の『六物新志』を蒹葭堂蔵版として出版〔中野操，1961，木村蒹葭堂をめぐる医家たち（四）〕 ・森島中良『紅毛雑話』大坂で刊。

			・定延子『珍翫鼠育艸』大坂で刊。 ・松平定信が老中となり、寛政の改革はじまる。この年、酒造米の制限きびしく、さらに三分の一とされた。この年、大坂うちこわし。
天明８*	1788	53歳	○８月、長崎へ向う司馬江漢来訪、蒹葭堂宅へも泊る〔日記〕。江漢は銅版画『両国の図』を見せる〔江漢西游日記〕。
寛政元* （天明９）	1789	54歳	○２月、長崎からの帰途、司馬江漢再訪〔日記〕。 ○10月、松浦静山と平戸邸で会う〔日記〕。 ○11月、密告により、酒過造（酒造米半減の令違反）のかどで取調べをうける。
■川尻村時代（酒過造事件）			
寛政２*	1790	55歳	○３月、酒造造事件に関し、蒹葭堂の支配人は大坂三郷から追放、酒造具一切と酒造のの権利はとりあげとなる〔甲子夜話〕(36頁注21参照) この年，異学の禁。 ○７月、ヒクイドリ見物〔日記：駝鳥とあり〕。 ○９月、京にて小野蘭山に会う。〔日記〕。 ○10月、大坂を去って伊勢川尻村（現在は四日市市）へ転居。途中、蘭山に会う〔日記〕。
寛政３*	1791	56歳	○９月、一時大坂へもどり、途中、木内石亭宅へ泊る。京では５日連続して蘭山に会っている〔日記〕。
寛政４	1792	57歳	・紀州藩医学館に本草局併置。小原良貴（桃洞）が主宰。 ・畔田伴存（翠山）生れる（桃洞の門人，堀田龍之助の師)。
■呉服町時代（寛政）			
寛政５*	1793	58歳	○１月、川尻村出発し２月に大坂へ帰る。途中、小野蘭山・円山應擧に会う〔日記〕。大坂では備後町３丁目に仮寓〔西游雑志．水田紀久，1972：491による〕(36頁注18参) ○３月、呉服町へ転居〔日記〕。同月、ロバ見物〔日記〕。 ○４月、高野陸沈亭に“萬国介品”をみせる〔西游雑志．水田紀久，1972：492による〕。 ○10月、“象見物”〔日記〕。
寛政６*	1794	59歳	○９月、和歌山へ旅行。和歌山城吹上御殿にて“御貝拝見”〔日記〕 ○５月〔日記〕、江戸参府帰途のドイツ人〔岡田，1935による〕(36頁注９）医師ケルレル来訪〔白井光太郎，1908による〕〔日記には，紅毛……来とある〕
寛政７	1795	60歳	○蒹葭堂の『一角纂考』刊。（桂川甫周、天明６年序。大槻玄沢，天明７年序)。
寛政８*	1796	61歳	○５月、柚木常盤来訪〔日記〕。 ・シーボルト生れる。
寛政９	1797	62歳	○10月、近江石山での奇石会に出品〔出品目録．西遊寺蔵〕 ・平瀬徹斎『日本山海名物図会』大坂で刊（序文は宝暦４年)。 ・木村俊篤『橘品類考』大坂で刊。
寛政10*	1798	63歳	○10月、小原桃洞来訪〔日記〕 ○11月26日（この日から西暦1799）大槻玄沢が社中で「新元会」を催し、一枚刷の『蘭学者相撲番附』をつくる。蒹葭堂は、「西の前頭二十六枚目　大坂　木村多吉良」ととしてのっている〔早稲田大学図書館蔵〕。
寛政11	1799	64歳	○蒹葭堂序『日本山海名産図会』大坂にて刊。本書の著者は蒹葭堂とされることも多い。(複刻本が昭和45年に社会思想社より出版され、編者の千葉徳爾氏の考察がある。)
寛政12	1800	65歳	○８月、石川大浪が筆写したヒポクラテス像を小石元俊へとどける。 〔上田穣，1982．洋風文化の受容と伝播(日本洋学史の研究6)：62〕
享和元*	1801	66歳	○４月、薩摩邸で“紫水晶拝見”〔日記〕 ○10月、江戸からの帰途、小原桃洞来訪〔日記〕。師の蘭山と共にこの年２回目の採薬行に参加していたのである。 ・木内石亭『雲根志』（三編）刊。この年石亭79歳。 ○６～10，12月、大田南畝（蜀山人）訪れる〔日記〕。銅座役人として大坂に滞在していたのである。このときの蒹葭堂との問答をもって『遡遊従之』（享和２）をつくる。
享和２*	1802	67歳	○正月10日まで日記記入有り。13日から病床、25日没。大應寺へ葬られ、夏に墓碑ができる。

大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第14集

「木村蒹葭堂貝石標本」

昭和57年 3 月31日発行

編集・発行 大阪市立自然史博物館
546 大阪市東住吉区長居公園1番23号

印　刷 光栄堂印刷株式会社

Kimura-Kenkadô's Collection of Fantastic Stones and Shells

(late 18th century)

Special Publications
from the
Osaka Museum of Natural History
Vol. 14

Osaka 1982

大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第14集 木村蒹葭堂貝石標本